

---

# La promessa 約束

仲村 歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L a p r o m e s s a 約束

### 【Nコード】

N 5 9 6 5 T

### 【作者名】

仲村 歩

### 【あらすじ】

夏海 なつみ 杏 あん はトップアイドル。そんな彼女は窮屈な生活が嫌で移動中の空港で逃げ出した。

そして空港で見知らぬ男・桜木 凜に助けられて石垣島に逃げ出す事に成功するが、

どうしたら良いのか判らずに凜のもとに転がり込んだ。

そしてお互いに言えない秘密を抱えながら少しずつ2人は近づいていくが

2人には約束に関する大きなトラウマを抱えていた。



「アンコール!」「アンコール!」

「アンコール!」「アンコール!」「アンコール!」「アンコール

!」

「アンコール!」「アンコール!」「アンコール!」「アンコール  
!」「アンコール!」「アンコール!」

「本日、ご来場ありがとうございました。当コンサートは、これに  
て終了とさせて頂きます」

人気アイドル夏海 杏なつみ あんのコンサートが終わったばかり  
で東京ドームには大勢のファンの熱気が立ち込めていた。

「お疲れ様、杏<sup>アツ</sup>」

「お疲れ様です」

「大丈夫なの?元氣無いわね」

「少し、疲れたただから……」

「そうなんだ、それならいいけれど。早く着替えてね、直ぐ移動す  
るからね」

「分かりました。西川マネージャー」

杏は浮かない顔で控え室に向かい着替えを済ませ、西川と車で空港  
に向かった。

「マネージャー、ちょっとトイレに……」

「分かったわ、急ぎなさい」

「はい」

杏は空港のトイレに入り考えをめぐらせている。

「もうこんな生活は嫌! どうにかして自由に……」

杏がトイレから出ると西川は携帯で打ち合わせをしているようで、  
杏には気付いていないようだった。

取り巻きのボディガード達の姿も見えなかった。

「今のうちに」

杏は気付かれないように長い髪を3つ編みにして伊達メガネを掛けて西川の後ろをすり抜けた。

「遅いわね。杏は、何をしているのかしら？」

西川がトイレを覗くとトイレには誰も居なかった。

「やられたわ」

西川は直ぐに携帯でボディーガードに連絡をする。

「杏が逃げ出したわ。直ぐに確保しなさい」

その頃、杏は第1ターミナルの南ウイングに居た。

辺りを見回しながら追っ手を気にしている。

西川とボディーガード達は手分けして杏を探し回っていた。

「やつぱり、暖かい南だね。ヤバイ、来たよ。どうしよう」

杏が隠れている観葉植物の近くでスーツ姿の営業マン風の男と話している、ジーパンに黒いパーカーを着て紺のキャップを被っている背の高い30代くらいの男が目に入った。

そしてその男の腕にいきなりしがみ付いた。

「なんだ？」

男は冷めた目で杏に言い放った。

「あの、ごめんなさい」

不審に思い男が辺りを見渡すと厳つい男達が誰かを探していた。

「それでも着て、帽子でも被っておけ」

男が着ていたパーカーを杏に掛けて帽子を被らせた。

「なか……凜<sup>りん</sup>さん。その子を如何するんですか？」

「さあ、どうするか？ あいつ等に突き出せば根岸は満足か？」

杏がしがみ付いている手に力が入った。

「あれ？ 君は、確かあの……」

根岸と言う男が杏の顔を覗きこんだ。

「根岸、チケット買ってきてくれないか」

「ええ！ その子の分ですか？」

「そうだ。何か問題でも？」

「大有りです。連れて行く気ですか？」

「穴を開けられるのとどっちが問題だ？」

「判りました。買って来れば良いんですね」

「出発まで時間が無いから急いで頼むぞ」

「はいはい」

根岸が走り出しカウンターに向かうと凧が近くのベンチに腰を下ろした。

そして横の席を見つめて杏に座れと合図をする。

杏は渋々凧の横に座った。

「あのう、チケットってどこまで行くんですか？」

「天国かな」

「本気で言っているんですか？」

「冗談に決まっているだろう」

その時、杏を探している男の1人が近づいて来た。

杏は凧と言う男の腕にしがみ付いた。

「おい、人の娘をジロジロと見るなよ」

凧が相変わらずの冷たい目で男に言い放つと男は気まずそうに立ち去った。

その時、凧の携帯が鳴った。

「根岸か？ どうした」

「搭乗者の名前？ 桜木桃香さくらももかで良いだろう。急いでくれよ」  
しばらくすると根岸が息を切らしながら走って戻ってきた。

「お待たせしました。チケットです」

「悪いな、いつも我が儘ばかり言って」

「何を言っているんですか。凧さんあつての私ですから」

「それじゃ、行こうか？」

凧が杏の目を見て言った。

「私も？」

「追われているのだろ。ここからは逃がしてやる、その後の事は自

分で考える。いいな」

「判りました」

杏が凜の目を見て答えた。

不思議と怖くは無かった、冷たそうな目をしているがその中に優しさを感じられたからだった。

搭乗手続きを済ませてあまり大きくない飛行機に乗り込む。

杏はいつもの癖でシートに座ると直ぐに眠り込んだ。

どれだけ眠っていたのだろう体が前のめりになり、飛行機が空港に着陸したのを感じて目を覚ました。

「起きたか？ 着いたぞ」

シートベルトを外し凜の後についてタラップを降りる。

そこは、まだ4月だというのに南国特有のムワツとした空気が流れていた。

「ここは、何処？」

「東京から2000キロ南西にある石垣島だ」

「石垣島？」

到着ロビーを抜け凜は手荷物だけを持ってスタスタと歩き出した。

「おっさん！ 待ってよ！ ちょっと、待てたら！」

杏が凜の腕を掴むと凜は相変わらず冷たい眼で杏を見下ろした。

「なんなんだ。いったい？」

「石垣島ってこんな所で独りにするのかよ！」

「言っただろ、逃がしてやるが後の事は自分で考えると」

「そうだけど……」

「それじゃな。これ以上、面倒な事に巻き込むなよ」

杏の事など気にしていないかの様に凜が歩き出した。

「騒ぐぞ良いのか？」

「ご自由にどうぞ」

「この、人攫い！ ロクデナシ！ 鬼畜！」

杏が大声で騒ぎ始めるが、我、関せずと凜はタクシーに乗り込む

としていた。

「お願いだから。独りにしないで」

杏が慌てて凜の腕をつかんだ。

目には涙がこぼれそうになっていた。

とても不安だったのだ、こんな筈ではなかった。

少しでも自由になったかっただけだった。

「仕方が無い。乗れ」

凜がぶつきらばうに言った。

杏は頷いてタクシーに乗り込んだ。

「お客さん、どちらまで？」

「リストランテ アリアまで」

運転手にそう告げると凜はそれ以上何もしゃべらなかつた。

タクシーは市街を抜けて海沿いの高台にあるレストランの駐車所で止まった。

「ARIA？」

杏が見るとそう看板には書いてあった。

駐車場から中庭の様な所を抜けると入り口があり、真っ白い壁に赤瓦がアクセントに使われていてとても可愛いレストランだった。

「いらつしゃい……凛さん！ お帰りなさい」

白いシャツに綺麗な青いネクタイで深緑のサロンをして、黒いパンツ姿のショートカットの可愛い女の子が出迎えた。

「ただいま、<sup>かえで</sup>楓

。奥の席開いているかな？」

「はい、空いていますよ。チーフ呼んできますね」

「ああ、頼むよ」

凛は、奥の席に向かい歩き出した。

杏はキョロキョロしながら後について行くしかなかった。

店内は白と青を基調としたとても落ち着いた感じの雰囲気です。

大きな窓の外には青々とした芝生のガーデンがありその向うには綺麗な海が広がっていた。

オープンキッチンの前のテーブルに凛が座るとそれにつられて杏も座る。

するとスタンドカラーの白いシャツを着て長めの黒いサロンをした、少し年配の男がテーブルにやって来た。

「藤崎チーフ。今、戻りました」

「お帰りなさい、どうでした？ 十三回忌は？」

「内々でやったので無事に終わりました。義姉さんはまだ？」

「一緒だったんじゃないんですか？」

「ええ、他の用事があったんで」

「そうですか、まだ戻ってないなあ……ところでその娘は？」

藤崎が不思議そうな顔をして杏の事を見ていた。

「さあ？」

「さあ？つて。凜が連れて来たんでしょ」

「連れてきたと言うか、着いて来たと言うか」

「本当に凜はしょうがない人だな。いい歳なんだからもつとシッカリしない、亜紗さんが知ったら唯じゃ済まされないですよ」

「だから、確認したんじゃないですか」

「で、誰なんです？」

「名前も何も知らないですよ。羽田で厳つい男達に追われている様だったんで逃がしたと言うか………なんと言うか」

「凜！ 犬や猫と違うんですよ」

藤崎が怒りに体を震わせていた。

「それは、判っていますよ。俺だって子どもじゃないんですから」

「凜が責任を取るんですよ。いいですね！」

そう言い残して藤崎はキッチンに戻って行った。

「はゝあ」

凜はテーブルに頬杖をついて窓の外のを眺めた。  
するとキッチンの中から笑い声が聞えてきた。

「葛城、何が可笑しいんだ」

「凜さんが見ず知らずの女の子なんか連れて来たからですよ。あの堅物の凜さんがですよ」

キッチンから茶髪の人当たりの良さそうな20代くらいの若い男が顔を出した。

「笑いすぎだ、好きで連れて来たんじゃない」

「これから、その子どうするんですか？」

「今から考えるよ」

「今からって、俺が預かりましようか？」

「猛獣の檻にウサギを放り込むような真似出来るか。そんな事してみろ、チーフに殺されるだろうが」

「凜さんは草食獣ですからね」

「そんなんじゃないよ」

杏は始終うつむいていたが凜がとても哀しそうな目をしたのを見逃さなかった。

葛城はオーダーが入りキッチンで仕事を始めていた。

「とりあえず、名前と年齢を教えてくださいか？」

凜が頬杖をしたまま聞いてきた。

「あ、秋川あきかわあんず 杏です。歳は19です」

「未成年か……はあ」

杏の歳を聞いて凜の表情が沈み込んだ。

「両親の連絡先を教えなさい」

「父も母も事故で死にました。今は叔父の家に住んでいます」

「それじゃ、叔父さんの連絡先で良いから」

杏は口を噤んで何もしゃべらなかった。

「叔父さんと何かあつて逃げていたのか。しかし、あれだけの人間を使っている叔父さんって……君は何者なんだ、いったい」

何を言われようが杏は俯いたまま喋ろうとしなかった。

「だんまりか、しょうがない。今日はもう帰りの飛行機も無いから明日どうするか決めよう。それと俺の名前は桜木 凜さくらぎ りん、歳はまあ良いか。君の親くらいの歳だ」

凜がホールに目をやるとシーズンオフのせいもあつてお客は疎らだった。

そしてこちらを伺っている2つの顔が見え隠れしていた。

「柚葉ゆは、楓。何を覗き見しているんだ」

2人の女の子が近づいて来た。

1人は出迎えてくれた女の子でもう1人は長い髪をポニーテールにしたおとなしそうな女の子だった。

「凜さん、その女の子は誰なんですか？」

2人とも興味津々で目がキラキラと輝いていた。

「家出少女らしい……名前は秋川 杏だ」

いきなり2人が杏の顔を覗きこんだ。

「おいおい、いくらなんでも失礼じゃないか？」

「でも、夏海 杏によく似ているよね。柚葉」

「そうだね、そっくりだよね」

「誰だ、その夏みかんって？」

「もう、凜さんは。夏みかんじゃなくて、な・つ・み・あん」

「なつみ あん？」

「そうですよ、超人気のアイドルですよ。知らない人居ないですよ」

「ここに、1人居るだろうが」

「凜さんぐらいですよ、知らないの」

「楓、凜さんテレビ見ないから」

「パソコンばかりじゃなくてテレビ見ましようね。凜さん」

「一緒にしないで！」

突然、杏が声を荒げた。

「そんなに、怒らなくても良いだろう。人気のアイドルに似ているって言われたくらいで、普通は喜ぶだろう？」

「名前も同じ漢字であいつはアン、私はアンズ。よく似ているって言われるのがたまらなく嫌なんだ。夏海 杏なんて大嫌い！」

杏の目からはポロポロと大粒の涙が溢れていた。

柚葉と楓が急に泣き出した杏を見て戸惑っている。

「ごめんね、杏ちゃん。夏海 杏は過労で入院してツアーは中止ってテレビでやっていたから、こんな島に来るはず無いもんね」

「お前達が謝る事は無い。悪いのはこいつだ」

「こいつじゃない、私は杏だ！」

柚葉が済まなそうな顔をしてしょんぼりすると杏が凜の顔を睨みつけた。

「悪かった。もう、泣くな。楓と柚葉が気にするだろう」

「はあ、これからどうするかな」

凜が杏の頭を撫でるとそっぽを向いた。

凜の浮かない表情を見て楓が気にして凜に声を掛けた。

「凜さん？」

「そうそう、ほらお土産だ。東京の有名なスイーツを色々買って来たから皆で食べなさい」

「えっ！ やった！ 凜さん。ありがとう」

楓と柚葉が喜んで飛び跳ねた。

「こちら、静かにしないとあそこで怖いチーフがこっちを見ているから」

「はい。仕事に戻ります」

2人が嬉しそうに紙袋を抱えて裏に下がった。

杏は相変わらず怖い顔をして外を見ていた。

「全く、どうしたものか……」

「へえ、パーフェクトマシンの凜さんでもそんな顔するんですね」

キッチンから葛城が話しかけてきた。

「葛城、俺は普通の人間だぞ。悪いが手が空いたら適当に何か作ってくれないか、昼から何も食べてないんだよ」

「判りました。ガッツリでいいですか？」

「とりあえず、サラダとパスタで良いから。頼む」

「了解」

しばらくすると料理を柚葉が運んできた。

「島野菜のサラダとトマトとモッツアレラのサラダです」

「ありがとう、柚葉」

「杏、食べないか？」

凜が聞くが杏は相変わらず、そっぽを向いたままだった。

「しょうがないなあ」

凜は1人でつまみはじめた。

少しすると楓がパスタを持ってきた。

「こちら、パスタです。ポモドーロとカルボナーラになります。あ

れ？ 杏ちゃん食べないの？ 美味しいよ」

杏は返事をしなかった。

「楓、放っておけ。腹が減っていたら食べるだろう、サンキューな。杏、いい加減にしるよ。両方喰っちゃうぞ」

パスタの良い香りが立ち込めている。

「カルボナーラ食べる」

そう言い杏が食べ始めると顔つきが変わった。

「こ、これ、美味しい！」

「まあ、ここは石垣島でも名の知れたイタリアンだからな」

「こんなに美味しいパスタ食べた事無い、そのトマトのパスタも…」

…

凜が食べているポモドーロを杏がもの欲しそうに見つめていた。

「ほら、好きなだけ食べなさい」

凜が杏に皿を渡した。

「凜さん、良いんですか？」

葛城がキッチンから声を掛ける。

「葛城、悪いがパンと何か追加で作ってくれ」

「了解です。杏ちゃん幸せそうな顔してますね」

「そうだな」

杏は美味しそうにパスタやサラダをバクバクと食べていた。

凜はそんな杏を眺めていた。

「私の顔に何か付いているのか？」

杏が凜の視線に気が付いた。

「別に、美味そうに食べるなと思ってな」

「腹が減っているんだ、しょうがないだろう」

「お待たせしました。ミラノ風カツレツと胡桃のパンです」

柚葉が料理を運んできた。

「ありがとう」

「なんだ、杏」

杏が凜の前にある料理を見つめていた。

「これも食べるのか？ ほら、分けてやるから」

凧は取皿に自分の分を少しだけ小皿に取り分けてパンと料理を杏の前に置いた。

「良いのか？ こんなに」

「好きなだけ食べると言った筈だが」

「遠慮なんかしないぞ」

「お前に遠慮なんかして欲しくないよ」

食事が終わり、凧はエスプレッソを飲んでいる。

杏は葛城が持ってきたデザートのアイスを食べていた。

「なあ、このアイスは何だ？」

「この店オリジナルのイタリアンカラーのアイスクリームだよ。赤いのがドライトマトのアイスで白いのが島豆腐のアイス、それに緑のアイスはピパーツと言う島の胡椒のアイスだ」

「どれも、美味しいな」

「そうか、満足か？」

「うん」

杏が笑顔で凧に答えた。

「お前も、そんな顔するんだな」

「うるさい！」

杏が頬を膨らませた。

入り口の方から女の人の声が聞えてきた。

「凜！ 凜はどこにいるの！ 出てきなさい！」

「ここだよ、亜紗あさ義姉さん」

その女性は軽くウェーブしたロングヘアーで紺のスーツを着ていた。そして凜を見つけると、もの凄い勢いで近づいてきていきなり凜を殴り飛ばした。

「あんたは、何でそうなの全く！」

「痛いなあ。店内で騒ぐなよ」

椅子から落ちて尻餅を着いた凜が立ち上がり椅子に座った。

「事情を一から説明しなさい」

亜紗が凜の前に座り凜を睨みつけた。

藤崎チーフから連絡があったのだろう。

凜が渋谷亜紗に羽田からの事の顛末を総て話した。

「それで、その子をどうするつもりなの？」

「とりあえず、今夜はどこかのホテルに泊めて明日考えるよ」

「それなら、今夜は私の家に泊めなさい良いわね。それと凜！ あなたは明日休んで。この子の面倒を見る事。分かったわね。チーフ、明日この馬鹿を休ませるけど大丈夫かしら？」

「葛城君、大丈夫ですよ」

藤崎が葛城に確認を取った。

「はい、任せてください。オーナーの為なら何でもしますよ」

「それじゃ、葛城君。宜しくね」

「はい！」

亜紗が立ち上がりレストランから出て行った。

「杏、行くぞ」

「う、うん」

杏は不安そうな顔をしながら凜の後について店を出た。

外に出るとすっかり暗くなっていた。

「それじゃ、義姉さん。こいつの事宜しく」

「さあ、行くわよ。杏ちゃんだったかしら、こっちにいらっしゃい」

「え、私ですか？」

「そうよ、凜は一応男だし。一緒と言う訳にはいかないでしょ」

「凜が良い……凜と一緒に良い！」

杏が凜の後ろに隠れシャツの裾を握り締めていた。

「我儘を言わないの、こっちにいらっしゃい」

亜紗が杏の腕をつかもうと手をだすと、凜がその手をつかんで止めた。

「凜、どういづつもりなの？」

凜は何も言わず横に首を振った。

「まあ、桃ちゃんと同じ年だし。凜なら大丈夫かもね、責任を持って面倒を見なさい。明日中に東京に帰すのよ、いいわね」

「ああ」

凜はそれ以上何も言わなかった。

「それじゃ、明日ちゃんと結果を連絡しなさいよ。約束よ」

亜紗はそう言うと言分の車に乗って店を後にした。

「杏、車に乗ってくれ」

「うん、分かった」

杏が駐車場の隅に止めてあった凜の軽自動車に乗り込んだ。

凜が車を出す、杏が凜の顔を見ると哀しそうな表情をしていた。

「桜木さん、この車。パジェロミニって言うんでしょ」

「ああ、そうだ。それから俺の事は凜で構わないから」

「じゃあ、凜。桃ちゃんって？ 娘さん？」

「そうだ、娘の名前だ」

「結婚していて娘さんまでいるんだ」

「独り暮らしだ。12年前に娘の桃香も妻の双樹も死んだよ」

「えっ、ごめんなさい」

「気にする事はない。もう昔の事だ」

これ以上、杏は話を続ける事が出来なかった。

しばらくすると街中の凜のマンションに到着する、凜の部屋は3階だった。

「ここだ、むさ苦しい部屋だが入って待っていてくれ。俺は少し買い物に行つて来るから」

「うん、分かった」

杏が部屋にはいると凜が外から鍵を閉めた。

杏が部屋に上がり電気をつけて回る。

「あれ？ あんまり汚くないなあ」

お世辞にも綺麗な部屋とは言えないが、男の1人暮らしにしては散らかっているが綺麗な方じゃないかと杏は思った。

「世話になるんだから、少し片付けておくかな」

部屋の間取りは3DKだった。3DKでもキッチンがかなり広く取られていた。

流しに溜まっていたコップや皿を洗い、リビングの円卓に散らかっていた新聞を片付けて、少し掃除機をかけると直ぐに見違えるような部屋になった。

「なんだ、綺麗な部屋じゃん」

良く見るとセンスの良い間接照明などがあり部屋自体とても落ち着いていた雰囲気だった。

「こっちの部屋は、寝室か。うわあ、凄い」

目の前の壁には本棚が備え付けられていて、そこにはライトノベルやマンガ本が綺麗に並べられていた。

その棚の下には大きなベッドがあり、その横の押入れは書斎の様に改造されていてパソコンが置かれていてその脇には料理の本やファッション雑誌が積み上げられていた。

杏が寝室に入りパソコンを見るとその上に女の人と女の子の写真があった。

「あれ？ これってさっきのお姉さんじゃ」

その時、凜が買い物から帰ってきた。

「お帰りなさい」

「ああ、掃除と片付けをしてくれたのか悪いな汚い部屋で」

「そんな事、無いと思う。それにこれからお世話になるんだし」

「明日、杏は東京に帰るんだ」

「嫌！ 絶対に帰らない。後の事は自分で考えろと言ったのは凜だからここに居る」

「確かに自分で考えろとは言ったけどな。杏は未成年で俺は男の一人暮らしだぞ」

「じゃ、叔父さんに許可を貰うから電話貸して」

凜が杏に携帯を渡すとどこかにダイヤルし始めた。

「もしもし、叔父さん？ 杏だけど心配しないで私は元気だから。

何？ 帰って来い？ 絶対に帰らない2度とあんな生活は嫌だから今は知り合いの所にいるから心配しないで。じゃあね」

「おい、杏。電話」

凜が携帯を取り上げるより早く杏が発信履歴を消去した。

「これで、文句は無いだろう。叔父さんにも連絡はしたし」

「抜け目の無い奴だな全く。何て義姉さんに説明するんだよ」

「お願いだから、ここにおいて下さい。料理以外なら何でもしますから」

「お前なあ、男の家においてくれなんてよく平気で言えるな」

「凜となら別にいいよ。でも、凜はそんな事する様な人じゃないと思う。だから平気」

腕組みをしたまま凜が考え込んでいた。

「凜、お願い……」

「分かったから、そんな目で見るな。何とか義姉さんを説得するか」

「本当に？ ありがとう」

杏が凜に飛びついて凜は腕を組んだまま微動だにしなかった。

「悪いが離れてくれないか」

「あつ、ごめん」

「先にシャワーでも浴びてくれ。沖縄じゃ風呂はあまり入らないんでな」

凜が買って来た物は、シャンプーにトリートメント、歯ブラシにクレンジングと化粧水だった。

「ありがとう」

「それと、これはとりあえず着替えた」

凜が杏に渡した服はとてもシンプルな生成りのリネンのワンピースだった。

「これって、凜の趣味？」

杏が変な目で凜を見た。

「そんな訳無いだろう。前に義姉さんに土産に買ってきたら、こんなフェミニンなワンピース着られるかと付き返された物だよ。良かったら使ってくれ」

「分かった、先にシャワー借りるね」

杏がバスルームに入るのを見届けて凜は寝室のパソコンに向かって作業を始める。

「悪い子じゃなさそうなんだが……どうしたものか」

しばらくして杏がシャワーを浴びて出てくると凜がリビングでパソコンに向っていた。

「何をしているの？」

「仕事だ」

「凜はワーカーホリックなんだ」

「それは、違うかな」

「どう違うんだよ」

「杏には関係ないだろ」

寝室にあるライトノベルやマンガ本を見て杏が凜に聞いた。

「そうだね、それと凜は秋葉系なのか？」

「遠からずも近からずかな」

「ここにある本は読んで良いのか」

「好きにしる」

杏が本棚のマンガやライトノベルを見ている。

「ああ！『彼はグランパ』の最新刊だ」

「好きなのか？」

「うん、大ファンなんだ」

「そうか、それは良かったな。向うで仕事をしているから何かあったら呼んでくれ」

「うん、分かった」

杏はベッドの上で本に夢中で殆ど聞いていなかった。

凜はリビングの円卓でノートパソコンを開き作業を開始した。

作業に没頭して切りが良い所で作業を止めてベッドの方を見るといつの間にか杏は寝てしまったようだった。

疲れていたのだろう、凜は杏に布団を掛けて電気を消した。

duo

翌朝、杏が目を覚ますとそこは見知らぬ部屋だった。

「あれ？　ここは何処なんだ。そう言えば昨日、羽田で逃げ出して飛行機に乗って……」

寝起きの回らない頭で考えていると玄関のドアが開く音がした。

「杏、起きたか？　朝飯だ」

「はい、分かった」

杏がとりあえず返事をしてベッドから這い出てキッチンを見ると知らない男がコーヒーを入れていた。

「誰だ？　お前？」

「寝ぼけているのか？　もう昼前だぞ。杏」

「あつ、そうだ。凜だ。おはよう」

自分の状況を直ぐに思い出した。

「おはよう。ほら、カフェオーレでいいな」

「うん」

「その紙袋の中にパンが入っているから食べてくれ。食べ終わったら出かけるからな」

「うん、なんで凜の髪の毛濡れているの？」

「プールでひと泳ぎしてきたからな」

「プール？　私も泳ぎたい」

「明日な」

「分かった、約束だぞ」

「約束か……」

食事を済ませ午後から買い物に出かける。

市内の大型店舗の2階にある洋服売り場に凜と杏は来ていた。

「必要最小限の物を買って来い。俺は、ここで待っているから」

「一緒に回ろうよ」

「何でだ？」

「似合うか凜にも見て欲しいから」

「面倒くさい」

「面倒くさい言うな。いいじゃんか。けち！」

「判ったから、早めに切り上げてくれよ」

凜は渋々買い物について回る事にした。

「ねえ、これどう？」

「良いんじゃないか」

「ちゃんと見てるの？」

「見たよ」

「それじゃ、これとこれと……これも。良いんでしょ」

「ああ」

「じゃ、次はあっち」

「おいおい、引つ張るなよ。ちゃんと着いて行くから」

杏は凜の手を引つ張って歩き回り下着売り場のコーナーに入っていた。  
った。

「うわぁ、可愛いのがいっぱいある。どれにしようかなあ？ これ  
なんかどう、凜」

「俺に聞くな、判らない」

杏がブラとショーツのセットを体に当てて凜に見せるが、凜は照れる  
風でもなく答えた。

「ちえ、つまらないの。凜は平気なんだね。こういう所」

「独りで来ている訳じゃ無いからな」

「私達、恋人同士に見えるかなあ？」

「それは無いな。どこからどう見ても親子だろう」

「私は、凜はいけてると思うけど」

「言っただ杏の親くらいの歳だと」

「歳なんて関係ないもん。凜は、若く見えるしね」

「煽てても何も出ないぞ。買う物は決まったか？ 行くぞ」

「もう、バカ！」

杏は嬉しかった誰かとこんな風に買い物するのは初めてで。

それに本当の素の自分で居られる事がこんなにも楽しいものだとは思っても見なかったのだった。

「ねえ、次はどこに行くの？ 洋服もサンダルも靴もそれに下着も買ったのに」

「泳ぎたいんだろ」

「うん！」

杏が嬉しそうに笑った。

凜は大型店舗を出てから車を中心街に向けて、街中にあるサーフショップの前で車を止めた。

「ここなら、この時期でも置いてあるはずだ」

「早く見に行こう。凜」

「判ったよ」

店に入ると真っ黒に日焼けした女の子の店員が出迎えた。

「いらつしゃいませ」

「悪いがこいつに合う水着が欲しいのだが」

「水着のコーナーはこちらになります」

真っ黒に日焼けした店員が指差す方を見ると、まだ時期が早い為かあまり多くは無いがカラフルな水着がハンガーに掛けられていた。

「ほら、早く選べよ」

「分かった。どれにしようかなあ」

杏は楽しそうに水着を選んでいた、それを凜は物静かにただ見ている。

「あのさ、凜」

「なんだ」

「こんなに色々を買ってくれたて事は私ここに居ても良いんだよね」

「まだ、決まった訳じゃない。義姉さんの許可が下りなければ東京に強制送還だ」

「えっ、そうなんだ。なんで許可がいるの？」

「昨夜、結果を連絡するって約束しただろ」

「でも、それは結果を報告する約束でしょ」

杏が哀しそうな目をして凜の顔を見上げた。

「そんな顔するな、俺がなんとか説得するから」

「本当に？」

「本当だ」

「約束だよ」

「分かった、約束だ」

「やったー。それじゃ、水着これにしよう」と

杏が選んだ水着はパレオ付きのオレンジのシンプルなビキニだった。

凜が亜紗に連絡を取りARIAに向かう、ARIAに着き店内に入ると楓と柚葉がホールの掃除をしていた。

「お疲れ様」

「あ、お疲れ様です。凜さん」

「オーナーは？」

「奥でお待ちですよ」

「ありがとう。杏はそこで待っている」

「私も行く」

「待っている。分かったな」

「うん、分かった」

凜が奥の事務所に入っていく、杏が凜に強い口調で言われて戸惑ったまま立っていると楓が声を掛けてきた。

「杏ちゃん、座って待ってれば」

「あ、ありがとう」

「今、飲み物持ってきてあげるね」

「お水でいいよ」

「分かった」

そんな会話を交わしていると、気を利かせて柚葉がシークワァーサージュースを持ってきてくれた。

「ありがとう、柚葉さん」

「柚葉でいいですよ。杏ちゃん」

「そう言えば自己紹介してないよね。私は雨宮 楓あまみや かえで、20歳」

「私は、音無柚葉おとなしゆずは。歳は19。よろしくね」

「俺は、葛城 真かつらぎ まこと。24歳です」

葛城がカウンター越しに顔を出した。

「もう、見習いは仕込みでもしてろ!」

「見習い言っな」

「皆、仲が良いだね」

「チームワークはこの店にも負けないよね。柚葉」

「うん、そうだね」

「そう言えば、杏ちゃんは昨日オーナーの所に泊まったの?」

「違っよ、凜の所」

「凜の所って……ええっ! 凜さんの家に泊まったの?」

楓が柚葉と顔を見合わせて驚いた。

「そうだけど? 何でそんなに驚くの?」

「信じられない。あの凜さんの家に泊まるなんて」

「え? 何で?」

「だって、今まで誰も行った事が無いんだよ。凜さんの家に」

「そうなんだ」

「で、どんなお家だったの?」

「普通だよ、センスの良い照明とかがあったけど。1人暮らしの割には部屋も綺麗だったし」

「ふっん」

「じゃ、今度は俺の家に来る?」

仕込みを終わらせ休憩をしにキッチンから葛城が出てきた。

「葛城の家は絶対に嫌だね。あんなゴミ貯め見たいな部屋」

「柚葉ちゃん、酷いよ」

「だって、前に掃除したからって遊びに行つてあの状態じゃね。楓」

「そうそう、見た事の無い虫も歩いてるし」

「ごめんなさい。絶対に無理だ」

杏があからさまに嫌な顔をした。

「はぁ、向うで寝てるから時間になったら起こしてくれよ」

葛城がうな垂れながら奥のコーナーのソファーに向かって歩き出した。

「杏ちゃんて学生さんじゃないよね」

「うん、叔父さんの仕事を手伝ってた」

「そうなんだ。どんな仕事なの？」

「マスコミ関係の仕事かな」

「凄い、マスコミの仕事なんて。憧れちゃうな」

「でもね、柚葉ちゃん。どんな仕事でも裏と表があって、嫌な事も笑いながらしなきゃいけない事の方が多いんだよ」

「そうなんだ。ここは裏も表も楽しいかな、嫌なお客さんが来てもオーナーとかチーフが助けてくれるし凜さんの賄いは美味しいね」

「そうだよ、柚葉。他の所から比べたら私達は恵まれているのかもね」

「そんなに、ここの仕事って楽しいの？ 接客業でしょ」

「うん、楽しいよ。仕事に来るのが楽しみでしょうがないもん」

「私も楓と同じ。お休みの日も仕事に来たいくらいだもん」

「ふうん、そうなんだ」

その時、事務所から机を叩く様な大きな物音と亜紗の怒鳴り声が聞えてきた。

「あなたって子は何でいつもそうなの、本当に責任が取れるんでしょうね。あの子はまだ未成年なのよ」

「義姉さん、少し落ちつけよ」

凜の声がある、その後の会話は聞えなかった。

「あちゃー。オーナー激怒ってるよ」

「私のせいだ。私がここに居たいって言ったから」

「そんなに、東京の叔父さんの所が嫌なの？」

柚葉が不思議そうな顔をして聞いてきた。

「う、うん。自由になりたかったの」

「そうなんだ」

奥のソファーから葛城の声がした。

「大丈夫だよ。凜さんに任せておけば。そうだろ楓、柚葉」

「そうだね」

「そうだよ」

「ええ、2人ともなんで言い切れるの？」

杏が不思議そうな顔をした。

「実は、私。少し前まで凄く荒れていて凜さんに救われたの」

「楓ちゃん荒れてたって信じられないよ」

「金髪で凄かったんだよ」

「柚葉だつて助けてもらつたんでしょ」

「うん、お家の中がメチャメチャで死のうと思ったときに凜さんに助けてもらつて。今は凜さんのお陰で楓と共同生活しているんだ」

「そうなんだ、だから2人は仲良しなんだね」

「でも、初めは喧嘩ばかりしていたんだよ。そんな時も凜さんに助けてもらったの。楓には楓の私には私しか持つて居ない良い所がある、そこをお互いに見つけなさいって。冷静になつて考えてみたら2人は全く正反対の人間なんだつて。そうしたら何だかお互いを認めあえて仲良しになれたんだよね。楓」

「そうだね、あそこで寝ている見習いは店の前で行き倒れていたのを凜さんに拾つてもらつたんだもんね」

「うるさいな。今に見てる、一人前になつて凜さんに恩返しをするんだ」

「頑張つてね。見習い君」

「見習い言つな」

「でも、凜さんは不思議な人なの。あまり人付き合いしないし、いつも一定の距離を置いて見守ってくれている。近づきもせず離れも

せずにね、凄く寂しい感じがするけど理由は判らない」

「そうなんだ」

杏が感じていたものと同じだと思った。

決して自分から踏み込んで来ない、だから初対面の凜でも平気だと思えたのかもしれない。

「凜の口から約束の言葉が聞けたからそれでいいわ。何か問題が起きた時は」

「それ以上言うな。判ってる」

事務所から亜紗と凜が出て、今まで一度も聞いた事の無い様な凜の声に皆驚いていた。

亜紗は携帯でどこかに電話をし始めた。

「凜さん。休みの所悪いんですが味見をお願いしたいんですけれど」

「判った、葛城」

葛城がソファーから起き上がり凜に声を掛けると凜と葛城がキッチンに向かう。

「凜？」

杏が椅子から立ち上がり不安そうな顔で声を掛ける。

「大丈夫だよ。OKだ」

凜のいつもの顔を見た杏の体から力が抜け椅子にへたり込んだ。

「よかったね、杏ちゃん」

「うん」

「凜さんと一緒のお家が良いな」

「今度、遊びにおいでよ。柚葉ちゃん」

「本当に？」

「凜に頼んでみる」

「じゃ、楓も」

「そうだね。あのさ、凜さんの奥さんって亜紗さんじゃないの？」

「えっ、違うよ。ねえ、柚葉」

「うん」

「だって、凜の部屋に写真が……」

すると後ろから亜紗の声がする。

「それは、私の双子の妹の双樹よ」

「ええ！ オーナー双子だったんですか？」

「あまりこんな話はしないからね。さあ、お2人さん掃除は終わったのかしら？」

「きゃー、こんな時間だ。準備！ 準備！ 柚葉急げ」

「はい」

楓と柚葉が慌しく仕事を始めた。

「あの、亜紗さん。お話が」

「何かしら？」

「実は私……」

亜紗が人差し指で杏の口を塞いだ。

「あなたが誰であろうとそんな事は問題じゃないわ。ここはそういう島なの、特にこのお店はね。皆何かしら問題を抱えてたり、人に言えない事がある人間が集まっている。でも、私や凜がバックアップするから大丈夫よ、安心なさい」

「ありがとうございます」

「私は仕事があるからこれで失礼するわ」

そうして杏の自由な一日は終わって行った。

午前9時。他に誰も居ないプールで泳ぐ男女の姿があった。

「めっちゃ、気持ち良い！」

オレンジ色のビキニを着た女の子が言った。

「ねえ。凜てば」

男は黙々と泳ぎ続けていた。

「もう、仕方が無い。私も泳ごうと」

杏が泳ぎ始める。

小1時間ほどでプールから上がった。

「ねえ、凜は毎日こんなに泳いでいるの？」

「そうだ、体が資本だからな」

「4月なのにプールやってるんだね」

「3月が海開きだからな」

「凜、お腹が空いた」

「帰って朝飯にしよう」

「賛成！」

プールから上がり更衣室で着替えを済ませ入り口で待ち合わせをする。

「杏、ここのフリーパスだ、これがあればいつでも来て泳げるからな」

「ありがとう」

朝食を済ませると凜が出勤の準備をし始める。

「今日から、仕事なんだ」

「働かないと生活出来ないからな」

「そうだよな」

「これが、部屋の鍵とその自転車の鍵だ。出るときはちゃんと閉めるよ。それとこの財布に1万入っているから自由に使っていーが

無駄遣いはするなよ」

綺麗なキーホルダーが付いた鍵と茶色い財布を凜が差し出した。

「もう、子どもじゃないんだから大丈夫だよ」

「それと、これを使って良いから」

凜が携帯を杏に渡した。

「携帯？ それも最新機種じゃん」

「俺のプライベート用の携帯だ。殆ど使っていないから」

「凜はどうするの？」

「仕事用の携帯があるから大丈夫だ。何かあったら必ず連絡する事。いいな」

「うん」

「それと、ここで暮らす上で必ず守る事が1つだけ。絶対に俺のノートパソコンには触れるな、寝室のデスクトップは自由に使って構わないからな。もし、守れなかった時は追い出すからな」

「わ、判った」

凜の真っ直ぐな瞳におされ了承するしか杏には選択権が無かった。

「それじゃ、行つて来るからな。街中はこの先の道を下れば直ぐだから見て回るといい」

「うん、行つてらっしゃい」

凜を見送つて杏はとりあえずリビングに座り込んだ。

「なんで、凜は何も聞いてこないんだろう。私の事、何も知らないくせにこんなに信用して。そう言えば着かず離れずって言ってたなあ」

2つ折りの茶色い財布を見ると確かに1万円が入っていた。

「携帯のアドレス帳は……」

杏がアドレスを開くとそこには凜、亜紗、お店・楓・柚葉・葛城の電話番号だけが登録されていた。

「プライベート用って本当に？ 友達居ないのかなあ」

「それに1万円なんて多いよ。とりあえず部屋の掃除でしよう」と

杏は料理は苦手だったがそれ以外の家事は得意中の得意だった。

凜はスクーターで店に出勤した。

「おはよう」

「おはようございます」

「さあ、葛城。準備だ」

「了解です！」

葛城と2人で準備を始める。

しばらくすると楓が出勤してきた。

「おはようございます」

「おはよー。今日は楓が早番か」

「そうです。凜さん、杏ちゃんは？」

「部屋の掃除でもしているんじゃないか」

「そうなんだ、つまんないの」

「店に連れて来る訳にも行かないだろう」

「俺は、杏ちゃんならOKす」

「葛城は女なら見境無いからな。楓ちゃんも気を付けろよ」

「見習いは眼中に無いですよ。凜さんならOKなだけだな」

「冗談は程々にして仕事を開始する」

「はい。本気なのになあ、ちえ」

「楓じゃ無理だよ」

「何を！ 見習いが」

「コラ、2人とも何を騒いでいるの」

葛城と楓が睨みあっているとオーナーの亜紗が現れた。

「すみません、オーナー」

横目で楓が葛城を睨む、葛城はしらんぷりした。亜紗はそんな事は気にも留めず声を掛けた。

「ランチ、オープンするわよ」

「判りました」

「いらっしゃいませ」

オープンと同時に数組のお客が入って来た。

杏は一通り部屋の掃除をして、キッチンの片付けも終わらせて暇を持て余していた。

「1人ってこんな感じなんだ。なんだかつまんないなあ」

東京では杏の周りには必ずいつも誰かが側に居た。

マネージャーやスタッフ、叔父さんや叔母さんが……

「街でも見てこようかな」

玄関に置いてある自転車を見るとサドルが杏に合わせて下げてあった。

「本当に、近くも無く遠くも無くなんだ。歩こうと」

杏は部屋にあった凧のサングラスを掛けて歩き出した。

「確かこの先の道を下るんだっけ、こっちだ」

暖かい島の風が杏のウェーブのかかった長い髪を揺らして頬をすり抜けていく。

ノーメイクで街に出るなんて今まで考えられなかった。

しばらく歩くと人が多くなってきて郵便局の前を過ぎて大きな交差点に差し掛かると建物の間から海が見えた。

「海だ、港かなあ。行ってみよう」

そこには、離島航路の船が沢山停泊していた。

「す、凄い！ エメラルドグリーンの海だ。綺麗！ ここから、島に行くんだ。今度、行って見たいなあ」

何艘かの船が離島に向かって出港して行くのが見えた。

少し戻ってアーケードのある通りにでると観光客が買い物をしているのが見える。

不意に声を掛けられた。

「彼女、1人？」

「俺達と遊びに行こうよ」

「あれれ、良く見ると夏海 杏に激似じゃん。ラッキー」

「嫌です。近づかないで下さい」

A R I Aではランチタイムが終わり片付けをしていた。

「やっと終わったあ。ああ、しんど」

「葛城は若いんだからもつとシャツキとしろよ」

「凜さんはいつも元気ですね」

「鍛え方が違うからな。葛城、ちよつと市場に行つてきてくれ。これが買い物のメモだ、それとスクーターの鍵だ。ほれ」

凜が葛城にスクーターの鍵を投げる。

「凜さんのスクーター使つていいんですか、やったー。行つて来まーす」

「飛ばすなよ」

「判つてます!」

葛城が嬉しそうに店を飛び出して行つた。

「凜さん。良いんですか? 前みたいな事になったら」

「大丈夫だよ、楓。あいつも子どもじゃないんだから」

「本当に、凜さんは甘いんだか優しすぎるんだか、まるでドルチェみたいですね」

「そうかなのか?」

「違ふのよ、鈍いの」

オーナーの亜紗が突っ込んだ。

「どうせ、ニブチンですよ。義姉さんには敵わないさ」

葛城がアーケードの中の市場で買い物を済ませ店に戻ろうとすると、数人の男に囲まれている女の子が見えた。

「あれ? 杏ちゃん? それに周りの連中はあの時の……クソ! なるようになれ!」

葛城がスクーターに乗り男達に突っ込んだ。

「このガキ、何するんだ!」

「杏ちゃん、早く後ろに乗つて」

杏が葛城に気付きスクーターの後ろに乗る。

男達がスクーターをつかむより早く葛城がスクーターをだした。

「あいつ、この間の野郎だぞ。追え！」

男達が側に止めてあつた大型スクーターで2人を追いかけてきた。

「葛城さん、追いかけて来たよ」

「大丈夫、凜さんのスクーターなら追いつかれないから」

「でも、なんであんなに追いかけてくるの？」

「前に、奴等と喧嘩になつて凄く凜さんに迷惑を掛けた事があるんだ。2度目は店に居られなくなるから。しっかりつかまって飛ばすから」

「うん」

杏は葛城の体にしがみ付いた。

少しすると店が見えてくる。

後ろからもの凄い勢いで男達が追いかけてきていた。

駐車場にスクーターを止めて2人が店に駆け込むと藤崎が怪訝そうな顔をして声をかけてきた。

「おやおや、そんなに慌てて如何したんだね？」

「チーフ、凜さんは？」

「俺ならここだ。杏？ 何があつたんだ？」

葛城と杏が目をやると凜はテーブルで亜紗と打合せをしていた。

「杏ちゃんが街で男達にナンパされていて、その相手がこの間の連中だつたんで」

「葛城、お前。手は出してないだろうな」

「凜！ 葛城さんは何も悪くないの」

杏が困った顔をして凜に訴えた。

「判った」

「凜、何があつたの？」

「義姉さん、ちょっとしたトラブルだ。俺が方をつけるから」

凜が店の前に出るとガラが悪い数人の男達が待ち受けていた。

葛城や杏、そして出勤してきたばかりの柚葉も楓達と店の中から様子を心配そうに伺った。

「おっさん。今、ここに逃げ込んだガキを出せや」

凜は何も答えず左足を半歩引いて半身をとる。

男はヘルメットを脱ぎ捨てるように取り、凜に構わず喚き散らした。  
「聞いてるんか！ コラ！」

次の瞬間、凜が右足で片足立ちになったかと思つた瞬間。

パァーンと言う音と共に男が被っていたキャップが宙に高く舞つた。

男は何が起きたのかわからず呆然としている。

凜の体が綺麗に右足を軸に1回転していた。

「えっ、何が起きたの？」

店の中で見ていた杏達にも何が起きたのか判らなかった。

「まだ、やる気か？ 次はキャップじゃなくてお前の頭が宙に舞う事になるが」

男が何が起きたのか理解しガタガタと振るえ始めた。

「今度、うちの者にちよっかい出してみる俺が相手してやるからな」  
「ヤバイ！ 逃げろ」

男達が目散に逃げだすと凜が何事も無かったかの様に店に入ってきた。

「凜？ 今、何をしたの？」

杏が不思議そうに聞いてきた、杏の後ろで楓と柚葉が頷いている。

「別に」

凜は椅子に座り平然とコーヒーを飲み始めた。

「帽子のつばに蹴りを叩き込んだのよ」

亜紗が平然とした顔で答えた。

「でも、何も見えなかったですよ。オーナー」

「そりゃそうよ、だって雷神の死神リンの蹴りだもの」

「えっ、雷神の死神って……」

「余計な事を、死天使アーサが」

凜が珍しく亜紗に口答えをした。

「ええっ、死天使アーサって風神の？ 最強だ！ この店は無敵だ！」

「ああ、見習い君が壊れちゃった」

床にへたり込んで両手を掲げている葛城を見て楓が呟き。

チーフの藤崎は何事も無かったかの様に自分の仕事に戻った。

杏が何かを決心して亜紗に近づいてきた。

凜の前の席で書類に目を通していた亜紗が杏に尋ねた。

「何かしら、私に用事でも？」

「ここで、働かせて下さい。お願いします」

杏が深々と頭を下げて言った。

「うちは、厳しいわよ」

「はい」

「あまり給料あげられないけれど」

「構いません。凜、いや凜さんにあまり迷惑や負担を掛けたくないんです」

「凜、こう言っているけどどうするの？」

亜紗が凜の顔をまじまじと覗き込んだ。

「オーナーが決める事だろ」

「私は保護者代理の凜に聞いているのよ」

「もし、甘えが出たら止めさせるからな」

「はい、判りました」

「凜がOKならいいでしょ。とりあえず今日からでいいかしら」

「はい、お願いします」

「やったー！ 新しい仲間だ。それも杏ちゃん！」

「嬉しい！」

楓と柚葉が手を繋いで喜んで飛び跳ねた。

「はいはい、それじゃ楓。チーフに杏の制服を準備してもらって着替えさせなさい」

「はい、オーナー分かりました。杏ちゃん行こう」

「うん」

杏、楓、柚葉の3人が嬉しそうに歩いて事務所に向かった。

「凜、本当に良いの？」

「何でだ？」

「あなた、杏ちゃんの事を何も知らないんじゃない？」

「杏は杏だろう違うのか？」

「そうね、それで良いのよね」

そして、ディナー前のミーティングが始まった。

「今日から新しい仲間が加わりました。とりあえず杏は全体の流れを覚える事、そして楓と柚葉はフォロー宜しく」

亜紗が声を掛けると「はい」と3人が嬉しそうに返事をする。

「チーフ、今日の予約は」

「ええ、今日は特に予約はありません」

「それじゃ、シーズンオフですが頑張りましょう。宜しく願います」

「お願いします」

それぞれの持ち場に帰り仕事を始める。

杏は楓とテーブルのセッティングの確認をして、柚葉はドリンクの準備をしていた。

「おい、葛城は何を見とれているんだ」

「やつぱ杏ちゃん可愛いすよね。堅物の凜さんにはもったいないなあ」

「くだらない事、言っていないで仕事しろ。それから杏を助けてくれてありがとうな」

「いいんすよ、当たり前前の事をしただけですから。凜さんにお礼言われちゃった、頑張ろうと」

葛城が自分の体を抱きしめて悦に入っていた。

「何を言っているんだか」

「俺も凜さんラブですから」

「気持ちが悪いから止めてくれ、寒気がする」

「もう、いけず」

「バーカ、仕事しろ」

ディナーが始まる、杏はキッチンの前でホールを見て全体の流れを見る様にオーナーから指示を受けていた。

お客様が来店し始めた。

「いらつしゃいませ」

柚葉がお客を席に案内すると直ぐに楓が水をグラスに注ぐ。

そしてオーダーを取りキッチンにオーダーを通す。

「オーダー入ります。島野菜のサラダ、ゴルゴンゾーラの Pasta にペンネアラビアータ。オールワンです」

オーダーが入ると同時に葛城と凜が動き始めた。

皆が輝いて見えた。

お客として今まで色々なレストランに行ったがこんなに輝いて見えるスタッフ達を始めてみた気がする。

それはお客の立場と真逆のスタッフの立場に立ったからかもしれない。

それよりも驚いたのは活き活きと料理を作り綺麗に盛り付けをしていく凜の姿に釘付けになった。

「杏ちゃんは何を見とれているのかなあ」

「べ、別に」

楓が不意に声を掛けて驚いた杏が赤くなった。

「凄いいね、凜さん。私も柚葉も最初は見とれちゃったもん」

「そうなんだ」

「でも、ちゃんと私達の仕事も見ててね」

「はい、分かりました。先輩」

数組のお客をこなし店内は初めて訪れた時の様に静かになっていた。

「はあ、めっちゃ緊張する。お客に見られる数倍は緊張した」

「葛城はメンタルも弱いのかよ」

「凜さんは緊張するとか無いんですか？」

「無いな」

「即答かよ。やっぱりパーフェクトマシンだ」

「杏、疲れたか？」

オープンキッチンの前で立っている杏に凜が声を掛ける。

「えっ、あ。凜さん大丈夫です」

「そうか。葛城、賄い作るぞ」

「はい。杏ちゃん美味しい賄い、作るから待っててね」

「はい」

「くうく可愛すぎる」

「葛城いい加減にしろよ」

「スイマセンでした！」

「うふふ。面白い」

ラストオーダーも無くレストランをクローズして賄いを食べる。  
今日の賄いはジェノベーゼのリゾットの上に鶏のソテーが乗っているものとサラダだった。

葛城、杏、楓、柚葉の4人はテーブルでオーナーとチーフは事務所で。

凜はキッチンで翌日の仕込みをしながら賄いを食べていた。

「美味しい！」

杏が思わず声を上げた。

「そうだろ、ここの賄いは石垣で一番美味しいんだよ」

「そうだ、葛城」

楓が葛城にいきなり切り出した。

「なっ、何だよ。いきなり」

「夕方に言っていた、雷神とか風神って何？」

「そうか、皆は知らないんだよね。関東一円をしめていた伝説の暴走族とレディースの名前だよ」

「そんなに凄いの？」

「柚葉ちゃん関東一円と言う事は日本で一番だよ。その歴代の総長の中でも有名なのが死神リンと死天使アーサで、名前を聞いただけで普通の族は尻尾を巻いて逃げ出したんだ」

「それがオーナーと凜さんなの？」

「たぶんね」

「ふうん、いまいちピンとこないなあ」

「でも、オーナーの激怒ってる時って怖いもんね」

「凜を殴り飛ばすくらいだもんね」

「凜さんって怒ってるの見たことないよね」

「そうそう、杏ちゃん。プライベートな凜さんてどんななの？」

「柚葉ちゃん、あんまり変わんないよ。私がいるからかなあ。でも

毎朝1時間ぐらいプールに泳ぎに行っているけど」

「毎日なの？」

「うん、今朝は一緒に泳いできたもん」

「うおー。早起きすれば、杏ちゃんの水着姿が見られるんだ」

「見習い君は早起きできるの？」

「無理す」

楽しくお喋りをしていると亜紗が声を掛けてきた。

「はいはい、おしゃべりはそのくらいにして片付けて帰りなさい」

「あ、オーナー。今度の定休日に、杏ちゃんの歓迎ビーチパーティーやりましょうよ」

「それ良いかも、ね、柚葉」

「うん、やりたい」

「凜はOKなの？」

「義姉さんがOKなら」

「じゃ、決まりですね。場所は石崎で」

「ご馳走様でした」

各々片付けを始めた。

「お先に失礼します。杏ちゃんまた明日ね」

「うん、バイバイ」

「俺もお先でーす」

楓と柚葉が帰り葛城も帰って行った。

「杏ちゃんはどうするの？ 凜」

「ケツに乗せて帰るから」

「気を付けて帰るのよ。お先にね、杏」

「お疲れ様でした」

亜紗とチーフの藤崎が帰ると杏は着替えを済ませて凜の作業を見つめていた。

「悪いな、待たせてしまつて」

「平気だよ。凜って料理凄いんだね」

「普通だよ」

「どこで覚えたの？」

「イタリアで放浪してた時にな」

「凄い、本場仕込みなんだ」

「買いかぶり過ぎだよ。さあ、終わったから帰ろう」

「うん」

電気を消して戸締りを確認して店を出ると雲行きが怪しく風が強くなっていた。

「急いで帰らないと降られるかもな」

「雨が降りそうなの？」

「そうだ、急いで帰ろう」

スクーターに2人乗りして帰路に着く、直ぐに雨が降り出し雨脚が強くなり雷がなり始めた。

「クソ！ 雷まで」

その時、杏の異変に気が付いた。

凜の体にしがみつきながら尋常じゃないくらい震え出したのだ。

パイナップルや島野菜などを売っている無人販売の小屋の前にスクーターを止めて小屋の中に杏を座らせる。

「おい、杏。どうしたんだ？」

「嫌あああ！」

雷に反応するかのように杏が泣き叫んだ。

「大丈夫だから」

凜は杏の体を抱しめると杏が凜の腕を握り締めた。

どれ位時間が経ったのだろう雨脚も弱まり雷も遠くなると杏が落ちて着きを取り戻した。

「杏、大丈夫か？ 家に帰ろうな」

杏はただ頷くだけだった。

家に着く頃には2人ともずぶ濡れだった。

部屋に入り浴室のシャワーを出しっぱなしにして温める。

「先に、シャワーを浴びなさい。風邪を引くといけないから」

杏は凜の手を離そうとしなかった。

「それじゃ、ここで待っているから」

「うん。絶対にそこに居てね、約束だよ」

「ああ、判ったよ」

杏がシャワーを浴び始める、凜はドアの外に立ったまま待っていた。しばらくすると杏が出てきて凜がシャワーを浴びる体の芯まで冷えていた。

杏がつかんでいた腕を見るとはつきりと手の跡が痣になっていた。

「あれは何だったんだ、いったい」

凜がシャワーから出てくるとドアの側で杏が蹲る様に座って凜が出てくるのを待っていた。

「寝ないのか？」

「寝るけど……」

「部屋に行こう」

「うん」

杏が凜の手をつかんで着いて来る。

「もう寝なさい」

その時、遠くで雷鳴がすると杏の顔が引きつった。

「それじゃ、杏が寝るまで側にいるから」

凜がベッドの脇に座ろうとした時、杏が凜に抱きついてきた。

杏の目から大粒の涙が流れていた。

「うわああああああん」

「おい、杏。どうしたんだ？」

杏が抱きついた勢いでベッドに倒れこんだ。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

杏は泣きながら繰り返し謝るばかりだった。

「分かったから」

凜は杏を抱しめる事しかできなかった。

しばらく、杏の体を抱しめていると少し落ち着いたのか杏が凜の腕

の中で話し始めた。

「私がまだ子どもの頃、パパとママと3人で出かける約束をしたのでも、パパの仕事の都合でキャンセルになって約束を破った事に怒った私が我俣を言って無理矢理ドライブに行ったの。天気がだんだん悪くなつて夜になると雷もなり始めて……そうしたら大きなトラックがスピードの出しすぎで突っ込んできて。気が付いたら……パパもママも動かなくなつて……」

「分かったから、もうそれ以上何も言わなくて良いからな」

「うん」

杏はしばらくしゃくり上げていた。

「ねえ、凜？ 側に居てもいい？」

「どうしたんだ？」

「ずっと、側に居て欲しい」

「……………」

「約束して欲しいの。駄目かな」

「……………」

凜は杏の顔を哀しそうな目で見ながら何も答えようとしなかった。

「ねえ、凜。聞いているの？」

「聞いているが」

歯切れの悪い返事だった。

「やっぱり私じゃ駄目なんだ」

「そうじゃ、無いんだ。出来るか判らない約束をしたくないんだ」

「それじゃ、出来るだけ側に居て。これなら良いでしょ」

「そうだな、出来るだけ側に居よう」

「約束だよ」

「ああ、約束だ」

それから少しすると泣き疲れたのか杏が凜の腕の中で寝息を立て始めた。

凜が安心して起き上がろうとすると杏がシッカリと凜のシャツをつかんでいて起き上がる事が出来なかった。

「まいったな、しょうがないこのまま寝るしかないか」

翌朝、杏はとても温かいものに包まれて目を覚ました。

目を開けると凜の顔が目の前にあった、杏の手はシツカリと凜のシヤツをつかんでいた。

「あのまま、寝ちゃったんだ」

杏がゴソゴソと動くと凜が目を覚ました。

「おはよう」

「おはよう」

「昨夜はありがとう。お礼だよ」

杏が凜にキスをしようとして凜の目を見ると凜の目から一瞬光が消え、唇が触れる寸前で離れた。

「ご、ゴメン。冗談だから」

「どうしたんだ？」

「な、なんでもないよ」

凜の目をもう一度確認するいつもの凜の目になっていた。

光が消えた凜の顔がとても怖く心臓の鼓動が大きくなっていった。

『な、なんだったの？ 凜はどうしちゃったんだろ。まだ、ドキドキがとまらないよう』

杏は心の中で呟いていた。

どうして？ なんて理由を聞けるわけも無く話題を換える。

「今日は泳がないの？」

「今日は、キャンセルだな。天気も良くないし体もだるいな」

「私の所為だよな？」

「違うよ、雨の所為だ」

「そ、そうなんだ」

店に出勤すると葛城が鼻歌を歌いながら仕込みを始めていた。

「葛城、ご機嫌だな」

「そりゃそうですよ、明日は杏ちゃん歓迎ビーチパーティーですよ」  
「そうか、明日か。忘れていたよ」

「大丈夫ですか？ 凜さん、なんだか今日は少し変ですよ」

「昨日、帰りに雨に降られてずぶ濡れになったから体がだるいんだよ」

「杏ちゃんは大丈夫なんでしょうね！」

「あそこで元気に仕事しているだろう」

何とかランチを終わらせたものの凜の体調が良くないのは誰が見ても判るくらいになっていた。

「凜さん辛そう大丈夫かな。楓」

「でも、凜さんに休めなんて言っても聞かないもん」

「言う事を聞かないって言う事？」

杏が不思議そうに楓と柚葉に聞いた。

「そう、凜さんは絶対に休まないの。だから時々葛城がパーフェクトマシーンって呼んでいるでしょ」

「私が言ってくる」

「杏ちゃん駄目だよ」

2人の制止も聞かずに杏はソファで休んでいる凜に話しかけた。

「凜、そんなに辛いなら帰って休んだら」

「大丈夫だ」

「誰が見ても大丈夫そうじゃないから言ってるの！」

「今日は、大切な予約が入っているんだ。無理だ」

「もう、凜の馬鹿！ 心配して言っているのに。もう知らない」

それを、遠巻きに見ていた楓達が肩を落とした。

「ああ、やつちゃった」

「何を騒いでるの準備をしなさい、時間でしょ」

オーナーの亜紗が事務所から顔を出した。

「はい」

ミーティングも終わりディナーが始まった。

予約のお客様は早い時間のご来店だったので食事も終わりドルチェを楽しんでいた。

杏がキッチンを見ると凜が笑顔で仕事をしている。

「何で、笑顔で居られるの？」

杏は不思議に思った。

しばらくすると、凜がチーフの藤崎と何かを話していた。

「らしくないですね。凜さん」

「すみません。チーフ」

「いつでも頼ってもらって良いんですよ、仲間なのだから。オーナーに話してきます」

「お願いします」

凜が藤崎に頭を下げると藤崎が事務所に行きオーナーと一緒に出てくる。

そして藤崎がキッチンに入りオーナーがホールに立った。

凜は2人と入れ替わりに事務所に入ってしまった。

「どうしたの？ 凜が心配？」

杏の顔を見て亜紗が話しかけてきた。

「あんな奴、どうなっても知らないんだから」

「本当にしょうがない子ね。事務所を覗いてきなさい」

「えっ？」

「いいから早く」

「は、はい」

杏が渋谷事務所を覗き込むと凜はパソコンに向かい何かをしていた。

「どうしたんだ杏？」

凜は振り向かず杏に言った。

「何でもないもん」

「書類の整理をしているだけだよ、貯まっていたんでな」

杏がドアを閉めてホールに戻ると杏の顔から不安は消えていた。

## quattro・2

普段より多くのお客様が来店しバタバタと営業が終わり賄いを食べる。

いつもは事務所で賄いを食べるオーナーとチーフが皆と一緒に賄いをテーブルで食べていた。

「オーナー、凜さんは？」

「もう、だいぶ前に帰ったわよ」

「ええっ」

杏が驚いて立ち上がった。

「杏、落ち着いて座りなさい」

亜紗のいつになく静かな声だった。

「は、はい」

「なんで、凜が帰ったか判る？」

「判りません」

「この店名のARIAはイタリア語で空気とか雰囲気という意味なの、レストランでは落ち着ける雰囲気がとても大切な。スタッフの誰かが自宅で喧嘩してきてもその空気は伝わってしまう。ましてや店内で言い争ったり、不安そうな顔をして仕事をしていたらダイレクトにお客さんは感じてしまうものなのよ」

「すいませんでした」

「昨夜、あなたと凜に何があったのかは知らないけれど……」

亜紗が杏の瞳が揺れているのに気付いて話を止めた。

「実は、昨夜の雷雨で私のトラウマが出てしまってパニックになったんです」

杏が亜紗に応えるように話し始めた。

「トラウマって？」

「私が小さい頃、約束を破った両親に我俣を言って無理矢理ドライ

ブに行つて。その帰り道、昨夜の様な雷雨にあつて。対向車線からスピードを出しすぎたトラックがカーブを曲がりきれずに突っ込んできて……私が気付いた時には乗っていた車は滅茶苦茶で……目の前に居たはずの両親は血まみれで動かなくなっていました……」

誰も杏に声を掛けられなかった。

楓も柚葉も、そして葛城も俯いていた。

誰よりも辛い思いをしていたのは杏だったのだ。

「だから本当に稀なんですけど、激しい雷雨の時はその時のことがフラッシュバックしてパニックを起こしちゃうんです。でも凜はぶ濡れになりながら受け止めてくれた、だから心配で……」

杏の目から涙が流れていた。

「そうだったの、そんな事が……こんな時じゃないと話せないから凜の話も聞いて頂戴。いいわよね。藤崎」

「そうですね」

チーフの藤崎の了承を得ると亜紗が大きく深呼吸をして話し始めた。

「凜の奥さんが私の双子の妹だって皆は知っているわよね。そして私達がヤンチャをしていたのも、そんな時に2人は出会ってしまった。私は2人が付き合う事に猛反対だった。でも凜はきっぱり足を洗うと約束してくれたの。そして本当に足を洗い普通の会社に勤め出した。だから私は2人の交際を認めたのよ。そして桃香が生まれて幸せそのものだった。桃香が大きくなるに連れて凜の仕事も忙しくなつたわ。そして桃香が七歳の時、小学校の入学式に出席する為に駅前で待ち合わせの約束をしていた。でも数分だけ凜が遅れた……」

……

亜紗はそれ以上話せなくなつてしまい藤崎が話を続けた。

「凜の目の前で過労のせいで居眠りをした運転手の車が駅前に突っ込んだ。そして双樹さんも桃香ちゃんも帰らない人になつてしまった。その運転手が私です。凜さんは決して私を責めなかった。そればかりかこうして私に仕事と生活の場所を与えてくれた」

藤崎が唇を噛み締めた。

「しばらくすると凜は人と接するのを嫌がるようになり突然姿を消したの」

亜紗が再び話し始めた。

「イタリアに居た事があるって、放浪していたって」

「杏ちゃん。そうなんだ、しばらくイタリアに居たのね。ある日ふらつと帰って来た時にはほんの僅かだけれど元気になっていたわ。でも人と距離を置くようになっていた。それともう1つ約束にナ―バスになっていた。約束が凜にとってトラウマなのよ、だから安易に約束なんか絶対にしない。そして、定職に付かなくなった。いつでも自由に居られるバイトばかりをするようになってしまったの。だから私がここに店を出そうと決めた時に無理矢理に連れてきたの」

「なぜ、この島に店を？」

杏が不思議に思い亜紗に尋ねた。

「ここは自然体のままで居られる場所だから。そして島に来る交換条件に藤崎とその家族もここに連れて来ることを提示されたの。最初は驚いたわでも、それが凜なのよ。誰も責めない、いつも自分で責任を取る」

「そんな事が凜さんにもあったんですね」

楓が溜息をついた。

「でも、10年近くも1人でいるなんて奥さんの事を忘れられないのかなあ」

柚葉が考え深く言った。

「それも少し違つかも知れない。だいぶ前にいつも哀しそうな目をしていてから少し本気で凜に詰め寄った事があるんだけど、その時に凜の目から光が消えたの。後で専門医に聞いたらそれは非常に危険な状態だって。おそらく凜にとって男女のそういう事はとても大きな約束なんだと思うのだから無意識に人を遠ざけてしまっているんだと思うわ」

「ひ、光が消えたままになるとどうなるんですか？」

杏の脳裏に今朝の事が浮かび上がり、杏が恐る恐る聞いた。

「最悪の場合、2度と意識が戻らなくなるかもしれない」  
「そんな……」

杏が言葉を失い、杏が不安に駆られ急に立ち上がった。

「杏ちゃんどうしたの？」

亜紗の声に杏が我に返った。

「私、帰ります」

「それじゃ、私が送るから」

「タクシーで……」

「分かったわ、藤崎。タクシーを」

「畏まりました」

藤崎が電話をすると数分もしない間にタクシーが着いた。

杏は着替えを済ませタクシーに飛び乗った。

「明日のパーリー楽しみにしていたのになぁ」

葛城が肩を落としてしよげていた。

「明日はもちろんやるわよ。少し前に凜に電話したら大丈夫だって  
言っていたから」

「でも、今日の凜さんの様子じゃ。ねえ、楓」

「そうだね。柚葉」

「凜なら一晩ゆっくり休めば大丈夫よ。集合時間守りなさいよ」

「オーナーがそう言うなら。明日楽しみにしています。さあ、皆帰  
ろう」

「はい」

葛城に促されて帰り仕度を始める。

杏が玄関を開けて部屋に入ると凜はパソコンに向かって何かをして  
いた。

杏に気づき凜がパソコンの電源を落とした。

「どうしたんだ？」

「今日は、余計な事を言つてごめんなさい」

杏が凜に向かって頭を下げた。

「杏が謝る事じゃないだろう、杏は俺の体を心配して言ってくれたんだろう」

「うん、でも」

「この話はこれでお終いだ。シャワーでも浴びてきなさい」

「分かった」

杏がシャワーを浴びて出てくると凜が寝室のパソコンに向かいながらカフェオーレを飲んでいた。

「なんだかい匂いがする」

「ブランドーが少しだけ入っているからな」

「私も飲みたい」

「ちよつとだけだぞ」

ベッドの横に座りカップを受け取り少しだけ飲んでみる。

「美味しい、体がポカポカしてくる」

「風邪薬みたいな物だからな」

凜がカフェオーレの残りを飲み干した。

「寝るぞ」

凜が立ちあがると杏が凜のシャツを掴んだ。

「うん、あのね。お願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「今日も一緒に寝てくれないかなあ。寝ながら少しお話したいし…」

…駄目かな」

「しょうがないな。今日だけだぞ」

「うん」

凜が横になると杏が話を始めた。

「凜の奥さんと桃ちゃんの事、亜紗さんに今日聞いた」

「そうか、やっぱりな」

「やっぱりって？」

「杏の態度が少し変だったからさ」

「分かるんだ」

「分かるさ」

「ごめんね、変な約束させて」

「杏が気にする事じゃないよ。俺が決める事だから」

「今は上手く言えないけれど、約束って縛るものじゃ無いと思うんだ」

「そうかもな。明日は早いからもう寝るぞ」

「うん、1つ聞いていい」

「いいぞ」

「凜は私の事好き？」

「嫌いじゃないぞ、嫌いならこうして居ないからな」

「凜はズルイ言い方するね」

「ずるいか」

「うん、いつまでも逃げていたら何もつかめないよ」

「そうだな」

凜の目に影がさした。

それから2人は何もしゃべらなかつた。

杏が凜の腕の中で涙をこぼしたが凜は杏の涙に気付かなかつた。

杏が目を覚ますと凜の姿が何処にも無かった。

ベッドから飛び起きて杏は部屋中を探し回った。

「凜、どこに？」

玄関を開けて外に飛び出すと眩しい太陽の光が目には飛び込んでくる。目が慣れて下を見ると凜が大きなワゴンに荷物を詰め込んでいるのが見えた。

「凜……良かった」

力が抜けてその場にへたり込んだ。

「ん？ なんだ？」

何か聞えたような気がして凜が3階に上がると杏が廊下で裸足のまましゃがみ込んでいた。

「杏？ どうしたんだ。起きたら早く準備しろよ」

「……」

「杏？」

「目を覚ましたら凜が居ないから……」

「馬鹿だな、どこにも行かないよ。ここは俺の家だぞ」

「うん、そうだね。準備するね」

「ああ」

杏の顔に笑顔が戻り部屋に駆け込んでいく。

廊下の手摺に体を預け空を眺め凜は考えていた。

杏にとって少しずつ大きな存在になってしまっている自分がいる事を。

そして、今は考えてもしようがない事も判り過ぎるほど判っていた。

「凜！ 準備できたよ」

杏が部屋から飛び出してきた。

初めてこの部屋に泊めた時のリネンのワンピースを着て大きな麦藁

帽子を被っていた。

「それじゃ、行くか」

「うん」

下に降りてワゴンに乗り込み車を出す。

後ろにはバーベキューの台などが積み込まれていた。

「凜、この車はどうしたの？」

「義姉さんが借りてきたんだよ」

「亜紗さんて、何者なの？」

「オーナーだろ」

「だって、あんな大きなお店を持っているんだよ」

「そうだな……まあ、お金持ちはお金持ちかなあ」

「凜、微妙過ぎる」

『ARIA』で材料の下ごしらえを済ませて、クーラーボックスに詰め込んで。

亜紗や楓と柚葉、葛城が店の前で凜達を待っていた。

「早く来ないかなあ」

「もう、来る頃ね」

「いつも凜さんは時間厳守ですもんね」

「俺は眠くて敵わないよ」

店の駐車場にワゴンが滑り込んできた。

「お待たせ、葛城。荷物を運んでくれ」

「はい、分かりました」

葛城がクーラーボックスを運んで車に乗せる。

荷物を積み終えたのを亜紗が確認して声を掛けた。

「さあ、出発よ」

「……イエー！ レッツ ラ ゴー……」

楓・柚葉・杏が声を合わせ拳を突き上げた。

車はしばらく走ると海沿いの道に出る。

海がキラキラと輝いていた。

「うわぁ、綺麗な海」

「杏ちゃん、ここは名蔵湾って言う海で。これから行く海はもっと綺麗なんだよ」

「楓ちゃん、本当に？」

「うん、嘘じゃないよ。ねえ柚葉」

「そうだね、あまり観光客は来ないしね」

「そうなんだ、楽しみだなあ」

海沿いの道を抜けると峠道のようなカーブの連続する道にはいりしばらくすると集落が見えてくる。

その集落を抜けて未舗装の農道に車を入れる。

「うわージャングルみたい」

「もう少しで着くからな」

「うん」

すこし、進むと開けた場所に出て、その一番奥に車を止めた。

「葛城、義姉さん。着いたぞ起きてくれ」

後ろの席で出発と同時に寝ていた2人を凜が起こした。

「さあ、荷物を運んで準備だ」

杏が助手席から飛び出して海に続く小道にはしりだして立ち止まっていた。

「杏、どうしたんだ？」

「七色の海だ……凄い」

杏の目の前には真っ白い砂浜があり、その向うには、エメラルドグリーンや青、コバルトブルーなどの色に輝く海が広がっていた。

「杏も荷物を運ぶのを手伝ってくれ」

「う、うん。分かった」

凜が雪遊びをする為のプラスチックのソリを持っていた。

「凜さん、それ何に使うんですか」

「これに荷物を載せて運ぶんだよ、その方が楽だろ。葛城」

「流石、パーフェクトマシーン。それじゃ早速」

「荷物をシツカリ押さえないと倒れるからな」

「はい」

2人1組になって荷物を運ぶ。

「私も頭数に入っているのね」

「義姉さん、当然です。働かざる者」

「食うべからずよね、やつぱり」

亜紗が顔を引きつらせながら笑った。

何度か往復すると荷物は総て運び終わったようだった。

「荷物が残っていないか確認してくるから」

凜が車に向かうと杏が後を追いかけた。

「私も行く！」

「杏ちゃん、すっかり凜さんにべったりだね」

楓が溜息をついた。

「でも、あんなに楽しそうな凜さん初めて見るかも」

「そうだね、柚葉」

杏がビーチの入り口の坂の上で海を眺めていた。

「杏、帽子を押さえる！」

後ろから凜の声がして杏が慌てて帽子を押さえる。

凜の声で皆が杏の方を見た。

その瞬間、杏の体がふわっと浮いて凜に抱きかかえられてまるでスノーボードでもしている様に凜がソリに立って滑り降りてきた。

「もう、凜の馬鹿。驚いたじゃん。でも、気持ち良かったよ」

杏が真っ赤になって俯いた。

「超クール！ 俺も」

葛城がソリを持って坂の上に駆け上がり真似をしてソリに立った瞬間後ろに倒れて砂まみれになった。

「あはははは」

楓が大笑いした。

「クソ！ 何で出来ないんだ」

「凜さん……」

「柚葉もか？」

柚葉が凜のＴシャツの袖を引っ張り柚葉が頷く。

「Ok、行こう」

柚葉と凜が坂の上に上がり柚葉が杏と同じように立った。

「行くぞ」

「きゃっ！」

柚葉の体を持ち上がり大きな弧を書いて凜が滑り降りる。

「気持ち良い！」

柚葉が珍しく叫んだ。

「じゃ、楓も！」

「分かった、分かった」

楓を抱きかかえて滑り降りると亜紗の声がした。

## q u a t t r o . 4

「凜！　いつまで遊んでいるの！　凄く暑いんですけど」

見ると木の下で恨めしそうに見ている亜紗の姿があった。

「やばい、葛城。準備だ」

「は、はい」

凜と葛城が駆け出す。

凜の指示に従って葛城が走り回り木陰の前にあつという間に日除けのタープが張られ、その下にシートが引かれた。

「お嬢様、こちらへどうぞ」

凜が深々と頭を下げると亜紗がタープの下に入った。

「本当に、凜は子どもなんだから」

亜紗は不機嫌だった。

凜と葛城が直ぐにバーベキュー台を組み上げてテーブルをセッティングして炭を熾した。

「これで準備OKですね。凜さん」

「そうだな、泳いできて良いぞ」

「よっしゃー。おい、泳いでいいってよ」

波打ち際で遊んでいる杏達に声を掛ける。

3人がタープの下で着替え始める着替えと言ってもTシャツやワンピースの下に水着を着て来ているので脱ぐだけなのだが。

そして楓と柚葉は日焼け止めを塗りあって、葛城は我先にと海に飛び込んだ。

杏は1人で日焼け止めを塗っていた。

「ちゃんと、日焼け止め塗らないと後が大変だからな」

「うん、でも背中が塗れないよう」

「しょうがないな、こっぴに來い」

「うん、ありがとう」

凜が杏の背中に日焼け止めを塗る。

「凜の手、温かい」

「生きているからな」

「もう。また、はぐらかす」

その時、楓が声を掛けてきた。

「杏ちゃん、行こう」

「ほら、呼んでいるぞ」

「うん、行ってくるね」

「ああ」

杏が立ち上がり楓達の方に歩き出した。

「杏ちゃんのビキニ可愛いね」

杏は凜に買ってもらったオレンジのビキニを着ていた。

「楓ちゃんも柚葉ちゃんもよく似合っているよ」

楓は青いセパレートのスポーティーな水着を、柚葉は花柄の可愛らしいワンピースの水着を着ていた。

3人が海に駆けだし飛び込んだ。

凜が優しい目で見ていると後ろから亜紗が凜に話しかけてきた。

「凜、あなたこのままで良いの？」

「何がだよ」

「杏ちゃんの中であなたの存在がとても大きくなっている気がするけど」

「そんな事は言われなくても判っているよ。でも突き放す訳にも行かないだろう」

「そうだけど、このままじゃ」

「別れが辛いかな？ 別れなんていつでも辛いもんだよ。そうだよ」

「凜の中でも杏ちゃんが存在が大きくなっているんじゃないの？」

「昨日、私の事が好きかって聞かれたよ」

「あなた、何て答えたの？」

「嫌いじゃないと。ずるいと言われた、でも俺にはそれしか答えようが無かった」

「あの子、本当は」

「夏海 杏だろ、知っているよ。俺だって馬鹿じゃない、調べたさ」  
「知っていて深入りしたら……」

「深入りしたら何なんだ？ 俺は義姉さんとの約束を破るような事  
はしないさ。それにあいつはハードな生活が嫌で逃げだしたんだろ  
う、ここに居る杏がたぶん本当のあいつなんだ。それなら俺に出来  
る事は今の時間を精一杯楽しませてやる事しか出来ないだろう。時  
期にここも見つかるさ、時間の問題だ。その時が別れの時だ」

「1つだけ聞いていい」

「ああ」

「いつから夏海 杏だと判っていたの？」

「最初からだよ、俺のもう1つの顔は……」

「凜！ 一緒に遊ぼう！」

杏が波打ち際から凜を呼んだ。

「仕方が無い。行ってくるわ」

凜が立ち上がり海に向かい走り出した。

「知っていたのならあんな約束させなかったのに……凜の馬鹿……  
双樹ごめんなさい、また凜を苦しめることになりそう」

亜紗が膝小僧を抱え、亜紗の目から一滴の涙がこぼれた。

皆、楽しそうに海で遊んでいると葛城が凜に勝負を挑んできた。

「凜さん、毎朝泳いでいるらしいじゃないですか。あのオレンジの  
浮玉まで泳いで行って帰って来る競争しましょう」

凜が見ると沖にオレンジ色の浮玉が浮かんでいた。

「面倒くさい」

「面倒くさいって、子どもじゃないんだから。俺が負けたら凜さん  
の言う事何でも聞きますよ」

「何でもだつて、凜さんの下僕のくせに」

「楓は黙ってる」

楓がちゃちゃを入れると葛城が真剣な眼差しで楓を睨みつけた。

「一応聞いてみるが。もし、葛城が勝たら何がしたいんだ？」

「杏ちゃんとデートさせてください」

葛城に凜が聞くと満面の笑顔で葛城が答えた。

「……杏、どうする？」

「知らない」

杏がそつけなく答えた。

「それじゃ、杏。俺のバックからゴーグル持ってきてくれ」

「わ、分かった」

杏の声はぶつきら棒で不機嫌そのものだった。

「り、凜さん。勝つ自信あるんですか？」

「柚葉、自信なんてないよ。あいつは俺よりひと回り以上若いんだぞ、それにトライアスロン経験者だしな」

「ええ、トライアスロンって……」

凜のゴーグルを持ってきた杏が柚葉と凜の会話を聞いて固まっていた。

「そうなんだ、葛城ってああ見えてもスポーツ万能なの」

「楓ちゃん、それ本当なの？」

杏が不安そうな声をした。

「よっしゃー。始めますか」

葛城が俄然はりきりだした。

「楓、スタートの合図頼む」

「はい」

楓を挟んで2人が立つと楓が両手を上に上げる。

「よい。スタート！」

楓が手を振り下げると葛城が猛ダッシュした。

凜は軽く泳ぎ出し直ぐに差が開き始めた。

亜紗は海で遊んでいる凜達を見ていた。

「しょうがないわね。凜の口から約束を取り付けたのは私。私も覚悟を決めなきゃ凜に悪いわね。トコトンいく所まで私も付き合うわ

よ」

亜紗が立ち上がり海に向かって歩き出した。

「り、凜の馬鹿！ 負けたら私、許さないんだから！」

杏が凜に向かって叫んだ。

その時、後ろから優しい声がした。

「大丈夫よ、杏ちゃん。凜は売られた喧嘩に負けたことが無いの。見てなさい」

杏が振り返ると亜紗だった、そして亜紗が凜に向かって叫んだ。

「凜！ GO！」

すると凜のピッチが上がり始め、見る見るうちに葛城に追い付き折り返しでは殆ど並んで居るように見えた。

「凄い、凜さんの泳ぎ綺麗だね。楓」

「そうだね、あんな綺麗な泳ぎ見た事無いよ。まるで魚が泳いでいるみたい」

葛城は水しぶきを上げて泳いでいるのに対して凜は殆ど水しぶきを上げていなかった。

そしてゴールの手前で凜が海に潜った。

「あれ？ 凜？」

杏が凜の姿を探すと杏の目の前に海の中から凜が現れた。

「きゃっ！」

杏が後ろによろけると杏の体を亜紗が支えた。

「勝ったかな？」

「うん！」

杏が笑顔で答えた。

その時、杏の後ろから亜紗が凜の頭を水の中に押し込んだ。

「あんたって子は、どうしたら女の子を賭けの対象なんかにするかな。少し頭を冷やしなさい」

凜が手をバタつかせ、亜紗が手を離れた。

「ゲホゲホ！ あー死ぬかと思った。義姉さんの鬼！」

「もう一度、沈んでみる」

「いや、もう結構です」

「勝てねえー、ちくしょう!」

葛城が息を上げながら海から上がってくると叫んでビーチに倒れこんだ。

「疲れた……」

「お疲れさん」

凧が葛城に声を掛けると葛城が悔しそうな顔をしながら凧を見上げるが涼しそうな顔をしている。

全力で泳いだ直後には見えなかった。

「なんで、息一つ乱れてないんですか?」

「鍛え方が違うんだよ。バーベキューを始めるぞ」

「はい」

葛城が砂を払い立ち上がった。

「おい、飯にするぞ」

凧が声を掛けると皆海から上がってきた。

「やったー、バーベキューだ」

凧が手際よく肉や野菜を焼き始める。

ジウジウと音をたて香ばしい良い匂いが立ち込めていた。

「さあ、ドンドン焼くからいっぱい食べてくれ」

「……いただきます」

焼いた端から無くなっていく。

凧も摘まみながら焼いては居るがそれ程食べて居るようには見えなかった。

「凧、食べてる?」

杏が申し訳なさそうに聞いた。

「食べてるぞ、杏もいっぱい食べろよ」

「杏ちゃんは凧の事よく見ているのね」

「えっ、亜紗さん。そんな事は無いですよ」

杏がモジモジして答える。

「凜さん！ ラブ！ ああっ葛城それ私の肉だぞ」

「楓、早い者勝ちだ」

「柚葉もたくさん食べろよ。ほら焼けてるぞ」

「はい」

「杏もそんな事を気にしていたらなくなるぞ」

「うん、分かった」

## quattro・5

ワイワイ、ガヤガヤとバーベキューをして満腹になると各々自由に時間を過ごしていた。

葛城はビーチで横になり、楓と柚葉はタープの日陰で昼寝をしていた。

サラサラと爽やかな海風が頬を撫でる。

亜紗と凜、そして杏は海を見ていた。

「静かね」

「そうだな」

杏が立ち上がった。

「どこに行くんだ？」

「お散歩」

「それじゃ、服を着て帽子をかぶって行けよ。日差しが強いからな」  
「うん」

杏がワンピースを着て麦わら帽子をかぶり波打ち際に歩いて行った。

「杏ちゃん楽しそうね」

「そうだな、これで良いんじゃないか」

「私もそう思うわ。杏ちゃんのお陰で凜も少し変わったしね」  
「そうかあ？」

「そうよ」

凜が一眼のデジタルカメラのファインダーを覗いて写真を撮りだした。

「珍しいわね、写真を撮るなんて」

「今は今しかないからな」

凜が立ち上がり、葛城や楓、柚葉の寝顔を写す。

「凜、私はNGよ」

カシャとシャッターがおりた。

「NGだつて言つたでしょ」

亜紗が微笑んだ。

そして凜は杏の所に歩いていき杏の写真を撮りはじめた。

「凜、一緒に散歩しよう」

「少し、歩くか」

「うん」

2人並んで歩き出した。

「綺麗な海だね。生まれて初めてこんな綺麗な海を見た。本当に凜が言っていた様に天国みたい。ありがとうね」

「ありがとうなんて。急にどうしたんだ？」

「だって、凜があの時連れ出してくれなかったら。こんなに綺麗な海見られなかったもん、それに毎日が輝いていて楽しいの」

「そうだな」

「凜？」

「何だ？」

「手繫いで良い？」

「ほら」

ぶつきらぼつに凜が手を出した。

「えい！」

杏が凜の腕にしがみ付いた。

「杏、それは繋ぐと言わないんじゃないか」

「だって、良いじゃん」

「まあ、良いか」

「そうそう」

楽しそうな杏と凜の姿を亜紗が微笑みながら眺めていると横で寝ていた楓が目を覚ました。

「あれ、凜さんは……ああ、ずるい！」

凜の手を両手で掴みながら歩いている杏を見て柚葉を起こした。

「柚葉、凜さんと遊ぼう」

「うん、分かった」

まだ、寝ぼけている柚葉の手をつかみ走り出した。

「楓、危ないよ」

「早く早く」

楓が柚葉の手を引きながら凜と杏の所に駆け寄る。

「もう、杏ちゃんばっかりずるい。楓も凜さんと手を繋ぐ」

「それじゃ、柚葉も」

「おいおい、手は2本しかないんだが」

「それじゃ、私が3人の写真撮ってあげる」

杏が凜からカメラを取りフリンダーを覗く。

「撮るよ。1+1は？」

「2！」

順番に凜とのツーショットを撮ったりしながら4人で騒いでいると、葛城が起き出してクーラーボックスに入っているお茶を飲んだ。

「あつちー、あれ、皆は？」

「あそこよ」

亜紗が指差した。

「凜さんはモテモテだな。俺も混ぜてもらおう」

葛城が走り出した。

しばらく、遊んでいると亜紗が凜達に声を掛けた。

「少し、早いけれどそろそろ撤収しましょう」

「はい」

楓が返事をした。

「それじゃ、片付けた」

「了解！」

準備も手際よくあつという間だったが、撤収も凜と葛城にかかればあつという間だった。

バーベキュー台やタープを片付けている間に女の子達がソリにクーラーボックスに乗せて車まで運ぶ。

ゴミを集めて撤収が完了した。  
「それじゃ、帰りましょう」

ワゴンに乗り込み『ARIA』に向かう、皆遊び疲れて直ぐに眠ってしまった。

店に着き、凧が寝ている皆を起こした。

「着いたぞ、起きてくれ」

店で積み込んだ荷物を降ろしていると杏に楓と柚葉が何かを内緒話をしていた。

「ねえ、凧」

「どうした杏、帰るぞ」

「あのね、凧。楓と柚葉が凧の家に行つて見たいつて」

凧は腕組みをして少し考えて楓達の方を見ると楓と柚葉が手を合わせて凧の顔を見た。

「少しだけだぞ」

「「ヤッター！」」楓と柚葉が飛び跳ねた。

「葛城はどうする？ 家に来るか？」

「自分は、この後用事があるんで荷物片付けておきますよ」

「そうか、じゃ頼んだぞ。義姉さんまた明日」

「ちゃんとしなさいよ」

「分かってるよ」

ワゴンに乗り込み凧の家に向かった。

マンションの駐車場に車を止めて荷物を運び出した。

「ここが凧さんのマンションなんだ。なんだか普通だね、柚葉」

「そうだね」

「おいおい、普通ってどう言う事だよ」

「もっと、凄い高級マンションかと」

「俺は、そんな金持ちじゃないよ」

3階に上がり凧が部屋の鍵を開ける。

「どうぞ、ごゆっくり」

「うわぁ、凧さんのお家だ」

「先に順番にシャワーを浴びてくれ」

凧が奥の部屋からバスタオルを3枚持ってきた。

「それじゃ、面倒だから3人でシャワーを浴びよう」

凧が2人に言った。

「ええ、はずかしいよ」

杏が嫌がるが問答無用で凧がバスルームに連れて行った。

バスルームからはキヤーキヤーと3人の声が聞えてくる。

凧はパソコンを立ち上げてデジカメのメモリーカードから写真をプリントアウトし始めた。

しばらくすると3人がシャワーを浴び終えて出てきた。

「凧、何をしているの？」

「今日の写真をプリントアウトしているんだよ」

「見せて見せて」

「後でな。俺もシャワーを浴びてくるから」

「うん、分かった」

凧がバスルームに入りシャワーを浴び始める。

凧と柚葉はキョロキョロと部屋を眺めて部屋の中を歩きまわり始め

た。

「こんな、広い所に独りで住んでいるんだ。杏ちゃんこの部屋は？」

「楓ちゃんそこは洋間だよ。物置とクローゼットみたいに使うけれど」

「杏ちゃん、こっちの部屋は」

「寝室だよ」

柚葉が覗き込む。

「うわ、大きなベッドがある。もしかして2人で……」

「ち、違うよ。凜はこのソファで寝てるの」

杏が恥ずかしそうにソファを指差す。

その時、凜がシャワーを浴びて出てきた。

「ほら、ちょうどプリントアウトが終わった所だ」

写真を杏に渡す。

「皆で見よう」

杏がリビングの円卓に写真を広げた。

「げ、いつの間にか寝顔を撮られてる。酷いよ凜さん」

凜はキッチンでコーヒーを入れ始めた。

「欲しい写真があれば持って帰って良いぞ」

「うわあ、見て見て綺麗な写真」

それは杏の写真だった。

白い砂浜の上で七色の海をバックに生成りのリネンのワンピースを着て大きな麦わら帽子をかぶり杏が満面の笑顔をしていた。

「杏ちゃんって、めっちゃ可愛いよね」

「そんなこと無いよ、楓ちゃんだって柚葉ちゃんだって凄く可愛いじゃん」

「そうかなあ」

その時、楓の手に硬い物があたった。

「あれ、ノートパソコンだ」

「あ、それは駄目だよ。凜が絶対に弄るなって言ってたから」

「ふうん、そうなんだ。でも何で？」

「理由は教えてくれないの、仕事用みたい」

「そう言えば、凜さんって時々東京に出かけるよね」

「そうだね、楓。何しに行ってるんだろう」

「ええ、そうなんだ」

そこに、凜が大きな目のカップにカフェオーレを入れて運んできた。

「温かい飲み物しか無いけど良いかな？」

「凄く、いい香りがする」

楓がクンクンと鼻をならしていた。

「ねえ、凜。東京に何しに行ってるの？」

「なんだ、杏。野暮用だよ」

「怪しいなあ、いつもノートパソコンで何かをしてるし。そう言えば仕事って言ってたよね、凜の仕事はコックさんじゃないの」

「そうだけど、趣味みたいな事をしてるんだよ」

「ええ、趣味みたいな事で東京に行くんですか？」

柚葉が驚いていた。

「まあ、それなりにお金ももらえる訳だしな」

「何をしてるんだろうなあ」

楓が疑いの眼差しで凜を見た。

「そんな、目で見えるな。カフェオーレでも飲んでくれ」

「いただきまーす。美味しい」

「凜のカフェオーレは絶品だからね」

「ああ、ずるいんだ。杏ちゃんは毎日飲んでるんでしょ」

「うん」

杏が嬉しそうに答えた。

「車を返してくるから、遊んで居てくれな。あれには絶対触るなよ」  
「分かってるよ」

凜が杏に念を押して部屋を出て行った。

「杏ちゃん、寝室も入って大丈夫なの？」

「楓ちゃん平気だよ」

3人がカフェオーレを飲み終えて寝室に移動する。

「あ、これが凜さんの奥さんと娘さんだ」

楓がパソコンの上の写真を見つける。

「どれ？ 本当にオーナーとそっくりだね」

柚葉が写真を手にとって見て言った。

「マンガやライトノベルがいっぱい、凜さんって秋葉系だったりするのかなあ？」

「柚葉ちゃん、近からずも遠からずって凜は言ってたよ」

「あつ、アクアマリンやグランパがある」

「あちゃ、柚葉はバリバリ秋葉系だからね」

「え、柚葉ちゃんも好きなの」

「うん、歩の大ファンだよ」

「そうなんだ、私も大好きなんだ。グランパに憧れちゃうよね」

「そうそう、最新刊早くでないかなあ」

「え、柚葉ちゃん最新刊ってまだ発売されてないの？」

「来月の筈だけど」

「じゃ、これは？」

「ええ！ 何でここに未発売の最新刊があるの？ 杏ちゃんはもう読んだの？」

「うん、面白かったよ」

「ねえねえ、2人で盛り上がっている所悪いんだけど。そんなに面白いの？」

楓が怪訝そうな顔で柚葉と杏に聞いた。

「面白いよ」

杏と柚葉の声がハモった。

「楓も騙されたと思って読んでみたら」

ベッドの上で楓が本をとってパラパラとめくり読み始める。

柚葉はベッドに寄りかかり最新刊に夢中になっていた。

杏はリビングで今日の写真を眺めて微笑んでいる。

「凜の事大好き。でも、いつか終わっちゃうんだよね、この生活も……」

「ただいま」

凜が車を返し買い物をして帰ってきた。

部屋を見ると楓と柚葉は本に夢中で凜が帰ってきたのも気付かない様子だった。

「さあ、飯でも作るか」

「私も手伝う」

「ん？ 杏泣いてたのか？」

杏の目が少し潤んでいた。

「違うよ、馬鹿」

杏が腕で目をこすった。

キッチンで晩御飯の仕度を始める。

「凜、ニンジンはどうするの？」

「千切りにしてくれ」

「千切り？」

杏が恐る恐る包丁でニンジンを切り始めた。

「危なっかしいな、杏は料理苦手なのか？」

「うん、あまりした事が無い」

「包丁はこう握って、左手はこう」

凜が杏の後ろから杏の手を取って教える。

「ゆっくりで良いからな」

「うん、分かった」

凜が横で料理をし始めると杏がそれを見ていた。

「痛い！」

杏が包丁で指を切った。

「馬鹿、よそ見るからだ」

杏の手を取って傷口を口に含むと杏の顔が赤くなる。

「押さえておけ」

凜が杏の指に絆創膏を張った。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう」

「直ぐ出来るから出来た物を運んでくれないか」

「分かった」

凜がとても手際よく料理を仕上げていく、出来上がった料理を杏がテーブルに運んだ。

豆腐チャンプルにメカジキの竜田揚げ、サラダに昨日の残り物の里芋の煮つ転がしと黒紫米入りのご飯に味噌汁が今日のメニューだった。

「楓、柚葉、晩飯が出来たぞ」

凜が本に夢中の2人に声を掛ける。

「えっ、晩御飯？」

楓がリビングを見ると円卓の上には料理が並べられていた。

「柚葉、ご飯だって」

「う、うん」

「良いんですか？ ご馳走になって」

「構わないさ、大勢で食事した方が楽しいだろ」

「うわ、何だか和食って感じた」

「いただきます」

2人が席に着いて皆で食べ始める。

「凄く美味しい、お家では和食なんですか？」

「そうだな、普段は店でイタリアンか洋食ばかりだからな。休みの日は和食が多いかな」

「独りの時ですか？」

「ん、独りの時はほとんど食べないか外食かな」

「それじゃ、杏ちゃんの為に作っているんですね」

「柚葉、別にそういう訳じゃないぞ。2人なら作った方が安いしな」  
「そんな理由なんだ」

杏がボソツと言った。

「でも、杏ちゃんは良いよな凜さんと四六時中一緒に居られるんだもん」

「楓ちゃんも凜が好きなんだ」

「あ、杏ちゃん！何を言ってるの私はただ懂れてるだけだから」  
「楓と柚葉は、普段何を食べてるんだ？」

「お弁当が多いかな、作るの面倒だし柚葉も私も料理得意じゃないし」

「楓ちゃんも柚葉ちゃんも料理駄目なんだ。それじゃ、凜に教えてもらおうよ」

「ええ、凜さんに？迷惑だよ」

「お店の休憩時間に少しだけなら駄目かな。凜」

「しょうがないな、少しだけだぞ」

「やったー、約束だよ」

「ああ、分かった」

食事も終わり凜が楓と柚葉を家まで送りに行き。

杏が片付けをしていた。

「ただいま、杏。終わったか？」

「もう終わるから大丈夫だよ」

「そうか」

凜がソファーに座り込んだ。

「終わったよ」

そう言つて杏が凜の横に座った。

「ご苦労様」

「うん。そうだ、凜」

「突然何なんだ？」

「まだ、発売前の新刊が何でここにあるの」

「新刊？何の事だ」

「柚葉ちゃんがグランパの新刊はまだ発売されてないって」

「知り合いに貰ったんだよ」

「それで、読んだの」

「読まないぞ」

「え、じゃあ。何であんなに揃ってるの」

「さあな」

「本当に、凜はずるい！ 肝心な所でいつも逃げ出すんだから」

「そうだな、杏はずるい大人になるなよ」

「凜の馬鹿」

「そのうち、分かるようになるよ」

「本当に？」

「多分な」

「必ず、教えてもらうからね」

「分かったから、今日は疲れたから寝るぞ」

「うん」

杏がベッドに向かい横になった。

「凜、お休み」

「お休み、杏」

c i n q u e . 1

翌日からはいつもの1日が始まった、午前中にプールで泳いだり海  
の見える公園で野良猫と遊んだり。

そして仕事の休憩時間には約束どおり凜の料理教室が開かれた。  
あつという間に1週間が過ぎていった。

「杏ちゃん、何だか嬉しそうだね」

「楓ちゃん、だって明日はお休みだもん。何して遊ぼうかなあ」

少し潤んだ瞳で日曜日を楽しみに待ち望む子どもの様な顔を杏がし  
ている。

「そうだ、竹富島に行ってみない。柚葉と3人で」

「竹富島？」

楓の突然の誘いに素っ頓狂な顔をした。

「そう、ほら。あそこに見える島だよ」

「でも、凜は？」

「杏、たまには俺抜きで遊んで来い」

凜の声がキッチンからしてきた。

「うん、分かった」

「それじゃ、決まりね。明日の9時に迎えに行くから」

「準備して待つてるね」

翌朝、時間どおりに楓と柚葉が迎えに来て杏は出かけて行った。

凜はそれを確認して亜紗に電話をかけて出掛けた。

杏達は凜の家から歩いて離島桟橋に向かいそこから船に乗る。

「楓ちゃん、船の切符は？」

「もう、買ってあるから直ぐに船に乗ろう」

「ええ、買ってあるって？」

「いいから、いいから。乗るよ」

「分かった」

杏は首を傾げながら船に乗り込んだ。

「後ろのデッキの席が良いよ」

3人で並んで座ると船がエメラルドグリーンの海の上を滑るように走り出した。

しばらくすると海の色が変わる綺麗な水色や青になった。

「綺麗！」

杏が叫ぶが船のエンジン音にかき消された。

しばらくすると竹富島の港が見えて来る、港に着き船を下りるとレンタサイクルのお店の人が楓の名前が書いてあるカードを持って出迎えてくれた。

「雨宮 楓さんですね。こちらのワゴンに乗ってください」

案内されるがままにワゴンに3人が乗り込むとワゴンが走り出した。緩やかな坂を登り集落の入り口でワゴンが止まった。

3人が降りると既に3台の自転車が用意されていた。

「これが、竹富島の地図になります。困った事があったら気軽に電話してくださいね」

さつき出迎えてくれた女の子から地図を受け取る。

「それじゃ、レッツ ゴー」

柚葉が片手を挙げた。

「行くよ、杏ちゃん」

「うん、どこに行くの？」

「とりあえず、コンドイビーチだよ」

自転車で集落を抜けると直ぐビーチに到着した。入り口に自転車を置いて歩いてビーチに向かう。

真っ白な砂浜に遠浅の青い海が広がっていた。

「綺麗、石崎と違ってここもいい感じ」

杏が海に見とれていると楓が声を上げた。

「あ、あった。バスの売店。柚葉、杏ちゃん、行くよ」

楓がバスに向かって歩き出すと杏と柚葉は楓の後に続いて歩き出す。

バスに着くと楓が中に居る男の人に声を掛けた。

「すいません、ARIAの凜さんの紹介で来たんですけど」

「おお、来たな。楓ちゃんに柚葉ちゃん、それに杏ちゃんだね。凜から聞いているよ、3人とも可愛いなあ。凜の奴は相変わらずだなあ。そうだ、これうちからのサービス食べてね」

男が力キ氷を3つ楓に渡す。

「ありがとうございます」

「そうそう、俺、連れんって言うんだ。一日中ここに居るから何かあつたら顔を出してね」

「はい、蓮さん。いただきます」

3人で近くのベンチに座って力キ氷を食べる。

「冷たくって美味しいね」

「そうだね、楓」

「ねえねえ、何だか変だよ」

杏が不思議そうな顔をして2人に言った。

「実はね、凜さんに頼まれたの」

「柚葉ちゃん。それどういう事？」

「あのね、凜さんがお休みに急用が出来て出掛けないといけないから、明日の休みに杏を竹富島にでも連れて行って遊んでくれないかって」

「そうだったんだ。直接言えば良いのに」

「杏ちゃんをがっかりさせたくなかったんだよ」

「そうかな、楓ちゃん」

「そうに決まってるじゃん。凜さんも杏ちゃんの事好きなんだよ」

「それは、少し違うと思うLOVEじゃなくてLIKEだと思う」

「もう、杏ちゃんは今までの凜さんを知らないからなあ」

「楓ちゃん、どうして？」

杏が不思議そうな顔をして首を傾げた。

「凜さん、杏ちゃんが来てから変わったもんね。前なら絶対に女の子なんか家に入れなかったし、それに皆と海に遊びに行ってもあん

な風に遊ばないで見ていただけだったもんね」

「柚葉ちゃん、本当に？」

「本当だよ、少しずつだけど私達との距離が近く感じるもん。オーナ―が言ってたじゃん。凜さんのトラウマだって」

「でも、凜のトラウマが治るまで私ここには……」

杏が寂しげな顔をした。

「ああ、もう湿っぱい話は終わり。次に行ってみよう！」

楓が元気よく声を上げた。

「楓ちゃん、次って？」

「水牛車に乗って島内観光だよ」

「それじゃ、早く行こう」

3人が立ち上がり走り出し、自転車に乗り水牛車の乗り場に向かう。

水牛車乗り場には数頭の大きな水牛がいた。

案内所に行き名前を告げると切符をくれた。

「なんだか、水牛って可愛い目をしてるよね。それに大きな角だね」

「う、うん。杏ちゃん怖くないの」

「え、怖くないよ。あ、楓ちゃん怖いんだ」

「だって、大きな動物が苦手なんだもん」

水牛の後ろの車に乗り込むと、真っ黒に日焼けしたおじいが出発の合図をしてしゃべり始めた。

そして三線を引きながら安里屋ユンタを歌い出した。集落を一巡りする。

「沖縄民謡って何だか心が落ち着くね。始めて聞いた気がしないし」

「そうかな、杏ちゃんってなんだか不思議」

「何で？」

「だって、ミュージシャンみたいな事言っただもん」

「ええ、そうかな。ただそう感じたただけなんだけど」

「柚葉はどう思う？」

「私は、島の時間が好き。ゆっくりと流れて総てを包んでしまう様

な」

「そうだね、時間に縛られることないもんね」

「そうか、だから自由に居られるんだ」

3人でゆっくりとした時間を楽しんだ。

星砂の浜に行ったり、八重山そばを食べたり。

凜から借りたデジカメでたくさんさんの写真も撮った。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう、帰りの船の時間になっていた。

「楽しかった、誘ってくれてありがとうね」

「うん、私達も楽しかったよ。ね、柚葉」

「そうだね、離島にはあまり来る機会無いからね」

「ええ、そうなんだ」

「今度は違う島に行こうね」

「うん」

船で石垣島に戻り、離島栈橋で楓と柚葉と別れマンションに向かった。

c i n q u e . 2

凜は亜紗と東京から来た人と話を終えてマンションに戻り、着替えを済ませてソファアにへたり込んだ。

「疲れた。しかし、参ったなあ。はあ」

凜が溜息をつくとそこに杏が帰ってきた。

「ただいま」

「お帰り……」

「凜？ 大丈夫？」

凜が疲れきった顔をしていた。

「ああ、少し疲れただけだ。竹富島はどうだったんだ？」

杏が凜の横に座った。

「凄く、楽しかったよ。コンドイビーチは凄く綺麗だし、それと水牛車にも乗って。星の砂の浜でしょ。おソバも美味しかった」

「楽しめたんだな」

「うん。凜、ありがとうね。全部手配してくれたんでしょ」

「まあ、楓や柚葉もあまり離島に行った事が無いと言っていたしな。たまには良いんじゃないか」

「凜の用事は済んだの？」

「ああ、終わったよ」

「何の用事だったの？」

「仕事の話だよ。これからの事とか色々とな」

「そうなんだ。大変だね」

「仕方が無いさ、義姉さんとの約束だからな。コーヒーでも飲むか」

「うん、美味しいカフェオーレね」

「了解」

凜が立ち上がりキッチンに向かいコーヒーマーカーをセットしミルクパンに牛乳を入れて火に掛ける。

「そうだ、今日ね安里屋ユンタって言う民謡を聴いたよ」

「さあー君は野中の茨の花あか サーユイユイ ってやつか」

凜が節を付けて歌った。

「えっ、凜も歌えるの？」

「少しだけ知っっているだけだよ」

「その続きは？」

「暮れて帰れば ヤレホンニ 引き止める マタ ハーリヌ チン  
ダラ カヌシャマヨだったかな原曲はよく知らないけどな」

「凄い、おじさんがもう1つの方も歌ってくれたけどよく分からな  
かったんだ、マタ何とかって意味があるの？」

「綺麗な可愛い娘さんよとか愛しい綺麗な人よって意味らしいぞ」

「それじゃ、凜は方言も判るの？」

「少しだけな。ほら、カフエオーレだ」

「ありがとう」

凜が杏の横に座ると直ぐに杏が質問して来た。

「じゃ、犬と猫」

「イングワ、マヤー」

「大きい、小さい」

「マガーかマギー、グナー」

「綺麗、汚い」

「チュラ、ハゴー」

「子ども、友達」

「ワラバー、ドウシグワ」

「太陽、星」

「ティーダ、フシ」

「凄い、凄い。それじゃ、心」

「チム」

「愛してる」

「カナサンかな？」

「カナサン？」

「そう言えばカナサンドーって言う民謡があったな」

「どんな歌なの？」

「確か、わしんなよーや わしんなよー わねうむとんどー かな  
さんどー かな」

「それって、忘れるなよ 忘れるなよ 私は思っているよ 愛して  
るって意味？」

「杏は凄いな」

「ねえ、歌詞は歌詞」

杏の目がキラキラと輝いていた。

「詳しい歌詞はわからないな。でも、結婚を約束した2人の幸せな  
歌のはずだぞ、最後は確か綺麗な花は散るけど2人で花を咲かせる  
ものだ、嵐が吹いても愛して行こう2人と言う意味だったと思う  
けど」

「どこに行けば、その歌聴けるかなあ？」

「まあ、沖縄民謡のCDでも買えば聴けるんじゃないか」

「直ぐに聴きたいの」

「なあ、杏。腹が減ったんだが。今日は作るの面倒くさいから外で  
食べないか」

「どこで食べるの？」

「居酒屋にでも行くか」

「うん。行つて見たい」

杏と2人で繁華街の美崎町の中にある、凜の知り合いの居酒屋に向  
かう。

外に出ると風が強くなつてきていた。

「着いたぞ、ここだ」

「こみなみ？ こなん？」

「瑚南で『こなみ』と読むんだ」

凜が店の中には居る。

「ちわーす」

「あれ、凜さん。いらっしやい」

優しいそんな女の人に対応してくれる。

「2人なんだけど行けるかな？」

「カウンターなら空いてるけど、いいかな」

「いいですよ。ほら杏座るぞ」

「う、うん」

こじんまりとした店だがとても賑わっていた。カウンターに座り凜が店長と話をし始めた。

「直、久しぶりだな」

「最近、凜さん。全然顔見せないんだもんなあ」

「悪いな、忙しくてな」

「生で良い？」

「そうだな、生とこいつにはサンピン茶をもらえるかな」

「凜さん、その子は？」

「ちよつと、訳ありでうちに預かってるんだ」

「訳ありね」

「直、そんな顔で見るな」

「まあ、凜さんは独身だしね」

「違っって言ってるだろう」

杏は、メニューとにらめっこをしていた。

「どうした、杏」

「チャンプルって何？」

「炒め物」

「ヒラヤーチ」

「沖縄風お好み焼き」

「ミーバイ」

「ハタ科の魚」

「イリチー」

「炒め煮」

「ジーマミー豆腐」

「ピーナッツで作った豆腐」

「マース」

「お塩」

「はい、お待ちどうさま」

「ありがとう」

生ビールとサンピン茶、それに突き出しが運ばれてきた。

「杏、とりあえず。お疲れ様」

「うん、乾杯。なんだか知らない言葉だらけ」

「気になる物を注文すればいいさ、一目瞭然だから」

杏が何品か注文をする。凧は直と話をしていた。

「そう言えば、大きな低気圧が近づいて来てるって、海人が言ってたよ」

「この時期に、台風かよ」

「時期にそうなるだろうって。足が速いから直ぐ抜けるらしいけど、かなり大きいらしいよ」

「少し、調べてみないとな」

「ネットで調べるの？」

「そうだ」

「それじゃ、凧さん調べたら教えてよ」

「そうだな、後でな」

注文した料理が出てきて杏が美味しそうに食べ始めた。

「美味しいよ、凧」

「そうだろ、ここは石垣島でも人気があるからな」

凧も料理を摘みながらビールを飲んでいた。

「凧もいっぱい食べてね」

「そうだな」

美味しい料理を満喫して店を後にする。

杏はご機嫌だった。

「ここら辺が島の繁華街なの？」

「そうだ、美崎町って言う所だよ。飲み屋街だな」

「へえ、そうなんだ。あつカラオケがある」

「カラオケには行かないからな」

「そっだ、凜に民謡を歌ってもらえば良いじゃん」

「杏、聞いているのか？ 俺は行かないぞ」

「凜、早く早く」

杏が凜の手を引っ張りカラオケ店に入っていく。

「杏！ 俺は駄目だってば！」

凜の叫びは杏には届かなかった。

大きな低気圧は、時期はずれの台風になってかなりの速度で石垣島に接近し始めていた。

昼前に店に全員出勤して店を閉めて総出で台風対策をしていた。

杏はご機嫌で民謡を口ずさみながら作業している。

「わしんなーよーや わしんなよー わねうむとんどー かなさんどー」

「杏ちゃん、ご機嫌だね」

楓が不思議そうに聞いて来た。

「うん、美味しい沖縄料理いっぱい食べたし、それに民謡いっぱい聴けたしね」

「沖縄料理は判るけど、民謡酒場にでも行つたの？ 杏ちゃん」

「楓ちゃん、違うよ。カラオケに行つたんだよ」

「カラオケ？」

その時、亜紗の怒鳴り声が聞えてきた。

「凜！ ダラダラしてないで働きなさい。台風対策は男の仕事なんだから」

「はいはい、分かりました」

「凜さん、そんな疲れた顔をしてどうしたんですか？」

葛城が凜の顔を覗き込むといつに無く疲れた顔をしていた。

「昨日の夜、居酒屋に行つた帰りに杏に付き合わされてカラオケに無理矢理連れて行かれたんだ」

「杏ちゃん、歌上手そうですね」

「杏は、1曲も歌わないぞ。2時間も歌わされてへ口へ口だよ」

「はあ？ 何の冗談ですか？ 凜さんが歌なんて」

「俺も、冗談だと思いたいよ。安里屋ユンタ、かなさんどー、芭蕉布、十九の春、花、沖縄民謡のオンパレードだ、拳句にBIG IN

から夏川の歌まで歌わされたよ」

「凜さんがカラオケね、ありえないくらい変わりましたね。凜さん」

「そうか、振り回されているだけだと思うが」

「でも、嫌じゃないんでしょ」

「そうだな、嫌じゃないな」

「凜さんは相変わらずだなあ」

葛城が意味深に聞くと凜が頭の後ろを掻きながら答えた。

しばらく、作業をしているとオーナーの亜紗が声を掛けてきた。

「もう、殆ど片付いたから少し休憩しましょう」

「はい」

杏達が店の中に入っていく。

葛城が凜を見るとロープの張り具合を確かめながら、まだ作業をしている。

「凜さん、行きましょう」

「葛城、先に行っててくれ。俺はこれを調整してから行くから」

「分かりました。先に行きますよ」

「ああ」

凜は海側の窓ガラスに張つてあるネットの張り具合を調整してまわった。

杏、楓、柚葉と葛城の4人は店内のテーブルで休憩をしながらおしゃべりをしていた。

「しかし、疲れたよ」

「情けないなあ、葛城は。凜さんを見習え！」

楓が葛城の肩を叩いた。

「でも、凜さん。杏ちゃんに無理矢理カラオケに連れて行かれて、歌を歌わされてきつそうな顔してたぞ」

「ええ、凜さんが歌を？」

楓が目を見ん丸くして驚いた。

「杏ちゃん、もしかして凜さんに民謡を歌わせたの？」

「うん、そうだよ。柚葉ちゃん」

「信じられない、凜さんが歌って居る所なんて想像つかないよ」

「え、どうして。カラオケに行かないの？」

杏が不思議そうな顔をして楓達に目をやった。

「杏ちゃんは知らないんだね。凜さんはあまり皆と騒ぐの得意じゃないんだよ、だからカラオケとかには行きたがらないんだ」

「そうなんだ、でも結構知ってたよ」

「安里屋ユンタ、かなさんどー、芭蕉布、十九の春、花、沖縄民謡のオンパレードで、BIG INの歌までらしいぞ」

「あとね、島々美しやに娘じんとよー、遊び庭に涙そうそうも歌ってもらったよ」

「杏ちゃん、凜さんの歌ってどうなの？」

「そうそう、そこが一番知りたいよね」

「そうだな、誰も聞いたことが無いからな」

「ええ、皆聞いたことが無いの？ 結構上手い方かな、それにあれだけ完璧に知っていたらコンサートだつて出来ると思うよ」

「今度、絶対に聴かせてもらおうよ。柚葉」

「そうだね、凜さんの歌聴きたいよね」

「杏。コンサートは大げさだろう、それに2度と歌わないからな」  
凜がネットを張り終えて店に入ってきた。

「ああ、凜さん。杏ちゃんだけずるい！」

「楓、本当に勘弁してくれ苦手なんだよ」

「苦手なのにあれだけの曲数を歌いこなせるんですか、嫌味ばいな」

「葛城、嫌味はないだろう」

「ねえ、誰か乾電池を買ってきてくれないかしら。懐中電灯の電池が切れちゃってるのよ」

亜紗が懐中電灯を持ちながら声を掛ける。

「それじゃ、義姉さん俺が」

「まだ、力仕事が残ってるのよ」

「私が行ってきます」

楓が元気が有り余るほど手を天井に向けて突き出し返事をした。

「それじゃ楓ちゃん、お願いできるかしら」

「はい」

「楓、風が強いから気を付けろよ」

「分かってますって、原チャリでひと走り行ってきましたね」

楓が亜紗からお金を受け取り店を飛び出していった。

「元気だな、楓は」

「ほら、葛城君。元気よく力仕事お願いね」

「はい、オーナーの為なら何でもって何をするんですか？」

「凜と2人で外のプルメリアを運び入れて欲しいの」

「ええ、あの大きな鉢に植えてあるやつですか？」

葛城が凜の顔を見た。

「義姉さん、ネバーダイフラワーだから折れても根が生きていれば、いくらでもまた花を咲かすから大丈夫だよ」

「文句を言わない。可哀想でしょ花を咲かせて居るのに」

「重いんだぞあの鉢は」

「オーナー命令だ。凜、今すぐやる」

「葛城、行くぞ」

「はい」

葛城と凜が渋々店を出て大きな鉢を運び始める。

杏は相変わらざるの不思議顔で亜紗に声をかけた。

「亜紗さん、凜が言っていたネバーダイフラワーって」

「プルメリアの事よ。プルメリアはとも丈夫な木だからいくら台風で枝が折れて丸坊主になっても再生してくるの。だから死なない花と呼ばれているのよ」

「そうなんだ、私プルメリア大好き。とってもいい匂いが……」

店内にプルメリアの香りがしてきた。

凜と葛城が大きなプルメリアの鉢を店内に運び込んできた。

「重！ 義姉さん。ここで良いだろ」

「ありがとう、凜」

「凜、とっても良い香おりだね。それに可愛い花」

「杏は、プルメリア好きか」

「うん、大好き」

「凜さん、私も好きですよ」

「柚葉も好きなんだな」

「はい」

「俺は、大人なオーナーが好きかな」

「はいはい、ありがとう」

「葛城、撃沈！」

「柚葉、そこまで言うか」

「うふふ、面白い」

杏が笑った。

その時、入り口のドアが開く音がする。

凜が対応をしようとドアに向かうと、ショートカットのメガネをかけて黒いスーツを着た女性が入ってきた。

「申し訳ございません。今日は台風の影響で休業させて頂いているんです」

凜の言葉も聞かずに店内にズカズカと無遠慮に入ってくる。

杏が真っ青な顔をして震えていた。

「杏ちゃん？ どうしたの？ 大丈夫？」

柚葉が杏に声を掛けるが何も杏は答えなかった。

「マ、マネージャー……」

杏が震える声で言った。

「杏。やっと見つけたわ、帰るわよ」

女がいきなり杏の手をつかもうとした、その手を凜がつかみ止める。  
「離しなさい！ あなた達は何をしているのか分かってらっしゃるのかしら。この子はまだ未成年なのよ警察に通報してもいいんですよ」

「叔父さんには、連絡したもん」

杏が搾り出すように言った。

「叔父様、いえ社長は認めていません。それに少し前からここに居ると内偵していて、あなた達の事も調べさせていたきました。暴走族上がりの義兄弟らしいじゃないですか。どおりで粗暴なこと、分相応を弁えなさい。それともこの子を誑かせてもう寝たりしたの、あなた」

凜は顔色一つ変えなかった。

亜紗が近づいてきて女に声を掛けようとした時。

杏がマネージャーの頬に力の限り平手打ちをした。

「私の事は、なんて言われても構わない！でも、凜さん達を侮辱する事は許さない。凜さんはとても優しい人、そんな事をするような人じゃない。西川さんはいつもそう、私はもう戻らない」  
杏が泣き叫んで事務所に駆け込んで行った。

すると 入り口から男が1人やって来て西川に耳打ちをする。

そこに買い物に出かけていた楓が帰ってきた。

「もう、雨に降られちゃって濡れちゃったよ。何があつたんですか？ 外には怖そうな男の人がいっぱい居るし、杏ちゃんは私の原チャリで飛び出して行っちゃったけど」

「楓、こっちに来い」

葛城が楓の腕を引っ張った。

「痛いよ、見習い何するんだよ」

「あの人が、杏ちゃんを連れ戻しに来たの」

柚葉が楓に耳打ちした。

「ええ、柚葉それって」

3人はそれ以上何もしゃべらなかった。

「西川さんと言ったかしら、いきなり失礼な発言ありがとっござい  
ます。少しお話をしませんか」

亜紗が西川に声を掛けた。

「あなたがこのオーナーね。あなた方と話す事はありません。これは一応いままでのあの子の生活費とお礼です。それとこの事は他言しませんように」

西川があからさまに凜に茶封筒に入った札束を突き出した。

「口止め料って事が」

「流石、察しが良いわね。スキャンダルは迷惑なのよ」

「くだらない」

凜が西川を無視して店を出ようとした。

「凜、何処に行くの？」

凜に亜紗が声を上げた。

「杏を連れ戻しに行くんだ」

「これ以上、あの子に係わらないで。あなたには何もさせはしないわ」

西川に耳打ちした男が凜の前に立ちはだかった。

「どけ、時間が無いんだ。直に日が暮れる、その上台風がもうそこまで来ているんだ」

「行かせない」

男が静かに言った。

「ふざけるな！ 加減しねえぞ！」

凜の表情がゾツとするような殺気を帯び凜の背後には真っ黒なオーラが立ち込めていた。

「店の中じゃまずいわ、外で少し懲らしめてあげなさい」

西川が男に指示をだすと男が後ろに下がりながら店から出て行く、凜は男の前を歩き店から出た。

「良いのかしら？ 頭に血が上った凜が相手じゃ、あの人達怪我じや済まないかもよ」

亜紗が不敵に西川に言った。

「族あがりの人間１人に何が出来るって言うの。彼らはプロよ」

外からは男の叫び声や、殴る音や蹴る音が聞えてくる。

しばらくすると静かになった。

「楓、これで体を拭きなさい」

亜紗が楓にタオルを投げた。

「は、はい。でも」

「杏を探しに行くわよ。私の車に乗りなさい」

「分かりました、行こう。楓、柚葉」

葛城が声を掛けると楓が柚葉の手をとって外に出ようとする。

「ふざけないで、あなた達にはこれ以上係わらせないわ」

「そんな事は、私達の勝手でしょ。杏は私達の大切な仲間なの。それに激怒モードのあの子は無敵よ」

亜紗が笑って言った。

不審に思った西川が表に出ると、ボディガードの男達は全員凜に伸されていた。

「そんな馬鹿な……プロが……」

「うひょ！ 流石、雷神の死神だあ」

葛城が叫びながら亜紗の車に向かう。

それに楓と柚葉が続いた。

「凜、これを着て、万が一の為にこれを持って行きなさい」

亜紗がレインコートとデイバッグを凜に渡した。

凜がバッグを背負い、コートを羽織ってスクーターに飛び乗った。

エンジンを掛けてアクセルを全開にする。

前輪が浮きそうになり凜がスクーターを押さえ込むと後輪を滑らせながら駐車場を飛び出して行った。

「すげー、二輪ドリフトなんてありえねー」

葛城たちが啞然としてしていると亜紗が店の鍵を閉めてやってきた。

「早く乗りなさい、行くわよ」

3人が後ろの席に乗り込む。

倒れている男達の方を見ると西川が呆然としていた。

「あなたはどっすの？」

亜紗が西川に声を掛けると西川が我に振り返りこちらを見た。

「早く乗りなさい！」

亜紗の声で西川が駆け出し助手席に乗り込んだ。

「行くわよ」

亜紗も車をドリフトさせながら駐車場を飛び出した。

「こっちもすげー！ 流石！ 風神だよ」

杏が飛び出してから然程立ってないのに風雨は強くなり。

街路樹が折れんばかりに揺れ、暴風雨に近い状態になっていた。

「まずいわね、台風が予想以上に早く近づいているわ。早く見つけないと」

「オーナー、どこを探すんですか？」

「凜はたぶんマンションを見に行っている筈だから、私達は杏ちゃんが行きそうな街中を探すわよ。周りをよく見て探しなさい」

「はい」

西川は助手席でどうしたら良いか分からず黙って座っていた。

凜はマンションに着き部屋の中を探していた。

「クソ、居ないか。どこに行ったんだ」

杏に携帯で連絡を取ろうとしたが、杏の携帯は電源が切られたままだった。

その頃、杏は海が見える公園の先にある工事現場の放置車両の中で膝を抱きかかえて震えていた。

「絶対に帰らないんだから。でも、何だか凄い嵐になってきたよ、どうしよう」

亜紗達は街中を走り回っている、だんだん暗くなってきた。

「どこに行ったのかしら？」

「闇雲に探しても見つけれないんじゃないじゃ」

西川が呟いた。

「そんな事は分かって居るわよ」

亜紗は焦りを隠せないでいる。

「オーナー、凜さんと杏ちゃんが買い物をした。お店の方に行って見ましょう」

柚葉が提案すると亜紗がハンドルを切りバイパスを東に向けて走り出す。

すると楓が何かを見つけた。

「止めて！ あそこに私の原チャリがある」

車を少しリターンさせると、通行止めになっているサザンゲートブリッジの脇に楓の原付が止められていた。

「まさか、杏ちゃん。この先に」

「凜さんに知らせないと」

葛城が凜の携帯に連絡すると直ぐに凜がスクーターやって来た。

「楓、間違いなくお前の原付なんだな」

「はい！」

「凜、携帯は？」

「義姉さん、駄目だ。電源を切っているんだ」

「確実に居場所が判らないと危険だわ。この先に居るとは限らないし」

「行くしかないだろう！」

「落ち着きなさい。凜」

「もう一度掛けてみる」

凜が杏の携帯に電話する。

杏は車の中で携帯を取り出した。

「あれ、電源が切れてる」

電源を入れるとバッテリーマークが1つしかなかった。

その時、杏の携帯が鳴った。

「もしもし、杏か」

凜の声だった。

凜の声を聞いた瞬間、不安が爆発して涙が溢れてきた。

「凜、怖いよ。助けて」

「今、どこにいるんだ？」

「猫が居る公園に来たら雨が強くなってきたから、その近くにある工事現場の壊れた車の中に……」

その時、電話が切れた。

「あれ、凜！ 凜？ 助けて！」

「クソ！ 切れた！」

凜が携帯をポケットに入れて、横殴りの雨と強風で殆ど何も見えな  
い橋の先を見つめた。

「凜、居たのね」

「ああ、この先の工事現場だ。たぶん放置車両の中に居る」

「でも、凜さん。入り口が閉鎖されているのにどうやって」「こいつで行く」

凜がスクーターのハンドルを叩いた。

「スクーターでって無理ですよ。いくら凜さんがチューンしているからって」

「歩きじゃ、この橋は超えられない。行くしかないんだ」

「台風が過ぎてから助け出せば」

西川が恐る恐る呟いた。

「このまま、杏を放って置けるか！ 何かあってからじゃ遅いんだ」

「それじゃ、あなたまで」

「黙れ！ 俺はどうなっても構わない。もう、何も失いたくないんだ」

「凜、見つけたら必ず連絡しなさい」

亜紗は凜の覚悟を知り、止めてもしょうがない事を悟った。

「オーナー、いくら凜さんでも無茶ですよ。怪我だけじゃ済まないですよ」

「葛城君、もう誰も凜を止められないわ」

「凜、行きなさい」

「行ってくる」

凜が真っ直ぐに亜紗の目を見て走り出すと亜紗が呟いた。

「凜、あなた本気で杏ちゃんの事……」

凜が辺りを探してコンクリートブロックを見つけ封鎖されている橋の柵から少し離して置いた。

そしてスクーターに乗り込んで橋の反対側にスクーターを走らせＵターンさせる。

亜紗が車で道路を封鎖する。

風が少し弱まった瞬間、凜がアクセルを全開にして橋に突っ込んだ。ブロックの寸前でアクセルを戻し重心を後ろに下げ前輪を少し浮かせる。

ブロックに前輪が当たり浮いた瞬間アクセルを再び全開にする。

後輪がブロックに当たりスクーターが宙に飛び出した。

強風で横に流される。

「風で流された。駄目だ、雨でグリップが弱い！ 越えられない」  
葛城が叫んだ。

「クソ！ 越えろ！」

凜が叫ぶ。

後輪が橋の柵に当たりナンバープレートやカバーの一部が吹き飛んだ。

「キャアー！」

楓と柚葉が目を塞いだ。

スクーターのエンジン音が暴風雨で霞む橋の向こうに吸い込まれて行った。

「後は凜からの連絡を待ちましょう」

亜紗が皆に言った。

「でも」

「今、私達が出来る事は待つことだけよ。家に帰って心配だろうけど体を休めなさい」

「はい」

楓と柚葉が返事をした。

「西川さんも宿泊先で待機していて頂戴」

「分かりました」

凜は何とか橋を越えて工事現場にある放置車両を片っ端から探していた。

周りに建物などがない為にもろに風と横殴りの雨を体に受けた。

「どこに居るんだ？」

一か八か携帯を取り出し電話を掛けようとした時、何かが凜めがけて飛んで来た。

咄嗟に避けたが携帯を持っている左手の甲に直撃し携帯が吹き飛び、手の甲からは血が落ちた。

「クウ……」

その時、近くのワゴンらしき放置車両の中で何かが動いた。

「あそこか？」

スクーターを横倒しにしたまま放置車両に近づき中を覗きこむとそこには震えている杏が居た。

窓を叩くと杏が気が付いて杏が反対側のドアを開けようとする。

もう一度窓を叩き開けない様に合図をし反対側に回り込み凜がドアを開けて車の中に入った。

「凜！ ごめんなさい」

泣き叫びながら抱きついて来た。

「もう、大丈夫だからな」

凜が優しく杏の体を抱しめる。

「怖かったよおお」

「安心しろ。もう、怖くないだろ」

「う、うん」

しばらくすると杏が落ち着きを取り戻し凜の左手の怪我に気が付いた。

「凜、怪我しているよ」

「たいした事無いよ」

「そんなはず無いよ、こんなに血が出てる」

「これで押さえておけば止まる」

凜がジーンズのポケットからバンダナを取り出した。

「貸して」

凜がバンダナを渡すと杏がバンダナを巻きつけて縛った。

「ありがとうな」

外は暴風雨が吹き荒れていた。

ゴーゴーと音がして凜と杏が居るワゴンを揺らした。

「凜、大丈夫かなあ。ここ」

「たぶんな、周りに物がいっぱいあるから飛ばされる事はないだろう。しかし、コートを着ていてもかなり濡れたな」

凜がコートを脱いだ。

「凜、何をしよってるの？」

「ああ、忘れてたよ。災害用の持ち出し袋みたいなもんだ。義姉さんが持たせたんだ」

「中に何が入ってるの？」

「なんだろうな。懐中電灯にランタンにミネラルウォーター、乾パンそれにこれは保温シートかなチョコレートも入ってるぞ」

「凜……」

「杏、腹が減ったんだろ」

「うん」

「ゆっくり食べるんだぞ」

杏にペットボトルの水と乾パンにチョコレートを渡す。

杏が少しずつ食べ始めた。

「美味しくない」

「しょうがないだろう。非常食なんだから」

「家に帰ったら美味しいもの食べさせてやるよ」

「でも、もう私……」

「そうだな、もう帰る時間なんだな」

「私、帰りたくない」

「駄目だ」

「どうして、駄目なの？」

「このままじゃ、いけないのは杏が一番判っているんじゃないのか？ それに杏はまだ未成年だしな。叔父さんも心配しているだろう」

「ここに居たい」

「また、来ればいいさ」

「嫌だ！ ここに居たいの」

杏が泣き出した。

どれ位、泣いていたのだろう。

しばらくして杏が震えて居るのに凧が気が付いた。

「杏、もしかして寒いんじゃないのか？」

「大丈夫、少しだけだから」

杏の腕を触ると冷たくなっている。

「こんなに冷たいじゃないか」

「だって、怖くなって外に何回か出ようとしたら濡れちゃって。凧だって濡れてるじゃん」

「俺は、コートを着ていたからそんなに濡れてないぞ。こっちに来い」

杏の服を触るとかなり濡れていた。

凧が上着のシャツを脱ぎ濡れていないＴシャツで杏の体を拭いた。

「それじゃ、凧が寒いよ」

「このままじゃ、まずいな」

外は暗くなっていて電池式のランタンを点けるとっ少しだけ車内が明るくなった。

「杏、悪いが少しどいてくれ」

凧が倒されている車のシートの上にコートを敷いた。

「もう良いぞ、それとぬれた服を脱ぐんだ」

「ええ」

「恥ずかしがらないで早く脱ぐんだ」

「うん、判った」

杏が仕方なさそうに下着姿になり両手で体を隠す。

「こっちに來て俺の足の上に座れ」

ジーンズも濡れてはいたが足元ほど濡れては無かった。

「凜の足の上に座るの？」

「そうだ」

凜が後ろから杏を抱きかかえるように座らせ、保温シートで2人の体を包み込んだ。

「あ、温かい」

凜の体温を直に感じた。

「これで、寒くは無いだろ」

「うん、凜の鼓動が聞える」

杏が体を横にして凜の胸に耳をあてた。

杏はしばらく何も言わず何かを考えて居るようだった。

そして決心したように凜に話し出した。

「ねえ、凜は何で私の事を何も聞かないの？ 本当は私……」

「杏あんずと書いてアン、超人気のアイドル。夏海 杏 7月生まれ 身長は157センチ、体重38キログラム、3サイズは上から80・53・82 好きな食べ物甘い物」

「えっ、いつから知っていたの」

「最初からかな。確信をしたのは石垣島に帰ってきた夜だ」

「どうして判ったの？」

「空港で財布も携帯も持っていない女の子なんてそうそう居ないだろ、それもボディガード付きだ。どこかのお嬢様が付き人つきの芸能人か」

「知っていたから私に優しくしたの？」

杏が不安そうな顔で凜を見上げる。

「優しかったか？ 最初は面倒に巻き込まれるのが嫌だったよ。で

も、なぜか気になったんだ理由は判らない。杏は何で俺について来たんだ？ 他に人はいっぱい居ただろう」

「凜の目を見た瞬間に優しさを感じたの、この人ならきっと平気だつて」

「優しさか」

「うん、でもやっぱり知っていたから色々と優しくしてくれたんだよね」

杏の声がとても沈んでいた。

「杏は杏だろ違うのか？」

「そうだけど、他の人はみんな」

「ここに居るのは夏海 杏なのか？ それとも秋川 杏なのか？」

「だって、秋川だって本当の名前じゃないし」

「そんな事を聞いてるんじゃないアイドルの杏なのか？ 普通の女の子の杏なのか？」

「私は杏！ どこにでも居る女の子だよ」

「そうだろ、職業なんて関係ないんだよ。杏は杏なんだ、職業で性格が変わるわけじゃない。人として肝心なのはもっと根本の問題だろ」

「でも、すむ世界が違うから……」

「それも、人が勝手に決めている事じゃないのか？」

「言うのは簡単だけど……」

「そうだな、難しいな。確かに、でも乗り越えられない訳じゃない」

「そうだけど私、帰りたくないの帰れば、もう会えなくなってしまう気がするから」

「杏は未成年だし、はじめはつけけないとな」

「そうだね。逃げ出したのは私なんだし、まだ子どもって事なんだよね」

「縁があれば、また会えるさ」

杏の表情は幾分柔らかくなったが、瞳に不安が揺らいでいる。

「それだけなの？ そうだよな、凜にはこれ以上は無理だよな。私

も、逃げないから凜も逃げないで欲しいな」

「逃げないでか」

凜の目が哀しさを帯びていた。

「そんな目をしないで、大丈夫だよ。皆、凜は変わってきたって言うてるもん。少しずつ逃げないで向き合って行こう。ね」

「杏のお陰だな」

凜が杏の体を強く抱きしめた。

「凜……」

杏が疲れて凜の腕の中で眠ってしまった。

外はまだ嵐が吹き荒れている、しばらくすると凜もいつの間にか眠りに落ちていた。

眩しい朝の太陽の光で、凜が目を覚ました。

杏は気持ち良さそうに凜の腕の中で眠っていた。

「杏、起きてくれ」

「う、うん」

杏が目を覚ますと凜の顔が目の前にあった。

「おはよう、杏」

「えっ、凜？ お、おはよう」

凜が杏のおでこにキスをすると杏の顔が真っ赤になる。

「まだ、濡れているが服を着てくれ。帰ろう」

杏があたりを見渡すと昨日の嵐が嘘のように太陽の光が車内に差し込んでいた。

「うん、そうだね」

杏が徐に立ち上がった時。

杏の髪の毛や体がキラキラと輝いて見える。

太陽が雲から出たのだろうか。

さっきよりも更に優しく力強い光が差し込み杏を包み込んだ。

「天使……」

凜が呟き杏を見凪れていると杏が下着姿の自分に気が付いた。

「ば、馬鹿。凜のエッチ！」

そばにあった自分の服で体を隠した。

「冷たい！ まだ、びしょ濡れだ」

「俺のシャツならあまり濡れてないだろう」

「じゃ、借りるね」

杏が恥ずかしそうに凜の大きなシャツを着てスカートを穿いた。

凜はTシャツを着てデイバッグに杏の洋服を押し込んだ。

杏が外に出ようとワゴンのドアに手を掛けるがドアは開かなかった。

「凜、開かないよ」

「どいてろ。せーの！」

凜がドアを思いっきり蹴り飛ばすとドアがガタンと音をたてて外れた。

「さあ、帰ろう」

「うん！」

外に出て道路に出るとスクーターが海水まみれになりボロボロになっていた。

凜がスクーターを起こしてエンジンを掛けるが掛からなかった。

「スクーター、ボロボロだね」

「そうだな。直せば直るからな、直らなければ買い換えればいい。でも人はそうじゃない怪我は治るけど、その人の代わりは居ないからな。もう無茶するなよ」

「ごめんなさい」

「判れば良いんだ。帰ろう」

「うん、凜は命がけで私を助けて守ってくれたんだよね」

「置いていくぞ」

凜が何も聞こえないかのようにスクーターを押しながら走り出した。  
「ねえ、凜！ 聞いているの？ 待ってよ！」

橋の上まで駆け上がり2人は息を切らして立ち止まった。

「綺麗……」

杏が見蕩れている。

街や木々がまだ濡れていてその水滴に反射して朝日に照らされて光り輝いていた。

「台風は、街や空、そして海の汚れを綺麗にしてくれるんだ」

「人の心も綺麗にしてくれると良いのにね」

「でも、こんな景色を見ていると心が洗われるだろう」

「そうだね」

「さあ、行くぞ。後ろに乗ってくれ」

「うん」

杏がスクーター後ろに乗ると凜が駆け出しスクーターに飛び乗り坂を下りていく。

橋を下りるとそこには1台の車が止まっていた。

「凜、その車は？」

「義姉さんだ」

車を覗き込むと中で亜紗が眠っていた。

窓をノックして亜紗を起こす、亜紗が眩しそうに目を覚まし凜に気が付いて車から飛び出した。

「凜！ 無事だったのね。心配したのよ！ あれ程連絡しろって言ったのに。あなたって子はまったく。杏ちゃんは怪我はしてない？」

「はい、でも凜が手を」

「凜、見せなさい」

亜紗が凜の左手首をつかんだ。

「痛たたたた」

「たいした事なさそうだけど、とりあえず病院ね。2人とも車に乗りなさい」

「大丈夫だよ」

凜が亜紗の手を振りほどいた。

「凜は大丈夫でも、杏ちゃんが大丈夫じゃないの。ね」

「はい！ 凜、車に乗るの」

「判ったよ、乗ればいいんだろ」

凜が車に乗り込み、杏も凜に続いた。

直ぐに病院に向かう。

「なんで連絡しなかったの？」

「しょうがないだろ、何かが飛んできて携帯が吹き飛ばされたんだから。杏の携帯は電池切れだし」

「それで、怪我をしたと。でも何で杏ちゃんは凜のシャツを着ているのかなあ」

「杏の服がびしょ濡れだったからだ」

「ふうん、そうなんだ。それだけ？」

「そんな変な目で見るな。何もねえよ、義姉さんが考えてる事なんか」

「あら、そうなの。まあいいわ、杏ちゃんから聞くから」

杏は凜の腕に手を回したまま何も言わず微笑んでいるだけだった。

「さあ、着いたわよ。凜行つて来なさい」

「判ったよ」

凜が車から降りて救急用の入り口に向かうと、杏も車から降りようとして亜紗に呼び止められた。

「杏ちゃんは、ここに居なさい」

「ええ、でも」

杏が亜紗の顔を見るといつに無く真剣な眼差しだった。

「少し話があるの」

「判りました」

「心配しなくても凜の怪我はたいした事ないわよ」

近くのコンビニで飲み物と食べ物を買って、病院の駐車場に車を止めて話をした。

「さあ、お腹がすいたでしょ。遠慮しないで食べなさい、今はこんな物しかないけれど」

「いただきます」

杏がオニギリを頬張る。亜紗は缶コーヒーを飲んでいた。

しばらくして杏が食べ終わるのを見計らって、亜紗が話を始めた。

「杏ちゃん、昨夜の事を教えてくれるかなあ」

「は、はい」

杏は昨夜の事を包み隠さず話した。

「そうなの。そうね確かに杏ちゃんと出会って凜は変わってきている、それは私自信も驚いているの」

「何をですか？」

「凜が1人の女の子を好きになった事」

「でもそれは、LOVEじゃなくてLIKEで……」

「違うわ、LOVEよ。凜は戸惑っているだけ頭では判っているけれど心の傷が踏み止まらせているの」

「そんな事、何で亜紗さんに判るんですか？」

「杏ちゃんを助けに行く時、あの子はこう言ったの。『俺はどうなっても構わないこれ以上何も失う訳に行かないんだ』って、そして真っ直ぐ私の目を見て助けに行った」

「凜がそんな事を……」

杏の目から涙がこぼれた。

「凜の心の傷は凜1人じゃ治せない。誰かが必要なの」

「でも、私はもう……」

「杏ちゃんにお願いがあるの、あと数日でも構わないからもう少し凜の側に居て欲しいの。お願いよ」

亜紗が杏に頭を下げた。

「亜紗さん、頭を上げてください。西川さんを説得してみます、でも出来るか判らないですよ」

「ありがとう、出来るだけ協力はするから」

そこに凜が治療を終えて、病院からでて車に戻ってきた。

「凜、どうだったの？」

杏が凜に心配そうに聞いた。

「骨には異常ないそうだ。でも数針縫われたよ、あの薙め」

「はい、ジューズ」

「サンキュー」

「それじゃ、帰ってシャワーを浴びてから西川さんに連絡して話をしましょう」

家に帰りシャワーを浴び着替えを済ませて、西川の宿泊先のホテルに向かう。

亜紗とホテルの駐車場で待ち合わせをし3人でホテルのロビーに入っていく。

ロビーのティーラウンジに西川が待ち受けていた。

「杏！ 無事だったのね。怪我はしていないのね。よかった」

「商品に傷がついたら大変ですもんね」

杏が不機嫌そうに言い放った。

「商品だなんて、私はあなたを心配して」

「少しお話をしませんか。西川さん」

亜紗が西川に声を掛けた。

「いいでしょう。少しだけですからね」

相変わらず冷たい声だった。飲み物を注文して話を始めた。

「あなたが伝説の族あがりだったなんてねえ」

「まだ、そんな事を言うかしら」

「まあ、杏が無事だったし。何も無かったみたいだからいいんですけれど」

「最低」

杏がつぶやいた。

「そんな言い方、止めなさい。これから直ぐに東京に戻るからいいわね」

「私、直ぐには帰らない。きちんとけじめをつけてから帰る」

「何を吹き込まれたか知れないけれど時間がないの」

「それなら、西川さん1人で帰ればいい」

「何を杏に吹き込んだの。うちの会社は業界最大手よ、あんな店潰すのは訳無いのよ」

凜は何も言わずただ腕組みをして目を閉じたままだった。

「ガタガタ騒ぐんじゃないわよ。あなたが言うように私と凜は伝説の雷神と風神の総長あがりよ。今でも一声で数百人や数千人は動かせるのよ。業界最大手だか何だか知らないけれど随分と不義理な事を言うのね。命懸けで杏を守って助け出した男に対して。それに店に何かをして見なさい私が全力で阻止するから」

「まあ、大きく出たものね。いいわ、時間を差し上げましょう、来週の月曜に東京で待つて居るわ。守れなかった時は、覚悟しておきなさい」

亜紗が西村に詰めよると西川が亜紗を睨みつけて言い放った。

「それじゃ、大切な大切な杏ちゃんをお預かりします」

亜紗が深々と西川に頭を下げると凜が何も言わず立ち上がった。

「凜？」

杏が驚いて声を掛ける。

「杏、行くぞ」

「うん」

凜に促されて杏が笑顔で答えた。

「それじゃ、西川さんこれで失礼します」

亜紗がドリンクの伝票を持って席を立ち、先に歩き出し凜と杏の後を追った。

「覚えておきなさい」

西川が苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

ホテルを出ても凜は何も言わずに歩いていて、その後を杏が小走りで追いかける。

亜紗がその後ろからキーレスで車の鍵を開けると凜が駐車場に止めてある亜紗の車に乗り込んだ。

「凜、どうしたの？ さっきから何も言わないし」

「ふふふふ……あはははは……」

凜が突然笑い出し亜紗も車に乗り込んだ。

「凜、何がそんなに可笑しいの？」

「義姉さんは、相変わらず相手を手玉に取るの上手いな。恐れ入るよ、まったく」

「ええ、あれは演技だったの？」

杏が驚いた。

「演技じゃないけれど、昔から相手を乗せるのが天才的に上手いんだよ」

「でも、数千人も動かせるって」

「嘘じゃないさ。でもそれは伝説じゃなく、義姉さんなら日本だっ

て動かせるぞ」

「凜、馬鹿な事は言わないの」

「はいはい、判りました」

「それじゃ、とりあえずお店に行きましょう。皆、心配して待っているわよ」

亜紗の車で店に向かった。

駐車場ではチーフの藤崎、楓、柚葉、葛城の4人が待っていた。車から降りると、楓と柚葉が駆け寄ってきて杏に抱きついた。

「杏ちゃん、無事だったんだ。よかった」

「怪我はしなかったの」

「楓ちゃん、柚葉ちゃん心配掛けてゴメンね」

「本当によかった」

「凜が守ってくれたの」

杏が少し赤くなった。

「流石、凜さんだよ」

「あれ、手に怪我してる。名誉の負傷だね」

柚葉が凜の怪我に気が付いた。

「たいした事じゃないよ。さあ、店の掃除をするぞ」

「……はい……」

3人が元気に返事をした。

手分けをして飛んで来たゴミを片付け窓を掃除する。

ネットを外し植木を表に出して凜はキッチンで何かを作り始めた。

「クソ！ この手じゃ力が入らねえか」

「凜さん、何をしているんですか？」

葛城が悪戦苦闘をしている凜を見かねて声を掛けてきた。

「もう直ぐ、片付けが終わるから皆の食事を作っているんだよ」

「手伝いますよ」

「悪いな」

「何を言っているんですか。名誉の負傷している手で」

しばらくすると、料理が出来始めた。

掃除と片付けを終えて皆が店に入ってくる。

「いい匂い」

「うわぁ、美味しそう」

テーブルには美味しそうな、料理が並べられていた。

「お疲れ様、終わったみたいだな。食事にしよう」

凜が声を掛けた。

「はい」

全員で食事をする。

「そう言えば、杏ちゃんは帰らないといけないんじゃない」

楓が不安そうに切り出した。

「うん、そうなの。来週の月曜日に東京に」

「そうなんだ、寂しくなるね」

柚葉が寂しそうに言った。

「もう、会えなくなるわけじゃないだろ」

凜が笑顔で皆に言う。

「でも、杏ちゃんって……」

葛城が呟く。

「杏は杏だ。違うのか、葛城」

「そうですね、もう会えなくなるわけじゃないし。杏ちゃんが何者だろうと杏ちゃんは今杏ちゃんですよ」

葛城が納得する。

「皆、ありがとう」

「何も何も、友達じゃん」

「うん、そうだね」

「凜、あなたが責任を持って東京まで送り届けなさい。それまで、仕事は休みなさい」

「義姉さん。そんな事」

「その手でどうやって料理を作るの？」

「チーフと葛城君よろしく頼んだわよ」

「判りました」

「了解しました」

藤崎と葛城が大きく頷いた。

「それじゃ、今日はお店も開けられないし。明日からまた頑張りましょう」

「はい」

「それじゃ、食事が済んだら解散よ」

ワイワイと皆で食事を楽しんだ。

翌朝、凜は甘い匂いが鼻をくすぐり目を覚ます。

ソファで寝ている凜の腕の中に杏がいた。

「いつの間に潜り込んで来たんだ？」

凜が困った顔を見ると杏が目を覚ました。

「凜、おはよー」

「おはよーは良いけれど、どういっつもりなんだ？」

「良いじゃん。少しくらい甘えたって」

「まあ、良いか。今日はどこに行きたいんだ。離島か？」

「凜と一緒に居られればそれで良い」

「面倒くさいなあ」

「面倒くさい言うな」

杏が照れながらプクツと頬を膨らませて口を尖らせた。

「そっだ、ひとつだけ聞いて良いか？」

「うん、いっぱい聞いて」

「夏海 杏の夢は何なんだ」

「それは、嫌味で聞いているの？」

「いや、純粹に聞きたかったんだ」

「杏の夢は映画のヒロインをする事。もし大好きな物語が映画化されたら絶対にヒロインの役をしてみたいんだ」

「そうか、それなら杏の大好きなグランパやアクアマリンに出てくる場所めぐりでもするか」

「本当に、本当？」

「ああ、本当だ」

「凜は全部知ってるの？」

「知ってるぞ、秋葉系もときだからな」

「直ぐに準備して行こう！」

杏が飛び起きて着替えを済ませる。

凜も起き出しジーンズを穿いてストライプのシャツを着て仕舞ってあったオレンジ色のキャップを被りサングラスを掛けた。

杏が先に部屋を出る。

凜もいつもの黒いスニーカーを履いて部屋を出て階段を降りて車に乗り込んだ。

杏はとても嬉しかった。

自分の正体を知っても変わらず接してくれる事が。

杏の心と同じ様に台風が直撃したのが嘘のように晴れ渡っていた。そして、杏と買い物をした大型店舗に着いた。

「凜、ここは一緒に買い物したお店だよ」

「そうだ、こここの1階にはベーカーリーがあるだろ。それに2階は洋服売り場だ」

「ああ、アクアマリンとグランパに出てきた所だったんだ」

「ご名答です。次に行くぞ」

「うん」

杏が嬉しそうに凜の後を着いてきた。

車を東海岸沿いに走らせる。

「この道をしばらく走ると大浜と宮良、白保の集落があつてしばらく走ると玉取崎なんだよね」

「詳しいんだな」

「当然だよ。何回も読んだんだから」

玉取崎の展望台に着くと杏が走り出した。

「そんなに急ぐと危ないぞ」

「大丈夫だもん」

「うわ、凄い。右が太平洋で、左が東支那海だよな」

平久保半島を挟むようにして太平洋と東シナ海が見渡せる。

どちらの海もキラキラと光り輝いて色んなブルーに光り輝いている。

「そうだ、綺麗だろ」

「うん、ハイビスカスもいっぱい咲いてるしね。それじゃ、次に行

「こう」

「そんなに慌てるなよ」

「だって、時間がもつたいないもん」

「判ったよ」

平久保崎灯台に向かう。

「ここも、凄く綺麗だね」

「そうだろ、海が輝いているな」

「うん。あそこの色が青くなっている所がリーフの切れ目なんだね、初めて見た」

「それじゃ、行こうか。どうした？」

杏が凜の格好をまじまじと見ていた。

「よく見たら、凜の格好ってグラampaの隆羅みたいだね」

「そうか？ 普段着と何も変わらないだろ」

「そうだね。それに凜には孫は居ないもんね」

車で来た道を戻り玉取崎展望台の麓にあるお店を目指す。

「ああ、見えてきた。本当に黄色くって可愛いお店なんだ」

「食事でもするか」

「うん」

店の裏手にある駐車場に車を止めて店の中に入る。

「いらっしやい。あら桜木君じゃない」

「ご無沙汰しています」

凜が出迎えた日に焼けて人懐っこい笑顔の女性に挨拶をして奥の席に座った。

席に着くと直ぐに杏が声を掛けてきた。

「凜、知り合いなの？」

「そうだよ。同じ調理の仕事してるしな」

「ふうん、そうなんだ」

杏がきよろきよろと店内を見渡す。

「何を注文するんだ」

「何って決まっているでしょ。ここのお薦めの」

「石垣牛のシチューをセットで2つ下さい」

凜が注文すると店内を見渡していた杏の目が壁に飾ってある色紙に釘付けになった。

そして立ち上がり壁に飾ってある色紙の近くに見に行った。

「これって、もしかして仲村 歩のサインですか？」

「ええ、そうよ」

女性が答えた。

「凄い、ここに実際に来たんですね」

「前にね、最近は来なくなっちゃったけどね」

「忙しいんだろうね。桜木君」

調理場から優しそうな背の高い男の人が顔を出した。

「オーナー。俺に聞いたって知らないですよ。杏、大人しく料理が出来るのを待ったらどうだ」

「ごめんなさい。つい嬉しくなっちゃって、でも羨ましいな」

杏が席に着く。

「何が羨ましいんだ？」

「だって、自筆のサインだよ」

「杏も欲しいのか？」

「当たり前じゃん、大、大ファンなんだから」

「はい、お待ちどうさま。カボチャの冷静スープと島魚のカルパッチョよ」

「うわ、本物だ。美味しそう」

「本物の味はどうだ？」

「美味しい！ 感激だよ」

杏があつという間に食べ終わって凜を見ると、凜は嬉しそうに杏の顔を見ていた。

「どうしたの？ 凜」

「美味しそうに料理を食べている人の顔を見て居るのが好きなんだよ」

「あれ、どこかで聞いた事のある台詞だな」

「俺の本当の気持ちだよ」

「はい、お待ちどうさま。例の黒紫米のご飯と石垣牛のシチューになります」

「例のつて？」

杏が料理を運んで来た女の人に聞いた。

「あら、アクアマリンがグランパを読んで来たんでしょ」

「はい、そうですけど」

「あなたと同じ様なお客さんが最近多いのよ。歩君、様様よ。ねえ桜木君」

「何だか変だよ、さつきから」

杏の頭の上には？マークが浮かび上がっている。

「からかわないで下さいよ。杏、食べないと冷めちゃうぞ」

「いただきます。これも凄く美味しい！」

「幸せそうだな」

「うん、幸せ」

杏は幸せに続く言葉を言うのを止めた。

だって大好きな人と美味しい物が食べられて、怖かったのだ。

凜の気持ちをほつきり聞いたわけじゃなく、凜のトラウマが治っている訳でもない今。伝えてしまえばこの関係が終わってしまう気がしたから。

食事を終えて車を走らせる。

東海岸から西海岸への道を進む。

しばらく走ると特徴がある山が見えてきた。

「凜、もしかして、あれが野底のマーペーなの」

「そうだよ、あの尖がった山がマーペーだ」

「悲しい物語があるんだよね」

「そうだったな、杏がもしマーペーだったらどうする？」

「どんな事をして也会いに行く」

「周りの人に迷惑が掛かってモカ？」

「うん、私は愛する人を選ぶ」

「それじゃ、質問を変えよう。もし自分の夢が叶うとしたらその時はどうする？ 夢か愛か？」

「凜の意地悪、そんなのその時になつてみないと判んないよ」

「でもな、人生にはそんな時が必ずあるんだ」

「凜にもあつたの？」

「無かつたと言えバ嘘になるかな」

「その時、凜はどっちを選んだの？」

「愛だよ」

「凜、それは双樹さんの事？」

「昔、昔の話さ」

しばらく走ると米原キャンプ場の案内看板が見えてきた。

「さあ、着いたぞ米原のビーチだ」

「うわあ、広いビーチなんだね」

杏が砂浜を走り回った。

「杏、危ないぞ」

「キヤーア」

杏が躓いて膝を着いた。

「もっ、しょうがないなあ」

凜が抱き起こし、服に付いた砂を払い落とした。

「えへへ、ありがとう。やっぱり凜は優しいなあ」

「普通だよ」

「普通の事を普通に出来るのが凄いだよ」

「杏の台詞もどこかで聞いた台詞だな」

「私の本当の気持ちです」

「真似っこだな」

「いいんだもん！ 凜向こうに見える所は何？」

杏が遠くに見える岬の様な所を指差した。

「あそこでビーチパーリーしただろう、あそこが石崎だよ。そして

グランパでビーチパリーしていたのも同じビーチだよ」

「ええ、それじゃ、私達は同じ場所でバーベキューしていたの？」

「そうだよ」

「何で教えてくれないのさ！」

「教えたら、皆が居るのに杏の頭の中はグランパになっちゃうだろ」

「そうだね」

「それに隆羅と海のように2人でビーチを歩いただろ」

「あつ」

杏が思い出して顔が真っ赤になった。

「明日はここでシュノーケリングでもするか」

「凜、怪我しているのに無理だよ」

「大丈夫だ、杏は海の中見たくないのか？」

「見たいけど」

「隆羅と海が見た海だぞ」

「本当に凜は意地悪なんだから」

その後で御神崎の灯台、名蔵湾、そして展望台に登り赤瓦のホテルに向かっていた。

「青いアーチのサザンゲートブリッジにはもう行っただし……次は」

「杏、見えてきたぞ」

「赤瓦の塀が続いてる。凄い、凄い」

ホテルの駐車場に車を止めて2人でロビーに入って行く。

「いらつしやませ」

フロントのスタッフが挨拶をした。

「少しいいかな？」

凜がフロントのスタッフに確認を取る。

「どうぞごゆっくり」

フロントのスタッフは不審がらずに答えた。

杏はキョロキョロしながら凜の後に着いて行った。

「うわぁ、ここがあのホテルなんだ。ここがレストランで、あっち

が」

「おーい、杏。迷子になるぞ」

「えっ、待ってよ」

「しょうがない奴だな、ほら」

凜が照れ臭そうに手を出した。

「えっ、良いの？」

「何でだ？」

「だって凜から、手を繋ごうって言うてくれたの初めてなんだもん」  
杏が照れていると凜が杏の手を取って歩き出した。

「行くぞ」

「うん！」

ホテルの中は物語の主人公達が不意に飛び出してきそうな雰囲気だった。

ロビーの直ぐ横には売店がありそこを曲がるとお店の看板が見えてきた。

「あ、ここが『ゆんたくはんたく』のモデルのお店だね」

「そうだ、ゆんたくはんたくはおしゃべりと言う意味なんだ」

「へえ、そうなんだ」

その時、お店から板前さんが出てきた。

「あれ、珍しい。桜木が女の子連れで」

「ご無沙汰しています。料理長」

「たまには、お店にも来ないと」

「また、今度寄らせてもらいますよ」

「おかげで、俺も有名人だからな。あははは」

笑いながら板前さんは歩いてレストランの裏口に入っていた。

「凜、あの人が力二さんなの？」

「そうなのかなあ？」

「そうなのかなあって、それに变だよ。どこに行っても凜の知り合いみたいだし、判った何回も色んな女の子を連れて来たんでしょ」

「料理長が言っていただろ珍しいって。杏が初めてだよ」

「本当に？」

「本当だ」

「そつだよね、凜は……」

「何だ？」

「な、なんでもない」

凜がお店の横から林の中に入り歩き出す、直ぐに開けて海が見えた。そしてそこには棧橋が海に突き出していた。

「棧橋だ！」

杏が凜の手を握ったまま走り出した。

「危ないぞ」

「早く早く」

「判ったから」

「綺麗！ 本当に、私達物語の主人公になつたみたいだね」  
杏が満面の笑顔で言った、それを凜は優しい目で見ていた。

少しビーチを歩きプールサイドバーに向かう。

カウンターに座りドリンクをオーダーする。

「凜はヒラミね」

「問答無用ですか？」

「私は、あつ。あつた！ ティーダ」

「それじゃ、ヒラミとティーダを頼むよ」

凜がオーダーすると日焼けした男性のスタッフが手際よくドリンクを作り目の前に置いてくれた。

「いただきまーす。冷たくって美味しい、これってあれと同じティーダなのかなあ」

「もしかして、小説のですか？ 同じレシピですよ」  
スタッフが親切に教えてくれた。

「凄い、感激しちゃうな。私」

「最近、多いんですよ。何でもここが小説の舞台になっているらしくって、それで同じレシピ同じ名前でお出しているんです。作者さ

んにも了承をとっているし、映画化される話まで出ているくらい人気があるみたいですよ」

「ここにも、来たのかなあ」

「これが、その時に頂いたサインです」

スタッフが色紙を出した。

「ここにもあるんだ。凄いね、凜」

「そうだな」

だいぶ日が傾いていた。

夕食は杏のリクエストでホテルで夕日を見ながらバーベキューを食べる事になった。

杏は始終ご機嫌で夕食後まだ時間があつたのでARIAに立ち寄る事にする。

ARIAに着くとディナーの時間が終わり皆が賄いを食べていた。

「お疲れ様です」

杏が声をかけて店に入る。

「ああ、杏ちゃんだ。今日はどこに行ってたの？ 西表島？ それとも他の離島？」

杏の姿を見て楓が声を掛けてきた。

「今日はね、あの小説に出てくる場所めぐりしてたんだ」

「杏ちゃん、それって本当に？」

柚葉が敏感に反応する。

「うん」

「羨ましいな。それも大好きな人とだよね」

楓が突っ込むと杏が真っ赤になった。

「照れてる、照れてる」

葛城が茶々をいれる。

「もう、そんなんじゃないってば」

「じゃ、嫌いなんだ」

「楓ちゃんの意地悪」

「あははは」

「うふふふ」

皆が大笑いをした。

「若いっていいですね」

「そうね」

藤崎がぽつりと言つと亜紗が頷いた。

「そうだな。夢か……」

凜が呟いた。

s e t t e . 2

翌日、凜と杏の2人は米原のビーチに来ていた。

「凜、手の怪我は大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。こうやって手術用みたいなゴムの手袋をしてグローブをすれば。ほら濡れても大丈夫だ」

「もう、無茶苦茶だよ」

「そんなに心配なら置いていくぞ」

「嫌だ！」

「ほら、自分のシュノーケルとフィンを持って、ブーツは履いたな」  
「履いた」

杏はまだむくれている。

「面倒くせえなあ」

「面倒くさい言うな。ヒッヤア」

杏が変な叫び声をあげる。

「凜！ 恥ずかしいよ」

「暴れるな」

凜がいきなり杏を抱き上げて海の中に歩き出したのだ。

「ヒューヒュー」

「ウォー」

と周りから歓声が上がリ杏が赤くなる。

「凜の馬鹿。でもお姫様抱っこ嫌じゃないかも」

凜の横顔を見上げながら小声で言った。

「何か言ったか？」

「べ、別に」

「ほら、この上に立ってくれ」

凜が大きな珊瑚の上に杏を座らせる。

「うん、判った」

杏が立ち上がると凜が珊瑚の上に登ってくる。

「行くぞ」

凜が杏の手を取り歩き出した。

少し歩くとリーフの切れ目の上に出る、そこから先は海の色がコバルトブルーの様な青になっていた。

凜が杏にマスクとフィンを付けさせて波打ち際まで連れて行く。

マスクも着けずに凜が先に海に飛び込んで杏に手招きした。

「凜、怖いよ」

「大丈夫だ。俺が受け止めてやるから」

「う、うん。えい！」

杏が戸惑いながら海に飛び込み凜にしがみ付いた。

「ほら、大丈夫だろ」

「うん」

凜がマスクをつけて杏に声を掛ける。

「海の中を見てごらん」

杏が顔を水に付けるとそこには別世界が広がっていた。

どこまでも澄んだ水で青い世界が広がっている。

凜が少しだけエサをまくと色とりどりの小魚が無数に集まってくる。

さながら竜宮城の様な幻想的な世界だった。

しばらく小魚と戯れてから、リーフ沿いに凜が杏の手を引きながら

泳ぎ出した。

右手には色とりどりの珊瑚があり、左手には何処までも青い世界が

広がっている。

そこを小ささまざまなカラフルな魚達が泳ぎ回っている。

凜が止まって水面から顔をだすと杏も水面から顔を出した。

「どうだった？」

「もう、言葉が出てこないよ。凜、ありがとう」

杏が凜の首に腕を回して抱きついた。

「おいおい、くっ付き過ぎだ」

「凜は嫌なの？」

「嫌なのかと聞かれれば、嫌じゃないけど」

「もう。いっつも微妙な答えなんだから。そうだ、凜は潜る事出来るの？」

抱きついたまま杏が凜に聞いた。

「出来るけど、杏は1人で水面に居なきゃいけないんだぞ」

「大丈夫だよ。私、泳げるし。少しコツもつかんだから。何かあれば絶対に凜が助けてくれるもん」

「そうだな、それじゃ潜ってみるか」

杏が水面に浮いたのを確認し凜が少しはなれて大きく息を吸いジャックナイフで急速潜行する。

5メートル位だろうが潜った所で珊瑚をつかみながら凜が仰向けになった。

「何をするの？」

杏が不思議に思った時、凜が水中で息を吐き出した。

するとその息は泡のリングになり輪を広げながら浮いてきた、そして数個の輪を作って凜がその中を浮上してきた。

凜が水面に顔を出して息を整える。

杏が凜の手をつかんで近づいてきて顔を上げた。

「凜！ 凜！ 凄い！ 凄いよ」

杏が堪らずに興奮していた。

「落ち着けよ」

「だって、だって」

杏がマスクを外すとポロポロと涙を流していた。

「泣く事は無いだろう」

「感動したんだもん。私にも出来るかな」

「まずは潜る練習だな」

「大丈夫だよ、プールで潜るの得意だもん。やってみたい」

「駄目だ」

「何で駄目なの」

「危ないからだ、海を舐めるな」

「舐めてないもん。やる！」

「止めてくれ、杏に何かあったらどうするんだ。ちむ、ぐるしくなるだろ……」

凜は自分が叫んだ言葉にはっとした。

「凜、今なんて言ったの？」

「なんでもない。そろそろ上がろう、体が冷えてきた」

杏をリーフの縁に座らせてフィンを外し先に上がらせる。

「凜てば」

凜は何も答えず自分のフィンを外しリーフに上がりマスクを外して歩き出した。

「ねえ、凜。怒ってるの？」

「怒ってないよ。大声を上げてすまなかった」

「ごめんなさい」

「杏が謝る事無いだろう」

「でも、私が無茶を言ったから」

「大丈夫だよ、気にするな」

「うん。判った」

ビーチに戻り簡易シャワーで塩水を洗い流す。

「よく流すんだぞ」

「うん、分かってるよ」

車で川平方面に進むと、大きな橋の手前で海側の未舗装の急な下り坂を下りていく。

しばらくすると真っ青な海をバックに可愛らしい白い小さな建物が見えてきた。

「ああ、パンが焼けるいい匂いがする」

「美味しいぞ、ここのパンは」

駐車場に車を止めて店の中に入る、そこは本当に小さなパン屋さんだった。

「食べたい物を買って良いぞ」

「うん、えーと。あれ？ カレーパンが無いよ」

「お嬢ちゃん、もう少して焼きあがるからね」

「はい」

店のおばさんが教えてくれて、杏がワクワクしながら待っているとパンが焼き上がった。

「カレーパンとそのパンは何のパン？」

「紅芋だよ」

「じゃ、それも。あれ？ あの棚の上のパンは何？」

杏が指差したパンは円筒形の大きなパンだった。

「パネトーネ、イタリアのパンだよ。ドライフルーツが沢山入っていてとても日持ちがするんだ」

「それも1つ下さい」

「ありがとうございます」

店を出ても杏はご機嫌だった。

「凜、次は淹だよ」

「そうだな。杏、ここだよ」

「ええ、もう着いたの？」

米原方面に少し戻った所にある小さな橋の近くに車を止めて、橋の脇から下に降りるとそこには本当に小さな淹があった。

「新川の淹って呼ばれているんだ」

「何で今日はシャワーだったの？」

「足を水に着けてごらん」

杏が凜につかまりながらゆっくり水に足を着ける。

「つ、冷たい！」

「夏でも火照った体にはかなり冷たいからな。今の時期じゃちょっと無理かな、泳いでみるか？」

杏が横に首を振った。

「それじゃ、行こう」

車に戻り、トンネルの手前の駐車場に車を止める。

「本当に、小川があるんだ」

日曜日とあつて周りには地元の家族連れが多く遊んでいた。

「凜、パン食べよう」

「そうだな」

木陰に座り物語と同じ様にパンを食べる。

「ほら、紅芋のパンだ」

「温かい」

「中の餡は熱いから気を付けろよ」

「うん」

杏がパンを食べながら凜を見るといつになく遠い目をしていた。そつと近づいて杏が凜の持っているカレーパンに噛り付いた。

「えい！ 間接キツスだ」

「あ、馬鹿。このカレーパンは」

遅かった、見る見るうちに杏の顔が歪んで口を半開きにして涙をポロボロ流し出した。

「口に入っているのを出すんだ」

凜が手を出すと杏がポロッと口から出した。

「ひんによ、はかー、かりやいよー（凜の、馬鹿！ 辛いよ！）」

「ほら、お茶でも飲むんだ。書いてあっただろう激辛だって、馬鹿が」

「ひよれ、りようすりゆの？（それ、どうするの？）」

杏が喉を鳴らしながらお茶を飲んで言った。

「何を言ってるんだ？」

「それ、りやよ」

杏が凜の手にある杏がポロッと出したパンを指差した。

「こうするんだ」

凜が指先に乗せて手のひらをパチンと叩くとパンが宙に舞った、それを口で受け止めて食べてしまった。

「あつ、食べた」

「悪いかな？ もったいないだろ。それに作ってくれた人に申し訳な

いだろ」

「親子でも恋人でもないのに」

「いけないのか？」

「いけないけど！ 凜が怒ってる」

凜がバツの悪そうにそっぽを向いた。

「ここって隆羅が海に始めて本音を少し漏らした所だよね。私も凜の本音を少しでも聞きたいなあ。さっきの『ちむ ぐるしくなる』って心が苦しくなるって事だよね、本心からの言葉なのかなあ」

杏が膝を抱えて体を揺すりながら凜を横目で伺う。

凜が頭を掻き毟りながら立ち上がった。

「ああ、本心だよ。咄嗟に口について出た言葉だ、本心に決まってるだろう。ああっ、もう行くぞ」

凜が気まずそうに車に向かい乗り込んだ。

「待ってよ、凜」

杏も慌てて車に乗り込むと凜は直ぐ車を出した。

そして於茂登トンネルに入った。

「本心だったんだ。嬉しいな」

「杏、頼むからあまりからかわないでくれ。杏だって俺と似た様な辛い経験したんだろ」

凜の言葉にハツとした。

杏に何かあったらと叫んだ凜の言葉を思い出した。

もし凜になにかあったらと思うと胸がキュンと締め付けられた。

「凜、ちむ ぐるしいよー」

「凜に何かあったら私、私……」

「嫌あ！ 凜が……居なくなっちゃうよ！」

トンネルを抜けても杏は泣き叫んでいた。

速度を上げてあまり人の来ない底原ダムで車を止めた。

「ゴメン、杏。俺が言い過ぎた。泣かないでくれ」

「ああ……凜が……」

「どこにも行かないから、なあ」

「本当？」

「ここに居るだろ」

「うん」

「落ち着いたか？」

「もう、大丈夫」

少ししゃくり上げているが、落ち着いてきたようだった。

「ごめんな、辛い事を思い出させて」

「うん、違うの。凜にもこんな胸を締めつける様な思いをさせたのかと思ったら悲しくって」

また、ポロポロと涙を流し始めた、グシュグシュと鼻を嚙っていた。  
「そんなに泣くからだ。ほら、チンしろ」

「チーン」

「ああ。もう、まるで子どもだな」

「子どもだもん」

杏の鼻にティッシュをあてて杏の鼻を拭くと杏が頬を膨らませてそばを向いた。

「大丈夫だからな。行くぞ」

「うん」

この時期はフルーツがあまりない事を杏に告げて観光農園をスルーしてみんさー工芸館により、昼の営業時間が終わったマッドティーパーティーを覗いてから図書館に立ち寄り。

ジェラートを食べながらサザンゲートブリッジが見える防波堤に来ていた。

「凜、ここって？」

「考え事をする場所だよ」

「凜も良く来たの？」

「さあな」

「また、そんな生返事する」

杏は防波堤の上に座り海を眺めていた。

凜は落ち着かない様子で防波堤の上を歩いていた。

「なあ、晩飯は何が食べたいんだ」

「今日は、お家でゆつくりジェノ何とかのアーリオ何とかのパスタが食べてみたい」

「そっか、それじゃ買い物にでも行くか？」

「ねえ、凜。何か聞きたい事があるんじゃないの？」

「いや、別に無いぞ」

「変な、凜」

買い物に行き、家に戻り晩飯にする。

杏のリクエストどおりにジェノベーゼソースのアーリオ・オーリオつまりバジルソース入りペロンチーノを作りその他にも数品作り家でゆつくりと食事をした。

しかし、凜の心はここに在らずだった。

杏に本心を聞こうと思ったが杏の本心なんかはもう判りきった事だった。

揺れ動いているのは己の心だった。

食事を済ませ片づけが終わると凜が珍しくベッドに仰向けになり手を頭の後ろで組んで何かを考えているようだった。

杏がその横に寝ながらアクアマリンを読み始めた。

「ねえ、凜」

「何だ？」

「沖縄の言葉って使う時によってニュアンスが違うって書いてあるけれど、本当なの」

「そうだな。でも日本語だったそうだと、『どうも』と言う言葉にもいろんなニュアンスがあるのと同じだよ」

「それじゃ、ナンクルナイサーって言葉にも色んなニュアンスがあるの？」

「そうだな。前向き、諦め、励まし……ナンクルナイサーか」

「私はアクアマリンの隆羅のナンクルナイサーが好き。凜、最後の夜なんだよ」

杏の声が寂しさを帯びていた。

「ああ、クソ。ヘタレは俺じゃねえか。しょうがねえなあ」

凜が大きく深呼吸をして「杏、ドライブに行こう」と杏の目を見て言った。

その目からは迷いが吹っ切れていた。

凜が上着を着て部屋を出て行く。

「凜、待つてよ」

杏が追い駆けて行き部屋の鍵を閉めて階段を駆け下りた。

車に着くと凜はエンジンを掛けて待っていた。

「もう、置いてきぼりにしないで」

「窓を開けるぞ」

「うん」

「少し音楽のボリューム上げるぞ」

「いいけど、あれ？」

いつもはヒップホップ系のミス・マンディの曲がかかっているのに違う音楽が流れ出した。

「凜、いつもと違うね」

「中村あゆみのHeart of Diamondsだ」

「えっ？ どこかで聞いた事が、ヒヤア」

凜が車を急発進させた。

街中をいつもより速い速度で抜け速度を上げてどこかへ向かった。

「凜、どこに行くの？」

凜は何も答えなかった。

しばらくすると林の様な所を抜けると左手に海が見えた。

「ここって名蔵湾？」

大きな橋を越えて少し走ると凜が道路脇の防波堤に車を寄せて止めた。

ライトを消すと闇に包まれた。

凜が車から降りて防波堤に座ると杏も車から降りた。

見上げるとそこには今まで見た事の無いような満点の星空だった。

「す、凄い。星が降っているみたい。生まれてはじめて見た」

「そうか」

「うん、あれ？ 星が滲んで見えるよ」

杏の頬に涙が光った。

「こっちにおいで」

凜が杏を抱き寄せて膝の上に座らせた。

「どうしたんだ？」

凜が優しく杏に聞いた。

「だって、怖いくらい幸せなんだもん。大好きになった人と美味しいもの食べて、大好きになった人と大好きな物語のヒロインみたいに過ごして居るんだよ。夢見たいで……でも、もうお別れで……生まれて初めてこんなに人を好きになったの。凜の事が大好きなの！」

凜の胸で杏は泣き叫んだ。

凜は何も言わずに杏を優しくそして力強く抱しめていた。

しばらくすると、杏が凜に話しかけた。

「凜、前に杏の夢は何かって聞いたよね。凜の夢は何？」

「夢か、なんだろうな。今は好きな事も自由にやらせてもらって居るし、今は今で仕事も楽しいし。これからは仕事一筋かな、義姉さんとの約束もあるしな」

「約束？ その約束ってもしかして私がここに来た時の約束なんですよ、何を約束したの？ もしかして私の為に凜の夢を諦めるなんて約束じゃないよね」

「そんな約束じゃないよ」

「嘘、それに近い約束なんですよ。今、凜の目が少し揺らいだもん」「杏が心配するような事じゃないよ」

「本当に？ 凜は何かを守る為ならきつと自分を犠牲にする。それが私の為だったら私はそんな耐えられない。大好きな人が自分の為に夢を諦めるなんて絶対に嫌！」

「でも、杏は夢か愛かと聞いたらその時にならないと判らないって  
言っていたじゃないか」

「そうだけど……私なら耐えられない」

しばらく、2人は何もしゃべらなかつた。

そして凜が切り出した。

「なあ、杏。俺の事を好きになつてくれるのはとても嬉しい。だけ  
ど、本当に俺で良いのか？ 杏はまだ若いんだこれからだつて色ん  
な出逢いはあるんだぞ」

「今は凜しか見えない。それにこんなに人を好きになれるかなんて  
誰にも判らないでしょ」

「でも、これ以上踏み込んだら辛いだけだぞ」

「どんなに辛くたつていい！ パパとママが死んじやつてから、ず  
ーと1人ぼっちだつた。友達も出来なくつて叔父さんの仕事をする  
ようになつて回りは大人ばかりでライバルだけが増えていった。今  
までだつて私はアクアマリンを読んでグランパを読んで頑張つて来  
たの、頑張つてこられたの。それだけが心の支えだつた。そして凜  
と出逢えて物語のヒロインになれたの。今の私には凜が総てなの凜  
を失つたらどうなるか判らない。だから、怖くて聞けなかつた。凜  
が優しすぎるから凜の本当を知りたかつたけれど聞けなかつた。だ  
からこのままお別れしてもいいと思つていた。確かな約束なんて無  
くても凜にまた会えると思えるだけでよかつたのに、もう止まる事  
が出来ないの。どうしようもなく凜の事が好きになつちやつたの」

「ありがとう、杏。俺も杏に出逢えて良かったよ。誰かを好きにな  
るのが怖かつたんだ、2度と辛い思いはしたくなかつた。まだ、傷  
は癒えていないかもしれないでもそれで良いんだつて気づいたんだ、  
いや気付かされたんだ。杏に出逢えた事に感謝している、こんなに  
1人の女の子を愛おしいと思えるなんて思わなかつた。杏、大好き  
だよ」

「凜、本当に？」

「ああ、これが俺の本心だ」

「凜が好き」

「杏、大好きだ」

凜が杏の目を見つめる。

杏が目を閉じた。

優しく凜がキスをする。

杏が少し怖くなり目を開けるとそこには優しい目が輝いていた。

杏が目を閉じて凜の首に腕を回した。

凜が力強く杏を抱きしめてキスをした。

「また、会いにくるね」

「ああ、いつでもおいで」

「杏が来られないなら俺が会いに行く」

「約束だよ」

「約束だ。いつでも杏を見守って居るからな」

「うん」

翌日の昼過ぎ、2人は羽田空港に居た。

「凜、うちの会社はなんだってする会社だけど大丈夫かなあ」

「大丈夫だ、心配するな。俺と義姉さんは無敵だぞ」

「そう言えば、何を亜紗さんから受け取ったの？ 一応、これを持つておけって」

「身分証明書みたいなものかなあ」

「意味わかんないよ」

「杏は考えすぎだ。俺を信じてくれ、必ず俺が何とかするから。もし杏にしか出来ない事なら助けてくれよ」

杏のおでこに自分のおでこをくっ付けた。

「うん、判った。凜を信じる」

真っ直ぐ凜の目を見た。

そこに西川が近づいて来た。

「約束は守ったみたいね」

西川が冷たい声で凜に言い放った。

「まるで、約束は破る為にある様な言い方だな。約束は守る為にあるんだよ」

「杏、こっちに来なさい」

「それじゃまたな、杏」

凜が杏の頭をなでて立ち去る。

「またね、凜。私の本当の名前は夏海 杏。杏と書いてアンスだからね」

凜が片手を挙げて杏に合図した。

「または、無いのよ」

西川が不敵に笑った。

「何をしたの？」

杏が驚いて西川の顔を見た。

「あなたには関係ない事よ。行くわよ」

西川が杏の腕をつかんだ。

「嫌、凜さんに何をしたの？」

凜の方を見ると数人のスーツ姿の男が凜に近づき黒い手帳の様な物を凜に見せた。

「警察？ 西川さんまさか……」

「ざまあ見なさい」

その時、凜が亜紗から受け取った物を刑事に見せる。

そして刑事が携帯でどこかに確認すると一斉に凜に向かい敬礼をした。

凜が振り向きおでこに指をあてて笑った。

そして杏が笑うのを見ると両手で投げキッスをして「チャオ」と声を上げてから刑事達と肩を組みながら人ごみの中に消えていった。

「もう、凜のバーカ」

杏が西川に気付かれないように呟いた。

西川の顔を見ると呆然としていた。

「いったい、何者なのあいつ等は。警察も動かせるなんて……」

「西川マネージャー、帰りましょう」

「判っているわよ」

西川が苛つきながら歩き出した。

杏は涼しい顔をして西川の後を歩き出した。  
凜の信じろと言った言葉を胸に刻んで。

3日後。

凜はARIAに帰って来る予定になっていた。

ARIAでは……

「ねえ、柚葉。杏ちゃん帰っちゃって凜さん落ち込んでないかなあ」

「そうだね、あんなにラブラブだったのにね」

「楓にもまだ、チャンスがあるって事じゃないのか？」

「見習い！ てめえ！ 絶対に殺す！ 私は2人を応援しているんだ」

「まったく、訳もわからずにカリカリしやがって」

葛城がぶつくさと文句をたれる。

「楓、そんな言葉使ったら駄目でしょ」

そんなやり取りを見ていた亜紗が声を掛けた。

「は、はい。オーナーすいませんでした」

「素直で宜しい。でも実は私も心配なのよね。あの子、一途だからそこに、凜が出勤してきた。」

「おはよー。今戻りました……って、あれ？ 皆どうしたのかなあ？」

凜はいつもに増して元気だった。全員肩透かしを喰らった様にポカンとしていた。

「そんな、鳩が豆鉄砲喰らった様な顔をしていないで仕事開始！」

「ほら、オーナーもそんな顔しない老けるぞ」

何も言わずに亜紗は事務所に消えて行った。

「なあ、葛城。皆どうしたんだ？」

「凜さんのせいですよ。八つ当たりはされるし。皆、杏ちゃんが帰ったんで凜さんの事を心配してたんです。そうしたら凜さんがあんまり元気良く出勤したんで」

「面倒くさいなあ。2度と会えなくなつた訳じゃないだろう、同じ

日本に住んでいるんだぞ」

「そうですけど、離れ過ぎじゃないですか？」

「たかだか3時間だぞ」

「もう、いいですよ。凜さんが元気ならそれで良いんです」

ゴールデンウィークも終わり石垣島は梅雨の時期になる。

凜は精力的に仕事をしていた。

新しいメニューやドルチェを幾つも考えてお客に提供していた。

葛城にも細かく指示をしているんな事を覚えこませた。

「なあ、楓。ここしばらくの凜さん元気過ぎやしないかあ」

「葛城の考え過ぎじゃないの。杏ちゃんに出会って変わったんだよ」

「そうかなあ、私はなんだか無理しているようにしか見えないんだけど」

「柚葉まで、でも言われて見れば最近殆ど休んでないもんね」

「そうそう、これ見てくれよ」

葛城がお店のノートパソコンでブログを開いていた。

「何なのそれ？」

「じゃーん。夏海 杏のブログだよん」

「はあ？ ずいぶんミスターな事で」

「何だかそつくりの杏ちゃんに会って他人の気がしないんだよね。」

「最近何だか変わったって言うか凄く明るくなった気がするんだ」

「葛城はそんな事していないでそろそろ1人前になってくれよ」

「凜さん、キビシー」

「仕事しろ」

「はい」

そろそろ梅雨も終わり本格的な夏が始まろうとしていた。

凜が携帯で頻繁にどこかとの遣り取りが増え始めると、凜の心を徐々に締め付けはじめていた。

そしてまた夢を見るようになった。

顔のよく見えない髪の長い女性が「約束したのに、約束したのに」と呟く。

すると突然車の急ブレーキの音が鳴り響いて目の前が真っ赤に染まる。

そこで目が覚めた。

「凜、凜？」

「はあ、はあ、はあ…… 義姉さんか。ここは？」

「ここはお店よ。大丈夫なの？ もの凄く魔されていたけれど」

「少し、夢を見ていただけだよ」

「また、あの夢を見始めたんじゃないでしょうね」

「久しぶりに見たただけだから大丈夫だって」

しかし、凜はその後と同じ夢を見るようになっていった。

梅雨明けになるうかという頃、1本の電話が凜に掛かってきた。

「根岸か？ もしもし、どうしたんだ。珍しいな」

「凜さん、オーディションの件でちょっと」

「その件は任せたはずだぞ」

「凜さんに様子を見るように頼まれていた、夏海 杏がオーディションを受けているんですが」

「事務所の圧力がそんな物は無視して構わない」

「いえ、そうではなく。気持ちがいまいち入っていないようで、このままだと明後日の最終選考には残れないと」

「そうか」

「はい、どうしましょう」

「本人次第だな。仕方が無いそっちに顔を出すから」

「本当ですか？ それじゃ次回作の打ち合わせも」

「その件もそろそろ話さないとな」

「それじゃ、お待ちしています」

凜が一点を見つめて何かを考えこんでいた。

「凜さん、最近考えこむ事多くなったなあ」

葛城が独り言を言い凜を見つめている。

そこに柚葉が店に飛び込んできて凜が気付き声を掛けた。

「おはよう、柚葉。そんなに慌ててどうしたんだ？」

「ニユースです。ビッグニユースです。あの『彼はグランパ』の映画化が決まったらいいんだよ」

「出たよ。柚葉の秋葉系」

「見習いは黙ってて」

「柚葉まで見習い言うか」

「コラコラ、何をそんなに騒いで居るの？」

亜紗が騒ぎを聞きつけて事務所から出てきた。

「オーナー。私の大好きな『彼はグランパ』が映画化されるって。ヒロインの海役は誰になるんだろうなあ」

亜紗が凜の顔を見ると、凜は無意識に目をそらした。

そして亜紗の方を見て凜が言った。

「義姉さん。すまないが明日、東京に行きたいんだが」

「判ったわ行つて来なさい。ついでにあそこにも顔を出す事良いわね」

「判った、後の事宜しく頼む」

翌日、凜は東京に居た。

そしてオーディション会場に着くと根岸が待っていた。

「凜さん、こちらへ」

「根岸、悪いが関係者とは会わないからな」

「え、でも」

「もうあらすじは打ち合わせ済みだし、後はキャストだけだろ」

「それと、次回作は保留にしておいてくれ」

「判りました。凜さんが言う事に従いましょう。これが今日のオーディションのスケジュールです」

凜がスケジュールに目を通した。

「悪いな、いつも」

「とんでもないですよ、凜さんあつての私なんですからね。それじゃ、お部屋にご案内します」

根岸に連れられて部屋に入るとそこにはオーディション会場と控え室がモニターされていた。

モニターを見ると参加者が映し出されていた。

そこには杏の姿もあった。

「開始までにはまだ時間があるな」

凜が時計をみて時間を確認して携帯をかけた。

控え室では杏が不安そうな顔をして俯いている。

バッグの中の携帯がなった。

「もしもし、杏か」

「えっ、凜なの？ 今、何処に居るの？ 凄く会いたいよ」

「今、何をしているんだ？」

「彼はグランパのオーディションを受けに来ているの、でも皆凄くて。私、自信無くて」

「良く聞けよ。杏は石垣島でヒロインが行った場所で同じ様に感動をしていたんだ。違うか？」

「うん、そうだね」

「自信を持つんだ。杏の夢なんだろう自分の力を信じて掴み取るんだ。俺の大好きな杏なら出来るはずだぞ」

「凜、私も大好きだよ」

「ああ」

「凜、会いに来てくれるよね」

「面倒くさいなあ」

凜が笑う。

「面倒くさい言うな。うふふ」

「また、連絡するよ」

「約束だよ」

「ああ、約束する」

杏が携帯を見つめて大きく深呼吸をする。

ほんの少しだけだったが凜の声が聞けただけで十分だった。

オーディションは少し大きめのホールで行われている、舞台上では他のエントリー者が演技をしたり歌を歌ったりしている。

凜は客席の1番奥にある入り口の横に立ち腕組みをしてオーディションを見ていた。

横には根岸が立っている。

「そろそろ、夏海さんの番ですね」

「そうだな」

舞台に杏が現れ、所属事務所と名前を大きな声で告げて挨拶をして舞台下に居る審査員や監督の指示に従いながら演技をしている。そして最後に歌を歌った。

「忘んなーよーや 忘んなよー 我ね思とんどーかなさんどー」

根岸が目を開けて聞き惚れていた。

「凜さん、なんだか心が温かくなるような歌ですね」

「そう感じるか？」

「はい、とっても想いが溢れて居るように感じます」

「それじゃ、大丈夫だな」

「でも、凜さんが推せば決まりなんじゃないですか？」

「これは彼女の夢なんだ。自分の力で掴み取らないと意味が無いんだよ。俺が言えば簡単だろう、でもそれで彼女が喜ぶと思うか？」

「そうですね」

その時、ちょうど杏の審査が終わった。

凜がドアを開けて出て行く、根岸が後を追いかけた。

「凜さん、審査結果を聞いていかないんですか？」

「これから、人と会わなければいけないんだ」

「もし、駄目だったら」

「彼女は、まだまだ若いんだ。これからいくらでもチャンスはあるさ、それに俺は彼女の力を信じているからな」

「それならせめて、会うだけでも」

「ここに居るのは誰だ？ どう説明するんだ？」

「そうでしたね、それじゃお送りします」

杏は審査を終えて深々とお辞儀をして退場しようとしていた。

その時、ホールの奥のドアが開き光が差し込んでくるのが視界に入った。

そしてドアから出て行く男の姿に見覚えがあった。

「凜？」

舞台の袖に入ると杏は駆け出した。

「杏、どこに行くの？」

西川が杏に慌てて声を掛ける。

「ゴメン、ちょっと」

そう言い西川の横を走りぬける。

男が出て行ったドアまで来て辺りを見渡す。

そして建物の入り口に向かって走り出した。

ロビーを抜け出入り口に着くと1台のタクシーが走り去った。

「はあ、はあ、はあ。凜……」

杏は立ち止まり膝に手を当てて肩で息をしていた。

「おや、夏海さんどうしたのですか？」

タクシーを見送っていた男が声を掛けてきた。

その顔には見覚えがあった。初めて羽田空港で凜と出会った時に凜と一緒にいた男性だった。

「えっ、根岸さん？ でしたっけ」

「はい、良く覚えていてくれましたね」

「今の人は？」

「原作者の仲村先生ですよ。私は先生の担当をさせて頂いているんです」

「でも、あの時は凜と……」

「ああ、凜さんとは古い付き合いいで色々とお仕事をさせて頂いてい

るんですよ」

「人違いだったんだ、仲村 歩ってどんな人なんですか？」

「素敵な方ですよ。包容力があってとても優しくって、たぶん……  
一目惚れしちゃいますよ」

根岸が悪戯ぽく微笑んだ。

その時、後ろから西川の声がした。

「杏！ 戻りなさい」

「ありがとうございます。もう戻らないと」

杏が根岸に笑顔でお辞儀をしてロビーの中へ歩き出した。

「とても良い子ですね。凜さん」

根岸が優しい目で杏の後姿を見ていた。

凜は大きなビルの最上階にある役員室の応接間に居た。  
そこに少し年配の夫婦が入ってきた。

「お義父さん、お義母さん。ご無沙汰しています」  
凜が立ち上がり2人に挨拶をした。

「あらあら、まだ、そう呼んでくれるのね。嬉しいわ」

「今日は何をしに東京に出て来たんだ」

「はい、私用でちょっと」

「そうなのゆつくりしていけるんでしょ」

「すいません、店が心配なんで明日戻ります」

「相変わらず忙しい奴だなお前は」

「すいません」

「良いじゃないですか良い事ですよ、忙しいのは。でも私達の申し  
出を受けてくれて嬉しいわ」

「はい、亜紗義姉さんとの約束ですから」

「亜紗は元気なの？」

「ええ、元気ですよ」

しばらく色々と話をして凜は役員室を後にした。

そしてその足で打ち合わせの為、根岸との待ち合わせ場所に向かっ  
た。

「しばらく会わないうちに大人しくなったと言うか覇気がなくなっ  
たみたいだな」

「あなた、それは違うのよ。あの子は迷っているんだと思うの。橘、  
資料を持ってきて頂戴」

秘書らしき黒いスーツ姿の女性が2つのファイルを持ってきた。

「小説の映画化と夏海、杏さんか………どうしたものかしら」

「継いでくれると言うんだ、良いじゃないか」

「あなた、そんな簡単な問題じゃないのよ。私は2度とあの子に辛い思いはさせたくないの、今でも背負い続けている重荷を何とかしてあげたいの。その為には、どれか1つでも欠けちゃいけないのよ。決めたわ、この問題は私に一任して頂戴いいわね」

「ああ、お前がそうしたいと言っのなら構わんが、大丈夫なのか？」

「私達にしか出来ないことがあるのよ。少しワクワクするわね」  
その目は悪戯っ子がするような眼だった。

翌日、朝1便で凜はARIAに戻ってきた。

「ただいま戻りました」

「凜さん、お帰りなさい」

楓が出迎える。

「ただいま」

「杏ちゃんには会って来たんですか？」

「いや、会わなかったぞ」

「ええ、それじゃ何しに東京に？」

「ちよつとな、ほらお土産だ」

楓にお土産のお菓子を渡し店の中へと歩き出すと、突然凜の目から光が消えて床に倒れ込んだ。

「いつも、ありがと……凜さん！」

楓が倒れた凜の顔を見ると、目が少し開いているが光が消えて死んだ魚の様な目をしていた。

「嫌あああああー！！」

楓がしゃがみこみ両手で頭を抱えて叫んだ。

「どうしたんだ、楓？」

葛城がキッチンから出てくる。

「凜さん？」

事務所からは亜紗と藤崎が出てきた。

「何があつたの？ 凜！ どうしたの？」

亜紗が慌てて凜に駆け寄り体を揺するうとする。

「オーナー！ 触らないで」

藤崎が声を上げた。

その声に驚いて亜紗が手を止める。

藤崎が凜の顔を覗きこんで声を掛けた。

「凜さん。凜さん」

凜の目に光は戻らないがゆっくり瞬きをした。

「葛城君、手伝って。ゆっくり凜さんを仰向けに寝かせます、いいですね」

「はい」

2人でゆっくり凜の体を仰向けに寝かせ藤崎が凜のベルトを緩め、シャツの胸元のボタンを外し凜の足を少し高くした。

「たぶん大丈夫だと思いますが救急車を呼びますか？ オーナー」

「藤崎が大丈夫と言うのなら、少し様子を見ましょう」

「でも、オーナー。凜さん気が付かないですよ」

楓が震えながら言った。

「落ち着きなさい。藤崎は看護師の資格を持っていて応急手当や救命処置のエキスパートだったの、藤崎の指示に従いましょう」

「目は虚ろですが呼吸はゆっくりと正常にしていますし脈もはつきりしています。おそらく過労か心因性のものだろうと」

楓が落ち着きを取り戻し冷たく冷やしたタオルで凜の顔を拭いた。しばらくすると凜が意識を取り戻した。

「俺は……？」

「凜、私が判る？」

「義姉さん」

「良かった、あなた倒れたのよ」

凜が頭を擦りながら起き上がると側で楓が泣いていた。

「楓、ゴメンな。もう大丈夫だから」

「は、はい」

「少しふらつくが、もう大丈夫だから。皆に心配掛けてすまなかった」

凜が立ち上がり皆に頭を下げた。

「凜、家まで送るから。今日はゆっくり休みなさい」

「ああ、そうさせてもらうよ」

凜を家まで送り届けた亜紗は帰り道、車の中で呟いた

「心因性って……」

それから数日後、オーディションに合格した杏の元に花束が届けられた。

メッセージカードには、『ad Albicocca Congratulazioni!! da Campanelia』と書いてあった。

「杏、外国のファンから花束が届いているわよ」

西川が小振りの向日葵でアレンジされ一抱えもあるくらい大きな花束を届けに来た。

杏がカードを見て考えている。

「誰からだろう英語じゃないよね」

急いでパソコンで文字の意味を調べ出した。

「イタリア語なんだ。最初のが、アド アルビコツカでトゥー アプリコツト？ あっ『杏へ』だ。そして次がコングラチュライオーネ！ でコングラレイションで『おめでとう！』だ。ダ カンパネラってフロム カンパネラ……んん？」

「カンパネラ、カンパネツラ……あっあった。小さな釣鐘で、なんだろう」

その時、携帯が鳴った。

携帯を取ると携帯につけてあったストラップの鈴がチリンと鳴った。

「ああ、鈴の事かも。でも鈴って？ リン？ もしかして凜？」

杏が花束を抱しめた。

「今日はオフだし、凜に確認とお礼の電話してみようかなあ」

凜の携帯に電話を掛ける。

「お客様がお掛けになった……」

「もう、電源切つてある。馬鹿。それじゃ、久しぶりにA R I Aの皆の声でも聞こう」

今度はA R I Aに電話する。

「ありがとうございます。レストランテ A R I Aでございます」

「あとう」

「もしかして、杏ちゃん？」

「うん」

「私、楓だよ。久しぶりだね」

「うん、お久しぶり。なんだか照れちゃうなあ」

「元気？」

「うん、元気だよ」

「A R I Aの皆は、元気なの」

「う、うん」

歯切れの悪い返事だった。

「何かあったの？ 楓ちゃん」

「それが……」

楓は何かを考えているか戸惑っているようだった。

「楓ちゃん。友達でしょ」

「そうだね、実は凜さんが倒れたの」

「えっ！」

「そんなに心配しなくても大丈夫、たぶん過労だろうって。今は元気に仕事に来ているし、けれど時々休憩時間に寝ていると何かに魘されている時があるの、だから心因性の可能性もあるって」

「心因性って、あのトラウマに関係があるの？」

「詳しい事は、私には分からないよ。今日はオーナーに言われて病院に精密検査受けに行っているの」

「精密検査って？」

「ああ、念の為だよ。凜さんは大丈夫だ、面倒くせえなあって言っていたから」

「そうなんだ」

杏の声が沈んでいた。

「心配だよ、やっぱり」

「心配だけど、凜が大丈夫って言うなら私は凜を信じる」

「やっぱり、杏ちゃんは凄いね」

「凄くなんか無いよ。長くなるといけないから、もう切るね。仕事頑張ってるね」

「杏ちゃんもね」

「うん、また電話する」

電話を切り杏はその場にしゃがみ込んだ。

心因性、トラウマ、凜が杏を預かると決めた時に亜紗とした約束、そして杏と交わした約束。そんな事を考えていると空港で凜が言った言葉を思い出した。

『俺を信じてくれ、必ず俺が何とかするから。もし杏にしか出来ない事なら助けてくれよ』

「私にしか出来ない事。こんなに離れていて私に出来る事なんかあるの？ 凜、約束は縛りつけるものじゃないんだよ。今の私には歌う事しか出来ないのに……そうだ。今、出来る事をしよう」

杏は机に座りノートに向かい何かを書き始めた。

あの一件以来、凜は休憩時間に店の中ではなくガーデンにサマーベツドとパラソルを置いて横になるようになった。

精密検査の結果は心身の過労によるものだろうと診断された。

今日も休憩時間に凜はガーデンもサマーベツドで海を眺めながら横になっている。

夏休みも始まり日差しがとても眩しく強かった。

「凜さん、大丈夫なのかなあ」

柚葉が窓の外を見ながら呟いた。

「心配だよ、最近あまり笑わなくなっただけね」

「楓もそう感じてるんだ」

「うん」

「凜さん自身が大丈夫だつて言ってるんだから、俺等にはどうしようもないだろ」

「そうなんだけどさあ。葛城、私達に何かしてあげられる事何のかなあ、いつも助けてもらってばかりでさ」

「そうだけど、出来るだけフオローして見守るしかないんじゃないか」

「そうだよな」

3人はテーブルでおしゃべりを続けた。

「そうそう、話し変わるけれど夏海 杏の新曲聞いたか？」

「ああ、『ラ・プロメッサ 約束』でしょ」

「良い曲だよな」

「そうだね、でもかなり切なくって意味深なラブソングだよな。テレビでも突っ込まれていたし、本人が詩を書いたんだよな」

「ブログで、恋人がいます宣言しているしな。杏にしては珍しいスローな曲だよな」

「楓、あのイタリア語の意味分かる？」

「La promessa e amore が約束は絆 La promessa e amore が約束は愛だよ」

「それじゃ最後の言葉は？」

「Mi, amore Campanella は私の愛しいカンパネラ」

「カンパネラって人の名前なの？」

「小さな釣鐘って言う意味があるんだけど良く判らないんだ。それで最後に囁いているのが、たぶん『ティ アーモ』って言う言葉で『愛してる』って言っているんだと思う」

「何でイタリア語なのかなあ？ 夏海 杏の恋人ってイタリア人なのかなあ」

「柚葉、流石にそこまでは私にも分からないよ」

「でも、超人気アイドルの彼氏ってどんな奴なんだろうな」

「そうだよな。きつと素敵な人なんだろうなあ」

その頃、東京に居る杏はパソコンと格闘していた。

それは誕生日に届いた花束が原因だった。

「もう、こんな長い文書解らないよ……」

その花束は、青いバラの大きな花束で、送ってくれたのはオーディションに合格した時の差出人と同じ人だった。

「青いバラの花言葉は『神の祝福・可能性』かぁ。あとはこのメッセージだけなんだけどなぁ」

そのカードにはこう書かれていた。

『ad Albicocca

Buon Compleanno!!

Gli auguri più sentiti di poter festeggiare questo giorno ancora tantissime volte.

da Campanella』

杏は悪戦苦闘していた。

「『Buon Compleanno!!』の意味はと……見つけた!」

スペルを検索してみると、お祝いの言葉の中にお誕生日おめでとうの次の言葉をやつとの思いで見つけた。

『杏へお誕生日おめでとう!この日を何度も何度も再び祝えることを心から祈っています。カンパネラより』

「今日こそは、凜に確認しなきゃ。でもまた電源切ってたらどうしよう、そうだ今の時間ならきつと」

時間を確認して杏は楓の携帯に電話をした。

楓、柚葉、葛城の3人はおしゃべりを続けていた。  
そこに亜紗が事務所から出てきた。

「ねえ、凜を知らない？」

「いつもの様に、外で眠っていますよ」

「外は暑いのに馬鹿なんだから」

「私、呼んで来ますね」

柚葉が立ち上がり店の外に出て行った。

「そうだ、オーナー。イタリア語のカンペラって小さな釣鐘って意味なんですけど日本じゃ釣鐘なんてイメージが湧かなくて」

「そうね、日本では鈴みたいなものかしらね」

「鈴ですか？」

その時、楓の手元にある携帯が鳴った。

「もしもし、ああ、杏ちゃん。何？ 凜さん、ちょっと待ってね」

楓が外にいる凜の方を見ると柚葉がサマーベッドの横で座り込んで震えているのが見えた。

「オーナー、凜さんの様子が変なんじゃ？」

楓が叫ぶと、慌てて亜紗と葛城が外に飛び出した。

楓もそれを追いかけた。

「柚葉、如何したの？」

亜紗が柚葉に声を掛ける。

「凜さんが……凜さんが……」

凜を見ると前回倒れた時と同じ様な状態になっていた。

「葛城君、藤崎を大至急呼んできて」

「は、はい。判りました」

葛城が店の中に走り込んだ。

「柚葉ちゃん、落ち着きなさい。凜は気を失っているだけだから」

「わ、分かりました」

「柚葉、大丈夫だよ。前も直ぐ意識を取り戻したから。ね」

「楓、本当に？」

「今、藤崎さんが来てくれるから」

そこに藤崎がやって来て凜の様子を見る。

葛城はバケツに氷水を入れてタオルを持って戻ってきた。

柚葉がタオルを氷水に着けて絞り凧の顔を拭いた。

「どの位、この状態だったんですか？」

「分からないです。店の中からじゃ何時こうなったのなんか見えな  
いし」

凧が答える。

その時、凧が握り締めている携帯から杏の声が聞えた。

杏は不安で胸が張り裂けそうだった。

携帯から聞える声や音から凧の身に何か大変な事が起こっているの  
が判り凧の名前を呼び続けていた。

「杏ちゃん。ゴメン。凧さんがまた意識を失っていて」

「それで、凧の様子は？」

「まだ、意識が戻らないままなの」

「凧ちゃん、私の声が凧に聞えるようにして欲しいの」

「判った」

凧が携帯を凧の耳に当てる。

「凧！ 凧！」

携帯から杏が必死に凧の名前を呼ぶ声が聞える。

その時、僅かだが凧の指先が動いた。

藤崎が亜紗の顔を見上げた。

「杏ちゃん、聞えるわね。続けてちょうだい。今、少し凧が反応し  
たの」

杏の返事は無かった。

亜紗が携帯を取り杏を呼ぼうとすると、電話口から杏が泣いている  
声が聞えてきた。

「杏ちゃん、聞える？」

「……は、はい」

「そのまま聞いてちょうだい。凧はこんな事を繰り返していると2  
度と元に戻らなくなる可能性があるの、心の傷が原因だと思う。前  
に杏ちゃんには言ったわよね、凧の心の傷は1人じゃ治せないって  
あなたの力が必要なの。あなたにしか凧は助けられないの」

亜紗の言葉を聞いて杏が泣き止んでいた。  
そしてシツカリとした口調で亜紗に言った。

「判りました。私がやってみます」

「お願いよ」

亜紗が楓に携帯を渡す。

「もしもし、杏ちゃん」

「楓ちゃん。もう1度、凜の耳に携帯を」

「判った」

楓が凜の耳に携帯をあてると携帯から歌が流れてきた。  
その声はとても澄んだ優しい声だった。

あなたと出逢い 私は変わったの

大切な事を あなたが教えてくれた

出逢いは一瞬

出逢いは永遠 約束をしてくれたよね

La promessa è amore

永遠に約束を交わしたい あなたとなら

迷った時には 導いてくれたよね

ありのままに それで良いんだよと

私は信じる あなたを信じる

約束に縛られないで

La promessa è legame

La promessa è amore

Mi, amore Campanella

Ti amo

「あ……ん……ず……」

凜の口が動き、目に光が戻ってきた。

しばらくすると凜の意識がはつきりと戻った。

「杏に助けられたみたいだな」

「凜！　ちむ　ぐるしいよ」

携帯越しに杏が泣き叫んだ。

「ごめんな」

楓がヨロヨロと立ち上がった。

「どうしたの？　楓」

柚葉が不思議そうな顔をして楓に声を掛けた。

「あ、アンだ……」

「楓、何を訳判らない事言っているんだよ」

葛城も不思議そうな顔をしていた。

「今、杏ちゃんが歌って聞かせた歌　『ラ・プロメッサ　約束』だった」

「はぁ？」

「楓、それって」

「そう、杏ちゃんが夏海　杏だったんだよ」

「ええっ！」

葛城と柚葉が驚いて声を上げた。

「ああ、面倒くせえなあ。ん？　義姉さん？」

凜が亜紗の顔を見ると真っ黒なオーラを放ち鉄仮面の様な顔をして凜を見下ろし。

徐に足元に有る氷水の入ったバケツを持ち凜に氷水をぶちまけた。

「凜！　少しは目が覚めたかしら？」

「冷てえなあ。何するんだよ！」

凜が声を上げる。

「面倒くせえだと、散々杏を泣かせておいて。コラ！　何時までウジウジと考えて悩んでんだよ。お前は」

凜の頭めがけて蹴りを叩き込んだ。

寸での所で凜が受けたが吹き飛ばされた。

「し、死天使アーサと死神リンのバトルだ」

「葛城、唯の兄弟喧嘩にしか見えないけれど」

葛城が呟くと楓と柚葉は葛城の後ろに隠れていた。

亜紗が一瞥する。

藤崎は呆れ顔で2人の様子を見ているだけだった。

「凜！ てめえ。何時からそんな腑抜けたヘタレ野郎に成り下がったんだ。それでも男か？ 女の腐ったのみてえだな。何がトラウマだ、双樹と桃香が聞いて呆れるぜ」

その名前を聞いた瞬間、凜が切れた。

「おい、アーサ。貴様、言って良い事と悪い事の区別も着かないのか？」

「何度でも言ってやる。今のお前を見て双樹と桃香が笑ってるって言っただよ」

「ふざけるな、俺のどこが腑抜けでヘタレなんだ！」

凜が亜紗の胸座をつかんだ。

亜紗も凜の胸座をつかみ返す。

「全部だよ、トラウマなんざに押し潰されているお前全部だよ」

「何が約束だ！ 今のお前に約束なんか1つも守れるものか」

「ん、だとコラア！」

「それじゃ、守れるのかよ」

「守って見せるさ」

「無理だね、今のお前じゃ何一つ守れやしないね。そんな死んだような目のお前にどんな約束が守れるって言うのさ」

「守る為に今、動き回って居るんだろう」

「違うな、今のお前は迷って同じ所をグルグル回って居るだけだ、雷神の死神リンなら総てを手に入れようとするはずだ。今のお前に約束を守ってもらって嬉しい奴なんて1人もいねえんだよ」

亜紗が凜を殴り飛ばすと凜が後ずさりをして尻餅を着いた。

「今の凜の姿を見たら双樹や桃香は泣くぞ、杏だって私だって今の凜なんかに約束なんて守って欲しくないんだよ。苦しくて辛いのは凜だけじゃ……凜だけじゃ……無いんだよ……」

亜紗が泣いていた。

今まで一度も弱音を言った事が無い亜紗が人前で涙を流していた。  
「着替えてくる」

亜紗の泣き顔を見て凜が立ち上がり店を出て行った。

「オーナー、いくらシヨック療法でもやりすぎですよ。辛かったで  
しょ」

藤崎が優しく声を亜紗に向けた。

「わああああ……」

亜紗が藤崎にしがみ付きながら泣き崩れた。

「オーナー、本当は凜さんの事が……」  
柚葉が呟いた。

「あ、杏ちゃん？ あれ？ 切れてる」  
楓が携帯を耳に当てると既に切れていた。

その頃、杏は西川に急に呼び出され。

プロダクションの社長つまり杏の叔父さんに呼ばれ真剣な面持ちで  
話を聞いていた。

それから数日後、凜の姿はA R I Aには無かった。

店では凜が居ない為に早く出勤して掃除をしている。

楓と葛城が外を見ながら話をしていた。

「凜さん、また東京だって。今度は帰れるかわからないって言うってたね」

「そうだな、でも凜さんが決める事なんだろう。しょうがないさ楓や俺が口出しできる問題じゃなさそうだしな」

「そうだね」

そこに、柚葉が出勤してきた。

「おはよー」

「おはよう」

「お通夜みたいだね。楓達」

「仕方が無いだろ」

「でも、こんな所凜さんが見たら怒るよ。きっと」

「そうだよな。柚葉」

「そうそう、それに今日は『彼はグランパ』の映画の製作発表がある日だよ」

「でも、驚いたよな。ヒロイン役が杏ちゃんだぞ」

「だけど杏ちゃんも、今一番大変な時だからね」

「可哀想にかなり強引な移籍なんだろ」

「どこかの悪徳プロダクションが大金を叩きつけて移籍させたらしいよ」

「まるで人身売買だな」

「はあ、杏ちゃん。辛いだろうなあ」

「もう、柚葉までお通夜みたいになったじゃん。馬鹿」

3人がテーブルでうな垂れていると事務所から亜紗が出てきた。

「葛城君、少し手を貸してちょうだい」

「はい。何をするんですか？」

「これを、テーブルに運んで欲しいの」

「これって、テレビをですか？」

「時間が無いの。早く運んでちょうだい」

「分かりました」

亜紗に言われるままテーブルにテレビを運んで映る様にセッティングまでしていた。

「これから、何が始まるんですか？」

「これは、今後のA R I Aにも係わってくる問題なの。どうしてもあなた達には知っておいて欲しいの」

亜紗がテレビをつけると、すでに何かの会見が行われていた。

「皋さつきコーポレーション？ 代表取締役就任会見。何ですかこれ？ オーナー」

「ねえ、葛城。あそこに映っているのって……」

楓が言葉を失い啞然としていた。

「り、凜さんだ！」

柚葉が叫んだ。

「はあ？ 何で凜さんがあんな所に居るんだ？ 皋さつきコーポレーションで言えば日本を代表する大企業ですよ。その会社の取締役にな凜さんが就任したなんてどう言うことですか？」

葛城が亜紗に詰め寄った。

「そうなの、これが杏ちゃんをここに置く為に凜が私と交わした約束なの」

「でも、こんな事になったら杏ちゃんとは……」

「それに、大好きなこのお店とも……」

楓は愕然とし柚葉も体から力が抜けてしまった。

「そして、凜のもう1つの仕事さえ諦めなければならぬ」

「そんな、馬鹿な。どうして凜さんが」

「そう言えば、オーナーの苗字も確か皋……まさか」

「楓ちゃん、そのまさかよ。私は会長の娘なの、そして妹の双樹も。これは前々からの約束だったの。私か双樹の結婚相手が会社を継ぐという。双樹は凜と結婚してそして死んでしまった。私は未婚のまま。凜は断り続けてきたの、自分にそんな資格はないと。でも今回の杏ちゃんの件で私が交換条件にこの事を言つとあつさり承諾したの」

「どうして凜さんはそんな大切な事を簡単に……」

「楓ちゃん、それは私にも分からない。たぶん凜自身も杏ちゃんの事を何とかしてあげたいという思いから承諾したんだと思うわ」

「それで凜さんはあんな事になったんですね」

「ば、馬鹿。葛城」

楓が葛城の脇に肘を当てた。

「あ、すいませんでした。オーナーも辛い思いをしているんですよ」

「良いのよ、もつと早く凜が杏ちゃんの正体に気が付いているのを知っていたらこんな事にならなかったんだから」

亜紗が唇を噛み締めた。するとテレビの会見を逃さず見ていた柚葉が何かに気が付いた。

「あれ？ この会見会場ってグランパの製作発表の会場と同じホテルだ」

「柚葉ちゃん、それ本当なの？」

「ええ、確かですよ。もうテレビでも始まっているはずですよ」

「どうしたんですか？ オーナー」

葛城が亜紗の顔を見ると何かに気付いたようだった。

「凜の要望で急に会見会場がこのホテルに変更されたのよ。まさかあの子」

「そう言えば柚葉。グランパの作者って謎だらけなんですよ」

「うん、その話は有名だね。男性と言う事意外、何も公表されていない謎の人物。会った事あるのは出版社と今回の監督くらいじゃないかなあ。でも判る事が1つだけ、あれだけ詳しく石垣島を舞台

に使って居るって事は石垣島に住んで居るか、住んでいた事がある人なんだよ」

「でも、杏ちゃんがヒロイン役で会場に居るからって凜さんが会える訳じゃないですか」

「それが、出来るのよ。凜なら」

「まだ、何かあるんですか？」

「柚葉ちゃん、チャンネルを変えてちょうだい」

「判りました」

柚葉がグランパの映画製作発表の番組にチャンネルを変えた。

「杏ちゃん。元気がないね」

「移籍の事があるからな」

映画制作発表の会場では監督や出演者が並んで座って記者からの質問に答えていた。

原作者の席だけが空席でその隣の席で杏は叔父に言われた移籍の事を考えていた。

あの日。叔父に呼び出された杏は信じられない事を言われたのだ。

「杏、お前の移籍が決まった新しい事務所は大企業の子会社だ」

「移籍なんて私……」

「しょうがないだろ、先方がどうしても大金を積んできたんだ」

「うちも色々大変なんだよ。判ってくれ。住まいはその事務所が手配するから」

「やっぱり商品なんだ」

「タレントなんてそんなもんだよ。元気でやれよ」

今は涙を堪えるので精一杯で制作発表どころではなく次々にされる質問にも緊張と不安から、あやふやな返事しか出来なかった。

凜は会見を終えてホテルの階段を駆け上がっていた。

「社長、どこに行かれるんですか。この後、会長達との打ち合わせがあり時間が無いんですよ」

「橘！ 秘書のお前に言われなくってもそんな事は判ってるよ。俺にも時間無いんだ」

秘書の橘が凜を追いかけていた。

そして、ある会場の前で止まり息を整えてメガネを掛けて会場内へと入って行った。

会場に入るとドアの直ぐ側に杏のマナージャーの西川が立って会見を見ていた。

「あなたがこんな所で何をして居るの？ 待ちなさい」

舞台へと進もうとした凜を見つけて西川が立ちはだかった。

「退いてくれないか、邪魔だ」

「関係者以外立ち入り禁止のはずよ」

「俺は、関係者だ」

「ふざけないで何でも自由に出来ると思ったら大間違いよ」

2人の言い争いに気が付いて根岸が駆け寄ってきた。

「凜さん、どうしてここに……」

「根岸、俺の席に案内してくれ」

「良いんですね。本当に」

「ああ、構わない」

「あなた達、何を訳分からない事を言っているの？」

「あなたこそ失礼でしょ。この方が原作者の仲村 歩先生です」

呆れ顔の西川を尻目に凜と根岸は舞台に向かう、そこに杏の叔父が近づいて来た。

「社長、あの男をぶつ潰しましょう」

「西川、それは無理な相談だ……」

「でも、小説の原作者なんて高が知れているわ」

「相手が皐コーポレーションでもか？」

「なんで、そんな大企業が出てくるんですか？」

「あの男は代表取締役なんだよ。下の会場で就任会見をしたばかりだけだな」

西川が呆然としている。

「そんな馬鹿な話が……」

根岸が進行役に原作者が来た事を伝えたと慌てて紹介を始めた。

「ええ、突然ですが。原作者の仲村 歩先生がこの日の為に始めて公の場所においでくださいました」

今まで謎のままでった原作者の突然の登場に会場が騒然となりフラッシュが光り続けた。

根岸の案内で舞台の席に着くと一斉に質問が飛び交った。

そんな騒ぎでさえ杏にはどうでもいい事に思え上の空だった。

「私のプライベートな事に関しての質問には一切お答え致しません。映画の質問にも監督や出演者の方々がお答えした通りです」

仲村が毅然とした態度で質問をシャットアウトして見せた。

進行役が冷や汗を掻きながら進行させている。

場内の記者たちも右往左往している。

「浮かない顔だな。夢が叶ったんじゃないのか？」

仲村が前を向いたまま杏に言った。

杏は虚ろな目をしていた。

「面倒くせえなあ」

仲村がマイクを切って呟いた。

その聞き覚えのある言葉に杏が我に返った。

横を少し見ると濃い茶色のスーツを着たメガネをかけた男性が座っていた。

「誰？」

どこかで聞いたことがある様な声だったが酷く冷たい声に感じた。

「誰は無いだろ。今しがた紹介されたばかりなんだが聞いてなかったのか。原作者の仲村だ」

「あなたが原作者？」

「オーディションで掴み取ったんだろ、今の君を落選した子が見たらなんて思っかな」

「でも……」

「プロならシツカリしなさい。今は映画に集中すべきじゃないのか？」

「すいませんでした」

仲村の言葉で杏の目に光が戻った。

会場も落ち着きを取り戻し、杏も後半は笑顔で対応していた。

無事に製作発表が終わり控え室で杏は西川と話している。

「杏、あんな態度でうちの会社に泥を塗る気なの？」

「もう、関係ないでしょ。私は売られたのに！」

「まだ、正式に契約を結んだ訳じゃないでしょ。契約を済ませるまで私があなたのマネージャーなの。恥を掻かせないでちょうだい、まったく今日はろくな日じゃないわ。あの胸糞悪い男まで現れるし」

「胸糞悪い男？」

「そうよ、あなたの……」

その時、控え室のドアをノックする音が聞えた。

「はい、どうぞ」

西川がドアを開けて対応する。

「失礼します」

「あなたは確か」

訪ねてきたのは根岸だった。西川が怪訝そうな顔をした。

「私は仲村先生の担当をさせて頂いている根岸といいます。先生が

夏海 杏さんにお話があるそうです」

「杏、いつてらっしゃい。私の仕事はこれで終わりだから。後は新しい移籍先に可愛がってもらいなさい」

そう言つて西川は控え室を出て行ってしまった。

杏は悔しくつて唇を噛み締めた。

根岸に連れられて使われていない控え室に案内された。

「杏さん。こちらで、少し待っていてくださいね。先生を呼んできますので」

根岸が優しく言って仲村を呼びに部屋を出って行く。

杏は独りになると悔しさと不安で涙が溢れ出した。

そこに誰かが根岸と入って来る。

杏は咄嗟にドアに背を向けて涙を拭いた。

「泣いていたのか？」

舞台の上で聞いた声と同じ冷たい声だった。

「あなたには関係ないです」

緊張と不安から感情が高ぶっていた。

「関係ないか、話せば少し楽になる事もあるだろ」

「事務所の移籍の事でゴタゴタしているだけですから」

「移籍が嫌なら契約しなければいいだろ」

「そんな事すれば私の居場所が無くなるんです。あなたに何が判るというんですか？」

杏が声を荒げた。

仲村と一緒に居る根岸が杏に声をかけた。

「もう少し、落ち着いてください。杏さんが1番会いたかった人ではないのですか？」

「そんな人、ここには居ない……」

杏は決して振り向こうとしなかった。

「面倒くさいなあ。まったく」

仲村が呟く。

「面倒くさい言うな！」

杏が叫んだ。

「Ti amo Albicocca」

その言葉と優しい声で杏が我に振り返り向いた。

そこには根岸の横で優しく微笑んでいる濃い茶色いスーツを着てメガネを掛けた凜が真っ直ぐな瞳で杏を見つめていた。

「り、凜なの？」

「ごめんな、隠していて俺が仲村 歩なんだ」

その声は紛れも無く凜の声だった。

「一目惚れしちゃいましたか？」

根岸が優しい声で杏に言った。

杏の瞳から涙が再び溢れ出した。

「はい！」

杏が凜に抱きついた。

凜の胸にしがみ付きながら号泣すると凜が優しく抱しめた。

しばらくすると秘書の橘がやって来た。

「もう、お時間が」

「今、行くから。ゴメンな、杏。ゆっくり話している時間が無いんだ」

「そうなんだ。私も新しい事務所の人と会わなくちゃいけないから」

「それじゃ、また必ず連絡するからな」

「凜、体は大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ」

凜が秘書の橘と走り出した。

杏は新しい事務所の使いの人と待ち合わせ場所に向かった。

橘に連れられて凜は打ち合わせの場所に到着した。

そこは高級ホテルの応接室だった。

「遅れてすいませんでした」

「珍しい事もあるもんね。いつも時間厳守の凜さんが遅効なんて」

凜は肩で息をしながら上着を脱ぎネクタイを緩めた。

「相談役、何の話なんですか？」

「とりあえず、そこに腰掛けなさい」

「堅苦しい事は抜きで行きましょう。凜さん」

「それじゃ、お義母さん話はなんですか」

「あなた、亜紗を泣かしたらしいじゃないの」

「あれは、ただの喧嘩ですよ」

「そうかしら？」

「すいませんでした」

「謝らなくて良いのよ、仲の良い証拠だもの」

「それで本題は？」

「そうね、凜さんにはしばらくの間、うちの新しい子会社を見ても  
らいたいの」

「子会社ですか？」

「そうよ、それととりあえずあなたの署名が必要なの」

「署名ですか？」

「ほら、この書類よ」

「判りましたよ」

書類を渡されると凜が内容を確認もしないで署名をした。

「中を読まなくて良いの」

「お義母さんが持ってきた物なら不利益になる様な事はないでしょ」

「あらあら、信用してくれているのね」

「当たり前です。で、何をする会社なんですか」

「プロダクションよ」

「プロダクション？」

「ええ、まだ契約者は1人しか居ないけれど」

「ずいぶん小さな会社なんですね」

「ええ、その分。自由にしていられるでしょう。本社の仕事は私達  
に任せてちょうだい、でも公の場所には出てもらうわよ」

「判りました。それでその契約者はどこに居るんですか？」

「これから契約するのよ、それからがあなたの最初の仕事よ」

「プロダクションの仕事なんて良く判らないですけど」

「橘が居るから安心なさい。それともう1つ契約が済むまであなた  
は決して話しかけないでちょうだい。いいわね、約束よ」

「判りました」

その時、ノックする音が聞えた。

杏は、待ち合わせ場所のホテルのロビーで1人で待っていた。そこに黒いスーツ姿の女性が現れた。

「夏海 杏さんですね。こちらへどうぞ」

杏は頷いて言われたとおりに着いて行く。

もう、どうでも良い気持ちでいっぱいだった。

どうせ私は商品でしかないんだと。

ホテルの部屋の前に着き女性がノックをする。

中にはいると1人の男性がソファでこちらに背を向けてすわっており、その横の席には歳の割には若く見える年配の女性が座っていた。

「こつちにいらつしやい」

「はい」

杏は女性の前に座った。

「始めまして、私はここの親会社の相談役をしている梶 桜さつき  
もみじと申します」

「はい、私は……自己紹介するまでも無く判っていますよね」

杏は俯いたまま言った。

「そうね。とりあえず、契約書にサインをしてちょうだい」

杏は契約書には目もくれずに椀に質問を浴びせた。

「私をいくらで買い取ったのですか？」

「そんな事を聞いてどうするの？」

「私にいくらの値が付いたか気になるだけです」

「1億よ、これは私達が提示した金額じゃなく、あなたの居た事務所が提示した金額よ」

「そのお金を返せば自由にしてもらえますか？」

「ええ、構わないわよ。でも返せるの？」

「働いて返します」

「強情ね」

「強情じゃなければこの世界では生きて行けないんです」

「それじゃ、契約成立でいいわね。契約書にサインを」

「判りました」

杏も契約書を読まずに、サインをした。

「読まなくていいの？」

「結構です」

杏が俯いたままで返事をする。相談役の桜が杏の事を舐めるようにまじまじと見た。

「ふうん。あなたが夏海　杏なんだ。まだまだ子どもって言う感じがしら」

「もう、20歳です」

杏が唇を噛み締める。

「一応、大人なのね」

「……………」

杏は何も答えなかった。

「それじゃ、脱いでもらえるかしら？」

桜が冷たく言い放ち腕組みをしてソファの背もたれに寄りかかった。

杏は俯いたままで膝の上に置いた握り締めた手が震えていた。

「どうしたのかしら？　出来ないの？」

「判りました。脱ぎます」

杏が立ち上がり、少し戸惑いながら着ていたシャツのボタンを外そうとした。

その時、横に座っていた男が静かに立ち上がり杏の前に手を出して杏を止め。

桜を真っ直ぐ見て言った。

「相談役、もうそのくらいでいいでしょ」

それはとても力強い口調だった。

杏は首もとのボタンを外そうとしたまま男と逆の方を向き俯いた。

「代表は黙りなさい。橘！」

椀が秘書の橘を呼ぶと橘が近づいてくる。

「はい、畏まりました。夏海様こちらへ」

杏の肩に手を置き橘が別室へと杏を連れて行った。

凜が立つたまま、椀の眼を真っ直ぐ見ていると椀の瞳が少し揺れた。

「お義母さん、やりましたね」

凜は直ぐに思い出した、椀が悪戯好きな事を。

「あなたのその真剣な真っ直ぐな眼、大好きよ。双樹を貰い受けに来た時と同じ眼だわ」

悪戯っ子の様な目で椀が言った。

「その話は……」

凜が窓の方に歩いていきしばらく外を眺めていた。

「双樹と桃香の事を忘れるとは言えない。でもね2人に縛られないで2人ともそんな事は望んでいない筈よ。私達の望みは会社を継いでもらう事じゃない、あなたに幸せになってもらいたいよ。その為には、あの子がどうしても必要なの。あなたは約束の為に約束以外の事を総て切り捨てようとしている、でもそれは相反する事だった。だからあなたの心が悲鳴を上げてしまった。違うの？」

「それは……」

凜が振り向くとドアの所に橘に連れられて着替えを済ませた杏が立っていた。

杏の表情から椀の言葉を聞いていた様子なのが直ぐ判った。

杏は製作発表会から着替える間もなくここに連れてこられたので映画の衣装のままだったのだ。

今は、真っ白なノースリーブの夏らしいワンピースを着ていた。

メイクも落とされてナチュラルなメイクになっていた。

「あら、着替えが終わったのね。素敵よ杏さん」

椀の顔には先程の厳しさは微塵も感じさせない優しい笑顔だった。

「そこに居るのは凜なの？」

窓を背に立っている為に逆光になっていて顔が見えなかった。

「悪者になった気分だな。隠し事ばかりで」

その声は紛れも無く凜の優しい声だった。

凜の声を聞いた途端、杏の瞳から再び涙が零れ落ちた。

「凜は悪者じゃない。オーディションの時も私を励まして見守っていてくれた。製作発表の時も今まで一切表に出てこなかったのに私の為に公の場所に出て来てくれた。そして今も私を守ろうとしてくれたじゃない。マネージャーにはれないようにカンパネラとして花束を贈ってくれた。訳があつて言えなかっただけなんですよ……凜がどんな事をしていようが凜は凜でしょ」

「そうだな。ゴメンな」

「謝らないで……凜！」

杏が凜に抱き付いて泣いた。

「これで、今日2度目だな」

「うん」

杏は凜に抱きついたまま頷いた。桜が優しく2人を見つめている。

「あらあら、私は蚊帳の外かしら」

「す、すみませんでした」

杏が凜から離れて涙を拭いて言った。

「良いのよ、2人の事は亜紗から聞いているから」

「凜、桜さんって……」

「杏さん、私は亜紗と双樹の母親よ」

「オーナーのお母さん？」

「ええ、そうよ。そしてこの会社の相談役なの」

杏に名刺を渡す。

「皐コーポレーションって、あの大企業の相談役？」

「そして、皐コーポレーションの現・代表取締役つまり社長が凜さんなの映画の製作発表会と同じホテルで就任会見を今日したばかりだけだね」

「凜が皐コーポレーションの社長……」

「そして、杏ちゃんの新しい事務所『オフォス AQUA』の社長も凜さんよ」

「私の契約者が凜なの？」

「そう言う事になるな……って、まさか」

凜がテーブルに置いてあった契約書を手に取り確認する。

「まんまと填められた。はあ」

凜が頭に片手を当てて溜息をついた。

「久しぶりにワクワクさせて貰ったわよ。凜さん」

「どう言う事ですか？」

「後で判るわよ。杏ちゃん、早速、仕事を頼めるかしら」

「はい、何をするんですか？」

「これにサインをして欲しいの」

椀が3枚の色紙を取り出した。

凜は契約書を持ったまま立ち尽くしている。

「サインをするだけですか？」

「そうよ。朋君、力君、昴君へと入れてちょうだいね」

杏がスラスラとサインを書いた。

それを椀が手提げとリュックにもなる可愛い茶色い革のバッグに入れる。

「凜さん、いい事。必ずこのサインを本人達に直接渡す事。これは命令よ、判った」

サインの入ったバッグを凜に渡す。

「はい、もうお任せします」

凜は今にも倒れそうなくらい力が抜けていた。

椀が凜の手から契約書を取り杏に渡した。

「今日、2人を試させてもらったわ。あなたが凜さんに相應しいか、それと凜さんの本当の気持ちを。どちらも合格よ、キツイ事を言うてゴメンなさいね」

「もう、気にしていませんから」

「そう言って貰えると嬉しいわ。その契約書はあなたからしか破棄する事が出来ない契約書になっているの、決して凜さんを離しちゃう駄目よ」

「はい、ありがとうございました」

「何時までそこで突っ立って居るの？ 杏ちゃんを自由にするのに1億じゃ安かったかしら？ 凜さんなら命まで掛けちゃいそうだものね。契約書は良く読んでからサインするものよ」

「お義母さん、もうこれ以上は勘弁してください。でもやっぱり不利益にはならない物じゃないですか」

「うふふ、そうだったわね。これは私からのプレゼントよ、今日のお詫びの印。地下の駐車場に置いてあるから、それを使って行きなさい」

桜が凜に鍵を放り投げると凜が片手でキャッチした。

「判りました。直接届ければ良いんですね」

「そうよ、頼んだわよ。橘、周りでコソコソと嗅ぎ回っている記者を何とかしなさい」

「はい、畏まりました」

橘が部屋から出て行った。

「さあ、お2人さん行つてらっしゃい」

「面倒くせえなあ」

「面倒くさい言っな。行くよ、凜」

「杏ちゃん、今度は皆でお食事でもしましょうね」

「はい」

杏はとびつきりの笑顔で返事をして、凜を引っ張りながら部屋を出た。

杏と凜はエレベーターでホテルの地下駐車場に向かっていた。

「凜、あの契約書って本当に有効なの？」

「あの人の事だから弁護士にでも作らせたんだろ」

「それじゃ、有効なんだ。でも」

「でも、何だ？」

「私を石垣島に居させる為にした凜と亜紗さんが交わした約束ってこんな大変な約束だったんだね。その為に凜の心が壊れかけてしまった、私の所為で」

「杏の責任じゃないよ、俺が弱かったからだ。義姉さんに殴り飛ばされたよ、昔のお前なら総て手に入れようとした筈だって」

「そんな事があったんだ。この契約書、仕事の事には一切触れてないけどどうしたら良いの？」

「俺が小さな会社ですねと聞いたたら、自由でいられるでしょと答えたんだ。それで良いんじゃないか。本社の仕事は任せると言っていたし」

「それじゃ、これから2人で決めれば良いんだね。凜はずーと一緒に居てくれるし」

「サポートするとしか書かれていないはずだが」

「同じ意味じゃん」

「サポートは支援すると言う意味だぞ。一緒に居ると言う意味じゃないだろ」

「でも、生涯って書いてあるもん。それに凜にも不利益にはならないんだよ」

「そんな事、よく聞いてたな」

「だって大好きな人の言葉だもん、一字一句聞き逃さないよーだ」

契約書には甲の欄には桜木 凜の署名が乙の欄には夏海 杏の署名がされていて『私、甲は。乙を生涯サポートする事を次の通りに契約いたします。』と書かれていた。

2人が地下駐車場に着くとそこには黒い大型バイクが止められていてサイドにはヘルメットが2つ繋がれていた。

「Lightning XB12Ssだな」

「凜、このバイクって」

「グランパで登場するバイクだよ。相変わらずミィハーだな」

「栞さんも読んでいるんだね」

「杏、これを着てくれ」

「うん」

凜が自分の上着を杏に着せ袖を捲くる。

「それとこれを持っていてくれないか」

「分かった」

杏が茶色い革のバッグを受け取り、柵から渡されたバッグの中に契約書をしまいバッグを背負った。

「ほら、ヘルメットだ」

杏がヘルメットを被ると凜がヘルメットのスイッチを入れ、自分もヘルメットを被った。

「杏、聞えるか」

「うん、良く聞えるよ。まるで主人公達みたいだね」

「そうだな」

凜がバイクにまたがりエンジンを掛ける。

杏が後ろに乗り凜に抱きついた。

「スカートで大丈夫か？」

「大丈夫だよ。見えたりしないから」

「それじゃ、行くぞ」

「うん」

凜がバイクを出す。

地下駐車場を出るとそこには記者達の姿はなかった。

おそらく橘が記者を影武者でも使っておびき出したのだろう。

それでも何台かの車が気付いて着いてきた。

高速に乗る、それでもまだしつこく着いてきていた。

「凜、どこまで行くの？」

「サインを届けにだよ」

「どこに？」

「埼玉だ。杏、怖いかな？」

「凜が一緒だから怖くないよ」

「それじゃ、飛ばすぞ。後をつけている奴等を巻くからな」

「うん。分かった」

凜がアクセルを開けるとあっという間に後ろの車は着いて来れなくなった。

しばらく走ると高速を降りて住宅街に入って行き1軒の家の前でバイクを止めた。

「凜、ここはどこ？」

「埼玉だよ」

「そうじゃなくって」

その時、バイクの音に釣られて家の中から小学生くらいの男の子が出てきた。

「ああ、凜だ！ ママ！ 凜が来たよ」

男の子の声で中からママらしき女性が現れた。

「兄貴、いきなりどうしたの？」

「ちよつと野暮用があつてな」

側に居る杏をみて女性が固まった。

「兄貴、もしかして……5分だけそこで待ってて！ 絶対に入って来ちゃ駄目だからね」

そっぴい残して家の中に駆け込んだ。

家の中からはドタバタと数人の男女の声や怒鳴り声が聞えた。

「凜、ここって……」

「サインを届けに来たんだろ」

「サインを届ける人って……」

「俺の甥っ子だけど」

「それじゃ、今の人ってまさか……」

「妹だが」

「ここって凜の実家じゃないの？」

「そうなるかなあ。相談役が直接手渡ししろって言っていただろ、それに面倒くさいって言ったのに『面倒くさい言つな、行くよ』と言ったのは杏だぞ」

「知ってたら言わなかったもん」

「知らないから命令されたんだよ。つまり両親にキッチンと紹介しろと填められたんだ」

「そんな……」

杏が困惑した表情をしていた。

「最初からあの人はそのつもりだったんだよ、杏の着替えまで用意してな。心配するな俺の家族は普通の一般人だから。そろそろ良いかな、行くぞ」

「えっ、そう言う問題じゃないよ」

家に入ると凜に居間に連れて行かれる。

居間では出迎えてくれた妹と凜の両親がテーブルに座っていた。

「ほら、ぼーとしていないでこっちに来い」

「うん、はじめまして……」

凜に手を引かれ部屋に入る。

部屋に入ると凜は床に座り込んだ。

「ほら、杏もここに座れ」

凜が床を軽く叩いた。

「う、うん」

杏が凜の横に正座した。

「足は崩せ」

「でも」

「良いから」

「もう、凜の馬鹿」

そう言いながら杏が足を崩した。

「凜ちゃん、そんな所に座らなくても」

「お袋。床の方が楽なんだよ、足も伸ばせるし」

凜が足を伸ばし胡坐をかいた。

「凜、ちゃんとしないか」

「そつだな、親父。今、付き合っている夏海 杏だ。宜しくな」

「杏、親父とお袋と妹だ」

「宜しくね。そうそうお茶も出さないで駄目ねえ」

母親が台所に向かった。

「兄貴はいつも突然来るんだから連絡ぐらい寄こしなさいよ。特に誰かを連れて来る時にはね。汚い所でゴメンなさいね」

「いいえ、とんでもないです。私こそ急にお邪魔しちゃって」

「でも、兄貴は何者なの？ 彼女は本物なんですよ？」

「本物も何も杏は杏だぞ」

「そうじゃなくて、な・つ・み・あん なんてしょアイドルの」

部屋の入り口から覗く3つの影が見えた。

「本物かな？」

「お前が聞いて来いよ」

「やだよ」

「サイン欲しいな」

などと小声で話しているが筒抜けだった。

「そのの、3人！ ここに来て座れ」

「「「はい」」」

凜が声を掛けて床を指差すと渋々3人が出てきて凜と杏の前に座った。

「ほら、杏。渡す物があつて来たんだろ」

「えっ、うん」

杏がバッグから色紙を出した。

「ほら、1人ずつだぞ」

「ええつと。トモ君、リキ君に……」

「タカだ」

「タカ君。はい」

3人に色紙を渡した。

「すげー本物だ」

「ありがとう」

「ねえねえ、お姉ちゃん凜のお嫁さんになるのか？」

「ええ、それは」

朋の質問に杏が固まった。

「まあ、そのうちな」

杏がキョトンとしている。

「それじゃ、凜。また一緒にお姉ちゃんと遊びに来るんだな」

「ああ、約束するよ。今度は皆で遊ぼうな、今日は忙しいからお前達外で遊んで来い。遅くなるなよ」

「うん。友達に自慢しに行こうぜ」

「そうしよう」

「凜、いつ帰るんだ？」

「そうだなあ、まだ決めてないんだ」

「そうか、夜ご飯は一緒に食べれるのか？ 泊るのか？」

「そうだな」

「それじゃ、遊んでくる」

3人が嬉しそうに色紙を持って外に飛び出して行った。

「まったく、兄貴はいつもそうなんだから。前はいきなりこいつと結婚するからって大きな会社のお嬢さん連れて来るし。今度は娘みたいなアイドルですか、兄貴らしいと言えば兄貴らしいけどね」

「はい、何も無いけれど冷たい麦茶でもどうぞ」

母親がお茶を入れて運んできた。

「ありがとうございます」

「そう言えば凜ちゃん、テレビで何かの就任式に出てなかった？」

それと映画か何かの式にも、人違いだったのかしら」

「お母さん、それ何の事？」

「臯コーポレーションの代表取締役の就任式と映画化が決定された『彼はグランパ』の製作発表だろ」

「何で、兄貴がそんな場違いな所に出るのよ」

「そう言えば、凜ちゃんの前の奥さんってたしか、臯コーポレーションのご令嬢じゃなかったかしら」

「そうだ」

「グランパって今人気の小説でしょ前の作品もそこそ人気があつて」

「そうだな」

「もう、相変わらずはつきりしない男だね兄貴は」

「落ち着いて聞けよ」

「早くしなさいよ。買い物にも行かないといけないんだから」

「俺、皐コーポレーションの社長になったんだ。それと小説の原作者は俺だから」

3人が凜の顔を見て固まった。

「それと、もう1つ。杏のプロダクションの社長も兼任していて、こつちの仕事がメインになりそうだから。宜しくな」

「これが、皐コーポレーションの名刺」

「これが、仲村 歩の名刺」

「そんで、オフィス AQUAの名刺と」

3人の前に3枚の名刺を並べる。

「一般ピープルには理解の限度を超えてるよ……兄貴」

「俺だつて一般人だつたぞ昨日までは。まあ、小説は趣味に毛が生えたもんだから誰にも言わなかったけどな。映画化なんて夢みたいだし、それに後の2つは成り行きでなつたんだしょうがないだろ」

「それじゃ、彼女の事はどうなの？」

「中途半端な気持ちでこんな所に連れて来る訳が無いだろ」

「そうだよな、前の奥さんとこれで2人目だもんね。家に連れて来たの、それだけ本気だつて言う事だよな」

杏がずーと凜のシャツを掴んでいた。

「杏？ さつきから何もしゃべらないけれどどうしたんだ？」

「何でもない」

「顔真っ赤だぞ」

その時、お袋が一言だけ漏らした。

「凜ちゃん、私もう駄目みたい……」

母親の体から力が抜けて椅子にへたり込んだ。

「お袋、大丈夫か？」

「凜、少しすれば落ち着くよ。どうせお前の事だ、泊まる所も考えずにここに来たんだろ。2人で買物にでも行って来い」

「そうするか。親父、お袋を頼んだぞ。杏行こう」

凜が立ち上がり部屋から出ようとする。

杏も慌てて凜の後を追いかけた。

バイクで駅前の商店街に向かった。

「凜、買物って？」

「杏は今晚、どこで寝るつもりなんだ？」

「あ、分らない」

「たぶん実家でごろ寝する事になるだろう。杏の着替えは家にはないからな、親父なりに気を利かせたんだろ」

買い物を済ませバイクに戻ろうとすると杏が何かに気が付いた。

「西浦田駅？ 凜さっきの大きな通りは何ていう通りなの」

「ああ、バイパスだ」

「それじゃ、この辺って」

「ああ、そうだ。河川敷に行ってみるか」

「うん、行ってみよう」

バイクで河川敷に向かい土手の上にバイクを止める。

凜は土手の上に腰を下ろしてバンダナを広げた。

「ほら、この上に座れ」

「うん、ありがとう」

日が少し傾いてきていて、川面を渡る風がとても心地よかった。

「こんな所だったんだ。ちゃんとモデルの場所があるんだね」

「空想の場所ばかりじゃ、リアルティーに欠けるだろう。それに考えるのが面倒だしな」

「それじゃ、グランパの場所は？」

「あれは、多摩川沿いかなあ一応。最初は空想の世界で思ってい

「たんだが実際の場所に少し当て嵌めたんだ」

「そうなんだ、それじゃ実際は行った事無いんだ」

「そうなるかな」

2人で河川敷を眺めて話をしていると子ども達が言い争う声が聞えてきた。

見ると土手の下の公園で男の子2人が女の子達数人と言い争いをしていた。

「嘘つき！」

「嘘じゃないもん、これが証拠だつて言ってるだろう」

「そんなサインが証拠にはならないでしょ」

「本当に夏海 杏が家に来てるんだよ」

「嘘ばかり、前は本当は喧嘩に強いとかさあ。言っちゃって」

「嘘じゃねえよ」

「それなら、かかって来なさいよ。ほら」

女の子が男の子を突き飛ばした。

「危ないだろ」

「ほら、やっぱり弱いんだ」

「男は女を打ちやいけないんだ」

「力お兄ちゃん、もう帰ろうよ」

「昂は黙ってろ、嘘つき呼ばわりされて悔しくないのかよ」

「悔しいけどさあ、女の子と喧嘩したら凜に怒られちゃうよ」

凜が土手に寝転んだ。

「ねえ、凜。あれって」

「ああ、俺が教えたんだ。女の子には絶対に手をあげるなって」

「素敵な教えだね。でも、あれじゃ負けちゃうよ」

「しょうがないだろ、女の子には口では敵わないんだから。それに男の子同士でも喧嘩はしないように教えているからな」

「でも、どうしようもない時はどうするの？」

「この間、俺が店で不良を追い払った様な事を教えてあるよ」

「ええっ、あの子達にできる筈無いじゃん」

「それじゃ、見せてやるから。可愛い甥っ子達を助けてやってくれよ」

「うん、今そのつもりでいたんだ。行つて来るね」

「宜しくな」

杏が立ち上がり土手を駆け下りていく、それを昴が見つけた。

「ああ、お姉ちゃんだあ」

「ええ、本物の夏海 杏だあ。嘘！」

女の子達が驚いた。

「ほら、嘘じゃないでしょ」

昴がちよつと自慢げに女の子達に言った。

「何を喧嘩してるのかなあ。力りき君に昴たか君」

「何しに来たんだよ。助けてくれなんて頼んだ覚えは無いぞ」

力がそつぽを向きながら杏に言った。

「そうだね、凜に頼まれたんだよ。力君と昴君の強い所を見せてくれるからって言われて来たんだよ」

「ありがとうな」

力が頭を掻きながらそつぽを向いたまま言った。

「そ、それじゃ、そのサインは自筆なの？」

女の子の代表格が聞いてきた。

「うん、私が力君達に書いたんだよ。それと女の子が男の子に暴力は感心しないなあ」

「だって、本当は喧嘩が強いなんて言うから」

「本当か確かめて見てからの方が良いと思うけどなあ」

「ごめんなさい」

「分かれば宜しい！ 仲良くしなきゃ駄目だぞ。凜！」

杏が女の子達に言い聞かせてから凜を呼んだ。

凜が起き上がりズボンのポケットに手をつ込んで土手を降りてきた。

「力、良く我慢したな」

「うるせえよ。当たり前の手をただけだよ」

「プツ、うふふ」

杏が嘖き出して笑った。

「何が可笑しいんだよ。お姉ちゃん」

「凜にそっくりだなって」

「よし。久しぶりに俺が組み手の相手をしてやるところからでも打ち込んで来い！」

「ふんだあ、もう凜なんかに敵うもんか」

「それじゃ、俺の体に1発でも打ち込んだら欲しい物を何でも買ってやるよ」

「約束だぞ」

「ああ、かかって来い」

力がいきなり凜めがけて子どもの物とは思えないような鋭い蹴りを打ち込む。

それを凜は難なく受け止めた。

その後も上段、中段、下段の蹴りや突きが止まる事無く繰り出されるが凜は尽く受け止めていた。

「凄い、凜の言った通りだ。これじゃ男の子でも敵わないや」

杏が女の子達を見ると口をポカーンと開けて呆気にと取られていた。しばらくすると力の息が上がってきた。

「よし、昂も一緒にかかって来い」

「うん」

昂が眼をキラキラと輝かせながら凜に向かっていく。

凜は2人が同時に攻撃しても難なく受け止めていく、時間差で攻撃されてもまったく息も上げずに受けた。

しばらくすると攻撃し続けている力と昂が肩で息をするようになった。

「はい、今日はここまで」

凜が2人の攻撃を受け止めて言った。

「くそ、やっぱり凜には敵わねえや」

「ああ、楽しかった」

昴が満足そうに笑っていた。

「ねえ、力。なんで杏が力達の家に住るのよ」

さっきまで喧嘩していた女の子が聞いてきた。

「凜が連れて来たんだよ。なんでなんて分からねえよ」

「お姉ちゃん、凜のお嫁さんになるんだよねえ」

昴が無邪気に言った。

「えっ？　そ、それはどうかなあ」

杏が突然そんな事を言われて戸惑っていた。

「力の叔父さんの友達なんじゃん。明日、友達に夏海　杏に会って  
しゃべったって自慢しよう」

女の子が少し自慢げに言った。

「凜のお嫁さんじゃないの？」

昴が不思議そうに凜に聞いた。

「昴、お姉ちゃんが良いよって言えばかなあ」

「えっ？」

杏が驚いて凜の顔を見ると素知らぬふりをして。

凜が力に千円を渡した。

「力、千円やるから皆でアイスでも買って先に帰れよ。お釣りはち  
やんと持って来るんだぞ」

「凜の奢りだあ。アイス買いに行こうぜ」

力が昴と走り出した。

それを女の子達が追いかけて行く。

凜はそれを優しく見ていた。

「ねえ、凜」

「あつ、痛たたたた」

杏が凜の腕をつかむと凜が腕を押さえた。

「ええ、どうしたの？」

「あいつ等、加減て言うものを知らないから全力で打ち込みやがっ

て」

凜がシャツの袖を捲くると2人の攻めを受けていた腕が赤く腫れあがっていた。

「うわぁ、痛そう」

「痛そうじゃなく痛いんだよ」

近くにあった水飲み場の水道で腕を冷やした。

「でも、あの子達も凄いいけれど凜も凄いいだね。あんな攻撃受け止めて」

「喧嘩に明け暮れた頃があつたからな」

「ふうん、雷神の頃かぁ。その頃の写真とか見て見たいなぁ」

「実家にあるはずだぞ」

「それじゃ、見せてね」

「探してくれ」

「ええ、面倒くさい」

「面倒くさい言うな」

「いつもの私の台詞だぞ。あつ、また凜に誤魔化されるところだった。私が良いよって言ったらお嫁さんにしてくれるの？ 本当なの？」

「そんな事言つたか？」

凜が惚けてバイクに向かって歩き出した。

「言つたもん」

「さぁ、帰って飯だ。飯だ。杏、帰るぞ」

「もう、凜！」

「置いて行くぞ」

「馬鹿！ 凜のいけず！」

杏が立ち止まり拳を握り締めて唇を噛み締めていた。

凜が振り向き杏に向かい歩いて来て、いきなり杏を肩に担ぎ上げた。

「何するんだよ！」

「帰るんだ。日が暮れてきたから」

「この、人攫い！ ロクデナシ！ 鬼畜！」

杏が大声を上げて騒ぐが凜は構わず土手を上がって行く。

「降ろせ！ 降ろしてよ！」

凜が杏をバイクのシートに降ろして座らせた。

「中途半端な気持ちで連れて来た訳じゃないと言ったはずだぞ」

「でも、不安なの。怖いんだよ」

「どうして欲しいんだ？」

「それは……」

杏は戸惑っていた。

もう少し、もう一步を踏み出したい。

でも、亜紗が言っていたあの言葉『凜にとって男女のそう言う事はとても大きな約束なんだ』そして凜のトラウマの約束。

確かな物が欲しいでもそれは凜にとっては大きな負担になってしま  
うのではないか？

その所為でまた、凜に何かあればその時は2度と戻らなくなつてしま  
うかもしれない。

そんな事を考えていた。

「えっ！」

凜が優しくキスをしてきた。

「り、凜？」

そして、杏の目を真っ直ぐ見つめキスをする。

深く長く。何も言わず抱しめるでもなく。

「帰るぞ」

「うん」

それから凜と杏は何もしやべらなかった。

凜の実家に着くと3人の甥っ子が待ち構えていた。

「凜！ 遅いぞ」

「もう、お腹ぺこぺこだよ」

「お姉ちゃんも早く！」

「おっ、悪い悪い。俺も腹ぺこだあ」

楽しく、そして賑やかに食事をした。杏はとても嬉しかった。

こんなに大勢で食事なんてした事が無かったから、凜は笑顔で陽気に話をしながら食事をしている。

家族の団欒をこんなに感じられるそれだけで幸せだった。

食事が終わり順番に風呂に入り凜の家族は2階の寝室に上がって行った。

凜と杏はダイニングの横の居間で寝る事になった。

「長い1日だったなあ」

凜が横になり伸びをした。

「ぶかぶかだあ」

「当たり前だ、俺のパジャマが良いなんて言うからだ」

杏が凜の胸を枕代わりにして横になった。

「だって、凜の匂いがするんだもん」

「防虫剤の匂いじゃないだろ」

「もう、意地悪」

凜は何か考え事をしている様だった。

開けっ放しになっている窓の網戸の外からは虫の鳴き声だけが聞えていた、心地よい風が部屋の中を通り抜けた。

「なあ、杏。不安な気持ちにさせてしまっただけで申し訳ないと思っている。少し時間をくれないか、俺自身もどうしたら良いのか分からないんだ。ちゃんと向き合っているつもりなんだが時々自分が自分で無いようで戸惑ってしまう時があるんだ。ヨンナーヨンナーで行かないか、俺は杏の事が好きだ。でも10年以上も人と深く係わるのを避けてきた、それは己の弱さからなんだけれど、杏の事を大事に思えば思うほど怖くって不安になってしまっただ」

「ヨンナーヨンナーってゆっくりって事？」

「ああ、そうだ。少しずつだけどトラウマも無くなってきたと思う。それに杏が側にいてくれれば大丈夫な気がするんだ。情けないな、いい歳した男が」

「そんな事ないと思う。凜でも不安になる事があるんだって思った

「何だか安心しちゃった」

「普通のおじさんだぞ」

「おじさんじゃないよ、凜は凜だもん。でも契約書なんて紙切れじやなくて、もう少しだけ先に進みたいなあ。少しでも良いの確かなものが有ればそれだけで凜と繋がっていただける気がするの」

「La promesse légale か……」

翌朝、杏が目覚めると凜の姿が無かった。

「ふぁーあ、あれ？ 凜は？」

杏が伸びをして起き上がるとアコーデオンカーテンが開き凜の妹が顔を出した。

「杏ちゃん、起きた？ 良く寝てたから兄貴が起きるまで寝かせて置けって言ってたから」

「あつ、おはようございます。ええつと」

「ああ、咲<sup>さき</sup>で良いよ。名前言ってなかったね。兄貴はあんな性格だからね」

「咲さん。凜は？」

「出かけたよ。なんか電話がかかってきてスケジュールの打ち合わせとか言ってたけれど」

「そうなんですか」

「そのままが良いから。朝ごはん食べちゃってね」

「すいません。片付かないですよね」

「良いの良いの気にしなくて」

杏がダイニングに行き朝ごはんを食べ始める。

「いただきます」

「しかし、兄貴がねえ。娘みたいな女の子を好きになるなんて」

「変ですか？」

「そうじゃなくって、もう誰ともそう言う関係にならないんじゃないかって思ってたからね」

「そう言えば、咲さんの旦那さんって」

「ああ、あいつは仕事馬鹿だからね。昨日も泊り込みで仕事してるんじゃないかなあ」

「そうなんですか」

「でも、良かった。兄貴にも恋人が出来て。これで一安心だ」

「安心ですか？」

「ええ、兄貴の奥さんと娘さんの事は知っているんですよ。あんな事になってしまってから兄貴は人が変わった様になっちゃったからね。それに杏ちゃんみたいに可愛い子なら自慢できるしね、なんてったって超人気アイドルの夏海 杏だよ。でも、お姉ちゃんとは流石に呼べないよね、百歩ゆずっても年の離れた妹が関の山かなあ」

「それじゃ、私がお姉ちゃんって呼んでもいいですか？」

「うわあ、それ良いかも。ずーと妹が欲しかったんだ」

「でも、皆さん私を普通の女の子として見てくれるんですね」

「杏ちゃんは杏ちゃんですよ。まあ、これは兄貴の受け売りで兄貴から教わった事なんだけどね。人は見かけや職業や地位で決め付けるなつて。昔、兄貴が暴走族をしている頃は家にそれこそ毎日の様にいろんな人が来てたの最初はとても怖かった。でも話して見ると皆優しい人達ばかりだったの礼儀正しくつて、まあ見た目はヤンキーなんだけどね」

「でも、周りの人は」

「そう、世間の目は冷たいよね。先入観があるから、それでも近所の人もだんだんと理解してくれたよ。皆、本当は優しい人だもの。それに兄貴が決して人様に迷惑をかけるなつて、笑っちゃうでしょ暴走族がそんな事言うなんて。それに無駄な争いを兄貴は好まなかったの、頭同士で蹴りを着けて時には力でねじ伏せる事もあったけれど、それは本当にどうしようもない時だけ。そんな兄貴だから慕って来る人が増えて大変だったんだよ。でもとっても楽しかったんだ、その時に人を見る目、人の本心を知る事の大切さを教わったんだと思う」

「咲さんも一緒に？」

「まさか、私は普通の女子高生だったよ」

「でも、いろんな事知ってるから」

「それは、旦那が雷神の特攻隊長だったからね」

「素敵ですね」

「ありがとう。でも、杏ちゃんはこれからどうするの？ アイドルは続けるんでしょ」

「まだ、何もこれからの事は決めてないんです。移籍のゴタゴタで映画の撮影以外の仕事はキャンセルになっちゃって」

「そうなんだ、でも兄貴も大変だよな。社長だもんね大企業の、それと杏ちゃんの事務所の仕事とか」

「でも、本社の仕事はしなくても大丈夫だからって」

「それでも、公の場所には出席しなきゃいけないでしょ。杏ちゃんだってこれから仕事も入ってくるんだろうし」

「そうなんだ」

「ええ、杏ちゃんそうなんだって。まあ、仕方が無いか昨日の今日だもんね。でも早くどうするか決めないとね、これからはあまり会えなくなる可能性もあるんだし石垣島にも居られないだろうしね。あんな遠くじゃ仕事にならないもんね」

「えっ……私、咲さんに言われるまで何も気付かなかった。ただ凜と会えただけで嬉くって」

「兄貴なら何とかしてくれるよ、きっと任せておけば大丈夫。でもね杏ちゃんにしか出来ない事もある筈だよ。私から1つだけ忠告よ、心のままに素直にね自分が1番どうしたいのかが1番大切なんだよ」  
「私は、凜といつも一緒に居たい私の願いはそれだけなの。今の私には凜しか居ないんだもん」

「そうか、杏ちゃんのご両親は事故で亡くなっているんだっけ。杏ちゃんも大切な人を目の前で失っているんだよね、兄貴と同じ痛みを知っている。だから惹かれあつたのかもしれないね、ごめんなさい嫌な事思ひ出さす様な事言っただけ兄貴から話を聞いたの。そして兄貴も杏ちゃんと同じ様な事を言っていたわ」

「えっ、凜がなんて言っただけですか？」

「あいつには俺しか居ないんだって、どんな事をしてでも守ってやらないといけないんだって。もう何も失わせたくないって」

「そんな事したら凜が、また倒れちゃう。私そんな事もう耐えられ

ない」

「杏ちゃん、言っただけよあなたにしか出来ない事があるはずだと」

「私、決めました。凜さえ側に居てくれたら他に何もいりません。パソコン貸してください」

「ええ、どうぞ」

杏がパソコンを立ち上げて自分のブログの管理画面にアクセスして新しい記事をアップした。

その記事は杏の決意の表れだった。

「それで、本当に良いの？」

「私、友達も出来なくて1人ぼっちで『アクアマリン』や『グランプ』を読んで頑張ってきたんです。そして物語のヒロインになった。もう他には何もいりません」

「そう、少しいいかしら」

咲がパソコンでサイトを開いたそのサイトはオフィス AQUAのホームページだった。

「咲さんこれは」

とても綺麗なホームページだった。

澄んだ青い水が揺らいでいてそこにオフィス AQUAの文字が浮かんでいた。

「はい、これがログインに必要なIDとパスワードよ、新しいあなたのブログの。兄貴から預かったの渡してくれって」

「でも、私はもう」

「いいじゃない、事務所に所属していたって可能性は無限よ。2人っきりの事務所なんですよ」

「ええっ、それも凜が？」

「うふふ、違うわよ。皇の叔母様ならやりそうな事だから。皆、兄貴の事が好きなのよ」

杏が新しいブログにログインして新しい記事を書き込んだ。

登校日で学校に行っていた甥っ子の3人組が帰ってきた。

「ただいま！ ママ！ 凜は？」  
「居ないわよ」

「ええ、また黙って帰ったのかあいつ」  
「あいつじゃなくて凜でしょ」

「あつ、お姉ちゃんが居る」

「と言う事は、凜はまだ居るんだな」

「杏お姉ちゃん、遊ぼうぜ」

「そうだ、土手で遊ぼう」

「お昼ご飯を食べてからね」

「はい」

「それじゃ、杏ちゃんも着替えてね」

食事をして杏が咲の短パンを借り凜のＴシャツを着て髪をアップにして土手で遊んでいると、凜の黒いバイクがやって来た。

「ああ、凜だ」

朋が気付いて4人で凜に駆け寄った。

「杏、そろそろ行こう」

「うん」

「ええ、帰ちやうのかよ」

「しょうがないだろ、仕事があるんだ」

「それじゃ、指切りしよう。必ずまた遊びに来るからね」

杏がしゃがんで3人に向き合った。

「約束だぞ」

「うん、約束」

杏が3人と指切りをして、凜の後ろに乗り実家に向かった。

「兄貴、時間なんだね」

「ああ、お袋達に宜しくな」

「これから、どうするの？」

「ナンクルナイサー」

「そうだね、兄貴と杏ちゃんならどんな事でも乗り越えられるよね」  
「困った事があつたら電話してもいいですか？」

「良いけど、私は何も出来ないよ」

「私のお姉ちゃんだから」

「そうだったわね。妹、いつでもかけて来いよ」

咲が杏の頭を撫でた。

「うん」

「そろそろ行こうか、ここも時間の問題だからな。後の事は頼むわ、迷惑かけて悪いな」

「いつもの事でしょ。兄妹なんだから遠慮なんか無しよ」

「じゃな」

「杏ちゃん、絶対に離しちゃ駄目よ」

「ありがとう」

凜がバイクを出す。大通りに出ると後ろから「居たぞ」と言う声が出て車が追って来た。

高速に乗り追ってくる車を振り切り30分くらい走ると長いトンネルに入った。

「凜、どこに行くの？」

「海ほたるだ。杏に話がある」

「私に、何の話？」

凜は答えなかった。

海ほたるの駐車場にバイクを止めて上に行く。

外に出ると日差しが強く眩しかったが海風が気持ちよく吹いていた。

「ここってアクアマリンにもグランパにも出てくる場所だね」

「俺が東京で一番好きな場所だからな」

「そうなんだ」

「海を見ていると嫌な事も総て忘れる事が出来るんだ」

「よく来てたんだね」

「ああ。義姉さんに石垣島に連れて行かれる前にな」

「嫌な事って……凜」

「言っただろ昔の話だって、それに2人の隆羅の様に一步を踏み出すのはいつもここだったんだ」

「一步を踏み出す？」

「杏、ブログを見た。本当にあれで良いのか？」

「うん、私は凜と一緒にいたい」

「しばらくは、大変だぞ。すれ違いになるかもしれない」

「それは不安だけど頑張る。凜が私の為に色々としてくれたんだから、私は私にしか出来ない事をやる。それに周りの皆が助けてくれるもん」

「そうだな、今の俺にはこんな事しか出来ないが……」

「何？」

凜が手を差し出した。

杏が凜の差し出した掌を見ると幅の広めのリングが2つ握られていた。

「凜、これって」

「ほら、手を出せ」

「うん」

凜が杏の左手の薬指にリングを填めた。

そして残りのリングをポケットに仕舞おうとする。

「駄目、仕舞っちゃ。貸して」

「面倒くさいなあ」

「面倒くさい言うな。仕舞ったら意味が無いでしょ」

凜が指輪を杏に渡すと杏が凜の左手を取り薬指に指輪を填めた。

「何か文字が彫ってあるよ」

「Promessa eternaと彫ってあるんだ」

「Promessa は約束 eterna は？」

「永遠と言う意味だよ」

「永遠の約束？」

「ああ、そうだ。杏、愛してるよ」

「えっ、凜。今、何て言ったの？もう一度言って」

「杏、愛してる。いつまでも側に居て欲しい」

「本当に良いの？」

「ああ」

「私で良いの？」

「杏じゃなきゃ駄目なんだ。杏は俺じゃ嫌か？」

「私も凜じゃ無きゃ嫌だ！　凜！　凜が良い。凜が愛してるって言ってくれた……」

杏が大粒の涙を流しながら凜の胸に飛び込んだ。

凜が優しく包み込む。

「ゴメンな。今はこんな事しか思いつかないんだ」

「凜が一步踏み出してくれただけで嬉しいの」

その時、鐘が鳴る音が聞えた。

「凜、何の鐘の音なの？」

「あれは、幸せの鐘の鳴る音だよ。恋愛が成就するらしい、行ってみるか？」

「うん、行かない。凜、少ししゃがんで」

「だって、今、叶ったもん。凜、愛してる」

凜が少しだけ屈み杏と視線を合わすと杏が凜の首に腕を回してキスをした。

「これが返事だよ。いつまでも側にいてね」

「ああ、約束するよ」

2人で海ほたるの中を散策していると凜の携帯が着信を知らせた。

「ん？　先輩からだ。もしも先輩？」

「先輩じゃねえだろ！　東京に来ていて顔を出さないのはどう言う了見だ」

「すいません、行こうか迷っていたんですよ」

「迷っていたって何をだ？」

「仕事仲間が一緒なんで」

「1人じゃないのか？」

「ええ、そうなんですけど。これから伺っても大丈夫ですか？」

「仕方が無い、席を1つ空けておくから」

「それじゃ、30分くらいで行きますので」

凜が携帯を切ると杏が冷ややかな眼で凜を見ていた。

「杏、何だその目は」

「仕事仲間って誰の事なの？」

「何か間違った事を言っているか？ 杏と俺は仕事でも一緒なんだから仕事仲間だろ」

「間違つてはいけれどさっきまで……」

「良い雰囲気だったか？ 杏のそんな顔も嫌いじゃないが、ああでも言わないと仕事を手伝わされると思うんだ。たぶんこの間のテレビを見て俺が東京に居ると知ったはずだからな。機嫌を直してくれよ」

「怒つてないもん」

「それじゃ、拗ねているのかな？」

「拗ねてないもん」

「それじゃ、お嬢様。参りましょうか」

「行かない」

「浜松町の先輩の店なんだけどなあ」

「えっ、北口から徒歩5分の？ 雑居ビルの2階の？」

「行かないんじゃないのか」

「えへへ、行く」

笑顔で杏が言った。

「まるでヲタクかマニアだな……」

「ファンと言つて欲しいな、大ファンと。まったくもって失礼だよ」

「誰の大ファンなんだ？」

「仲村…… あっ、凜の馬鹿」

杏が赤くなり俯いた。

「行くぞ」

「うん」

海ほたるを後にする。

バイクで30分程走ると東京タワーが見えてきた。

高速を降りて大通りに出る大門交差点を左折すると直ぐに着いた。

「ここがそうなんだ。雑居ビルの2階って本当なんだ」

「杏、あまりはしゃぐなよ。お前は、夏海 杏なんだからな」

「ああそうだ、忘れてた。凜と一緒にだとい忘れちゃうんだよね、大人しくしています」

杏が照れ隠しに舌を出した、2階への階段を上がり店に入るとアルバイトの女の子が出迎えてくれた。

「いらっしやいませ」

「あの、桜木ですが。オーナーは？」

「よう。桜木、待つてたぞ。ここのテーブルでいいよな」

「どこでも構わないですよ」

テーブルに着いて周りを見ると他のお客さんは1組のみで平日と言う事もあり、ゆっくり話をする事が出来そうだった。

「いつ、こっちに出てきたんだ？」

「4日前ですかね。もう忙しくって大変だったんですよ」

「流石、大先生の言う事は違うねえ」

「先輩は知らなかった訳じゃないでしょう」

「いやあ、そうだな。儲けさせてもらってるよ取材は来るし、ファンの子達は引切り無しに食事しに来るしな」

「それで、俺に手伝わせよう」

「まあ、良いじゃないか今日はそんなに忙しくないしな。ところで仕事仲間がなんでそんなに若くて可愛い女の子なんだ？」

「仕事仲間ですよ。彼女は今度の映画のヒロイン・海役の夏海 杏ですから」

「あの人気アイドルの？」

「はい」

「本当に？」

「ええ、そこで先輩相談があるんですけど。今日、この店を貸切にしてもらえませんか？ 他にも先輩に報告しなきゃいけないこともあるし駄目ですか？ あちらのお客様の御代はお支払いしますから」

「1人前な事言いやがって、島では相変わらずバイトなんだろう？」

「それが、成り行きで皐コーポレーションの社長になったんですよ。凜が名刺を渡す。」

「さ、皐コーポレーションって日本を代表する大企業だぞ」

「そうですね。双樹は会長の娘ですから」

「信じられん」

「俺自身、信じられないですから」

先輩がアルバイトの子を呼び店をクローズさせた。

奥のテーブルのカップルがヒソヒソと内緒話をしていた。

凜が席を立ちカップルの席に向かい事情を説明する。

「すいません、こんな事になってしまつて。お察しの通り私が仲村歩です、今日の事は出来るだけ内密にお願いいたします。後から2人のサインも差し上げますし、何か注文があれば好きなだけ頼んでもらつて結構です。今日の支払いは総てこちらで持ちますので」

「ええ、良いんですか？」

カップルの男の子が聞いてきた。

「どうぞご遠慮なく」

「やったー、ラッキー」

今度は女の子が声を上げた。

カップルは何を注文しようかメニューに釘付けだった。

「それで、他に何の報告があるんだ」

「実は、夏海 杏は恋人なんです」

「誰の？」

「自分のに決まつてるでしょ」

「はあ、小説を地で行くか普通。お前らしいと言えばお前らしいけ

どな、それでこれからどうするんだ？」

「まだ、何も決めていません」

「そうか、それじゃゆっくり話をすると良い何かあったら呼んでくれ」

「ありがとうございます」

杏が不思議そうに凜の顔を見ていた。

「どうしたんだ？」

「先輩、私たちの事あまり驚かないんだね」

「そうだな、歳の差カップルで言えば先輩の所も親子ぐらい歳が離れているからな」

「そうなんだ」

「杏、ゆっくり2人きりで話せるんだ。聞きたい事があれば言うてごらん」

「私の仕事はどうすれば良いの？」

「そうだな、それは杏が決めれば良いんじゃないか。でもブログで決意表明してるからな、何かあれば橘さんから連絡が来ると思うんだが」

「そうなんだ、2人きりの事務所だもんね。あ、事務所って言えば何でAQUAなの？ AQUAって水と言う意味でしょ」

「そうだな、それじゃARIAの意味を知っているか？」

「空気とか雰囲気とか、ゆっくり寛げる雰囲気なお店にしたいからだってオーナーが言ってた」

「もう1つ意味があるんだ。もし空気が無かったらどうなる？」

「息が出来なくなつて苦しくなる」

「それじゃ、空気を意識した事があるか？」

「そんなの無いよ。だって空気であつて当たり前……あつ」

「そうだ、在つて当たり前だけど、無いと生きていけない。何気なくそこに在つて無いと困る場所そんなお店にしたいと付けた名前なんだ。それは、義姉さん、藤崎さん、葛城、楓、柚葉、そして俺達にとつてもな」

「それじゃ AQUA は？」

「人間は空気と同じ様に水が無いと生きていけない、でも空気は探さないが水は探す。時には命懸けで、そうたる」

「うん、そうだね。私は凜が居ないと生きていけない。もし居なければどんな事をしてでも探すと思う」

「それは、俺も同じ事だ。杏が居ないと生きていけない、居なければ命懸けで探し出す。あの人が洒落で付けた名前だよ」

「私にとって凜が、凜にとって私が AQUA なんだね」

「そうだな」

「これからどうするの？」

「腹ごしらえでもしてから考えるか」

「賛成！ お腹ペコペコだもん」

石垣島も夏が終わりに近づき朝夕はだいぶ涼しくなっていた。

「映画のロケが終わってもう1ヶ月が過ぎたんだね。楓」

「そうだね、あまり杏ちゃんとしやべれなかったね」

「しょうがないよ。映画の撮影なんだもん他のスタッフとかもいっぱい居るしね」

「でも、凜さんはまったく顔を出さなかったな」

「そうだね、葛城。オーナーの話じゃ本社の方の挨拶回りしているって言ってたね」

「でも、凜さんが仲村 歩だったなんて。私、今でも信じられないよ」

「凜さんはあまり自分の事しゃべらない人だったし、それに恥ずかしかったんじゃないのかなあ」

「凜さんと杏ちゃん仲良くやっているのかなあ」

「心配だよ、柚葉。すれ違いばかりじゃないと良いんだけど」

「2人なら大丈夫だよ。きつと」

凜が抜けたここA R I Aではほぼ毎日、3人が早く出勤して準備をし店を回していた。

3人が一休みしている所にオーナーの亜紗がやって来た。

「もう、いつも一方的なんだから」

「オーナーどうしたんですか？」

「本社から電話があつて、新しいシェフが来るそうよ」

「新しい、シェフってそれじゃ凜さんはもう……」

「楓ちゃん、このままじゃ大変でしょ」

「どんな人が来るんですか？」

「何でもイタリアから来るらしいの。とても厳しい人だって」

「私、凜さんの居ないA R I Aなんて……」

「柚葉ちゃん、そんな事言わないで頂戴。お願いよ」

「結局、2人は戻って来ないんですね。杏ちゃんも映画の撮影が終われば引退するってブログで宣言しているし、凜さんは本社の仕事で忙しそうだし」

葛城の視線の先にはノートパソコンの画面にある杏のブログがアツプされていた。

「そうね、私があんな約束さえしなければ」

「オーナーそんな事無いですよ。その約束が在ったから杏ちゃんも仲良くなれたんだし凜さんだってトラウマが治ったんじゃないですか」

「ありがとっ、楓ちゃん。柚葉ちゃんと手伝ってもらえないかしら、事務所を片付けないと新しいシェフのデスクが使えないのよ」

「分かりました。行こう、柚葉」

「うん」

亜紗、楓、柚葉の3人は事務所に入って行った。

葛城は椅子に座りしばらくパソコンを見ていた。

「はあ、しかし、これで杏ちゃんのブログも終わりなんだなあ」

「オフィスAQUAのホームページに続きがあるぞ」

後ろから不意に声がした。

葛城は後ろを振り向くこともなくオフィスAQUAをネットで検索し始めた。

「オフィスAQUA? あっ! あった。石垣島の口ケで友達に会えて嬉しかった。皆、元気そうでよかったよってこれ杏ちゃん? それからどうしたってミラノ? ベネチア? フィレンツェ? ローマにナポリ、シチリア? これから心地良い空気の場合に戻ります? って凜さん? ええっええええええ!!」

葛城が振り向き椅子から落ちて尻餅をついたまま大声を上げた。

「何を大声上げてるんだよ。見習いは……」

「葛城君、静かに……」

「ええ！ 凜さん？」

楓、亜紗、柚葉が事務所から出てきて葛城の横に立っている男性を見て固まっていた。

「どうしたんだ？ 幽霊でも見るような顔をして？」

「本当に凜さんなの？」

「楓、ちゃんと足はあるぞ」

「凜さんだ……私、私……ふえんん」

「柚葉、泣く事はないだろう」

「凜、あなたがどうして？」

「相談役から連絡無かったか？ 今日戻るって」

「それじゃ、イタリアから来るシェフって……」

「葛城、何を言ってるんだ。お前。あれ？ またあいつはうるちよるとしやがって」

「ほ、他に誰か居るんですか？」

「いつもくっ付いて居るのが居るだろう。おーい、杏！」

杏は久しぶりにARIAに帰ってこれて嬉しくなり、店を見ていた。

「やっと帰って来たんだ」

その時、凜が呼ぶ声が聞えた。

「はい」

杏が店に飛び込んだ。

「ただいま！ あれ？ 皆どうしたの？」

「杏ちゃんも一緒なんだ」

「楓ちゃん当たり前じゃん。凜とは永遠の約束したんだから」

杏が左の握り拳を突き出した。

「ええっ、指輪？ 結婚したの？」

「柚葉ちゃん、結婚だけが永遠の約束じゃないんだよ」

「あらあら、すっかり杏ちゃんも大人ぽくなっちゃって」

「えへへ、嬉しいな。亜紗さん、ありがとう」

「でも、凜さん。オフィスAQUAって何ですか？」

「見習い君、それは私の新しい事務所だよ。社長は凜で2人っきりのね」

「2人っきりのですか、それじゃまだ芸能活動はするんだ」

「時々だけだね。私、歌うの好きだし、凜もそれで良いって言うてくれたしね」

「そうだな、約束の為に何かを捨てる必要は無いんだよな」

「それじゃ、凜さん。帰ってきたんですね」

「ああ、これから宜しくな」

楓と柚葉が凜に抱きついた。

そこに藤崎が現れた。

「はいはい、そこまで。お店を開けますよ、全員で準備してくださいな」

「ええ、俺もですか？ 藤崎チーフ。イタリアから直で戻って来たのに」

「しょうがないでしょ、杏さんはやる気満々みたいですよ」

「凜、早く着替えて。仕事、仕事」

「面倒くせえなあ」

『面倒くさい言っくな！』

全員が凜に言った。

そして、ARIAでの新しい日々が始まった。

約束は心に打ち込む楔じゃない約束は心と心を繋ぐ絆なんだと。

d o d i c i . i (後書き)

L a P r o m e s s a 約束・完

最後までお付き合いいただきまして

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5965t/>

---

La promessa 約束

2011年9月13日13時10分発行